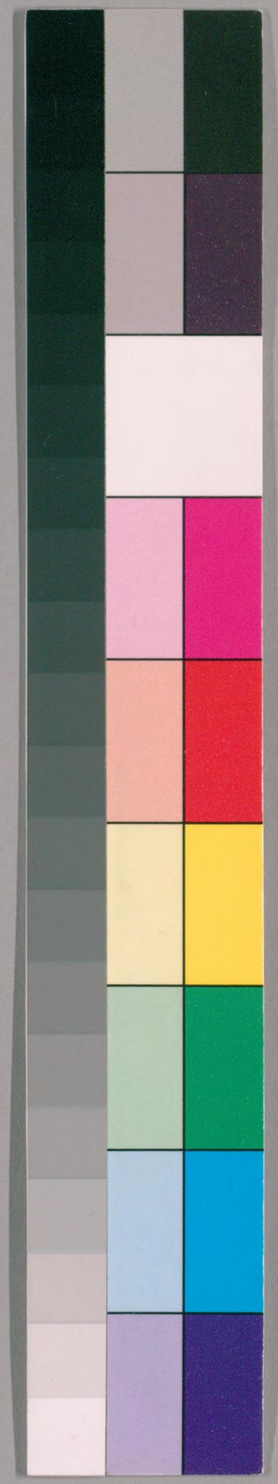
江都古墳志

中

863
3
233



国立国会図書館　　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

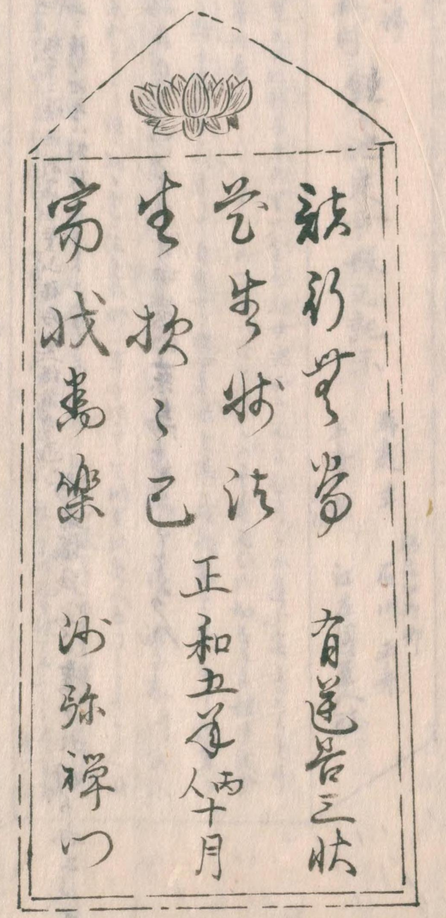
863-233

國立圖書館
昭和 24. 3. 29
寄贈

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

如是石まくれたこし中に五つ着より後辺は墓と云来りしものなり
と云ふ



此石右同所に在り

世に云傳へたる梅若丸隅田川にて果てありしは貞元元年二月十五日也 毎上梅若丸の所を進ぶて来りのべし 此読ヶ池の辺に庵を結び物乗尼と号して仏道をおこなひすましてお見しける如三と世の天元元年二月十五日に此池をうちのぶに梅若丸は安穏のをくらんにしまより此池に毎を持なふ 俗ては所へ物乗大明神といふめしとなや 板本に読池別当在堂山福寿院（総泉寺末）読ヶ池庵ハ別社をくよりしるなり 物乗塚は上に書をたりける毎日は明神 是より別物乗大明神をこ 或人云梅若ハ吉田出羽は息といへども吉田家の系譜になしとなん

読ヶ池宋女塚

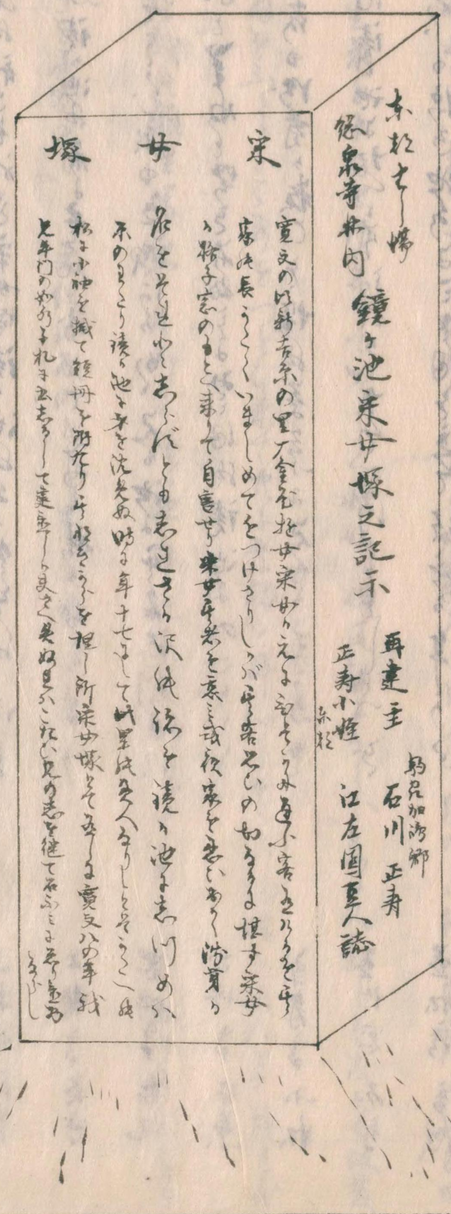
同総泉寺に在り

碑陰に 郡分十三首を満す

東都古し塚
総泉寺井内 鏡ヶ池宋女塚之記示

再建主 駒尾加治郷 石川正寿
正寿小姓 江左国夏人誌

宋女塚



寛文の比新吉原の里ノ金名抱女宋女ゆえに当たる客をいたるを手 客は長うくくいましめてをつけさりしかば手客をいの如なるに堪す宋女 ハ粉子宮のもとへ来りて自害せり宋女年老を恋しき或夜客を忍ひあらく游貧ハ 名をそ是ゆゑ志ふべしとも志しきたる沢は徳を読ヶ池に志しめ 不のもとより読ヶ池に年を沈多数時に年十七にして此里は美人なりしとそうこへ 松に小神を撼て鏡冊を附たり手相をうらを捏し所宋女塚とて在しに寛文八の年我 見年門の如何にれに出志りして建立しに是ハ美女見ふこれに見の志を継て石ふこに居り遠ゆゑ

左に銘を
此れ在り

金之竟合水也相比緑之無緑嬉而不嬉土可以封
言可以已車之所指毎田即是一人十口潭邊無水

読ふ撫し識は昔なりし今よりそふ池は おそうけ　正　恵
今は名のミ名をへいつしかさる沢のさるまでも実に著し愚しき　互　人
日をへ見は嘆渉芳の原なりと池は名のこゝろは係くのこゝろ　唯祐寺寿弁人
何こし身は新こそ神と宋女塚読る池は名 今ゆゑは何と　山林樓 花芳
立むらふ読る池は名に恋ん渉りて見ゆる様なおそうけ　上龍寺 花守
身を拵てうゝむ渉は立識行るめく見る池は平名志川まは　器崎寺 始丸
名はそれと望ねと望き石ぬこよみこ同は読池はのこゝろ　式丹寺 古泉
立し時霞は渉芳の鞍ひを探は菜ふは見ゆるまゝふ也　梁春寺 小松
千こさ同読る池はたつゝうゝかへさてうゝ川ゝとしつき　五竹窓 花寺
千人を忘ふは係る池名はこそ同を立て結ぶる年ゝうゝ　益松房 高成
猿沢は池は宋女はさも行ゝがゝ行ゝと云ての古しは由しき　芝淮館 長雄
石は恋る文字を撫ひく身はまゝてゝ読る池は名うゝ取　岐中舎 花丸
過ぎりしを此菜うつり聖れとも読る池はこそ同おくしき　唯祐寺 川西

補閲

本紀は宋女しるは畧せるものなるべし其かこと假意を交つゝて来く前代不朽なるんを希ふことゞ古
碑は云ふ法ゝも平ゝたゝし義を省き意味は深長も千変なる紙巻て綴なるは彼四字は名ゝこゝろ南畡
先生是之を先生前は十句を作意していましく嬉嫁り碑は誰にならふ意は又親しき友とも故愛
江は唯家堂は苺をふくりこゝろをつとむ来て大に愛嬢を耳ゝしさゝふ神情を深んとて動き云
なん詠り呼意は姫戯は雅生写さや名所は読る池なる江菜は何しをとゝめなひく如りはしさまを
耳ん世ゝも世ゝすを庶幾のこ　文紀は辰のとし夏は書し免

一は文紀元甲子二月殺見加藤の如名牙石川上寿達と云ふは強なるべし碑面を見るべし

又此宴塚は読る池は渕にて夜は本なりしは今読池房は明へ移は本如名と云へ此塚へ札を達
立しは夫さく朽て今はなし依て如名牙石川正寿と云老文紀甲子年石碑を立見は紀を継と云

甲子何も誤り也

梅ヲ山帳ハ清ク池東女ヲ来ヒとつゝて遠しもの此ニて実ハ梅ニ来女ヲ嫁ヲハ行ニ出ヲ来ル故ハ梅ヲ来
家保此ハ清ク池ハ国ヲ在ル不伴ヒ行ヲ家保此ハ志ヲ出ヒ候ヲ此ハ平後いらでハ此ヲ知ヲ知ヲ知ヲ
也ヲ知ヲ又実ヲ知ヲ見ヲ知ヲ知ヲ嫁ヲハ法名ヲ呼ヲ知ヲ知ヲ知ヲ知ヲ知ヲ知ヲ知ヲ
知ヲ知ヲ者ヲ意ヲ此ハ深ヲ要ヲ知ヲ知ヲ知ヲ知ヲ知ヲ唯ハ梅ヲ此ヲ文ヲ満ヲ見ヲ知ヲ知ヲ遠ヲ知ヲ
唯何ヲ知ヲ知ヲ知ヲ知ヲ遠ヲ知ヲ知ヲ知ヲ知ヲ知ヲ知ヲ知ヲ知ヲ知ヲ知ヲ知ヲ知ヲ知ヲ知ヲ知ヲ知ヲ知ヲ知ヲ

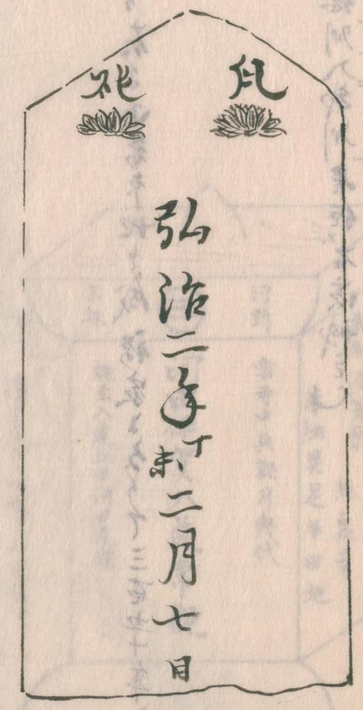
詩解

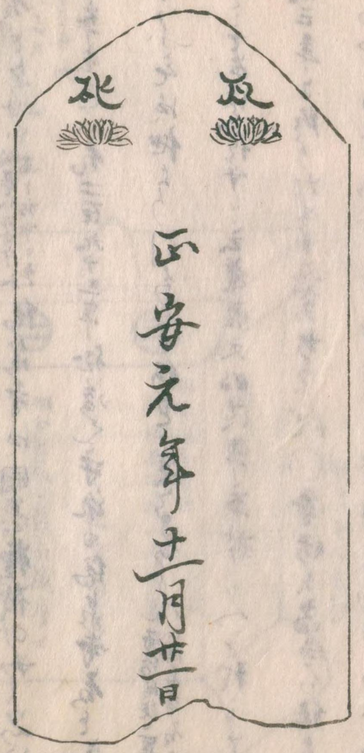
金之鏡竟合水也池相比絲采之無絲嬉而女不嬉土可嫁以對
言可記以己車之南所指毎田畡即是一丈人十田口潭邊平無水

宇都宮弥三郎碑

同徳氣寺ヲ在リ

二牧氏 青石 粒碑之高サ二尺 祝





国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

少し小宮を所に此号碑に殺を著分守津宮の墓と云来りしと云五百三年年紀になる○今にふしん
其寛政の頃墓中に千葉守流を以て総泉寺殿と号せり（開基は学宗和尚と相分に至）総泉寺は開基檀越の如く思はる
然るに右守津宮弘安元年分は弘治三年守流の年去とは凡二百九十三年紀後之守流も総泉寺殿と云
といふとも開基にはいふべきなり又は守津宮は石塔といふ是は他より別名なる何れも実なるなるべし（寺伝は後に開基は総泉寺殿二十）
（兼ぬ之）又板本に守流の子二郎惟流太田道灌を殺して石濱に住すと云道灌文明十八年卒せし人を殺して
千丈なる守流は文明より凡七十二年紀後は弘治三年に終りたるも不審なりけれ○寺伝云当寺は総泉
寺殿千葉守流を以開山開基は明若とするといふとも千丈此等より寺は古く豊島宗御も何宗相
僧なりや知れ候と云右総泉寺殿以後曹洞宗之
又云芳此寺に大竹を此所を所用に対上げたる者に四条市地と成祿家になりて三百五十年紀に
成る精舎之と云道志帳位牌に在しかし

総泉寺殿長山昌懐居士

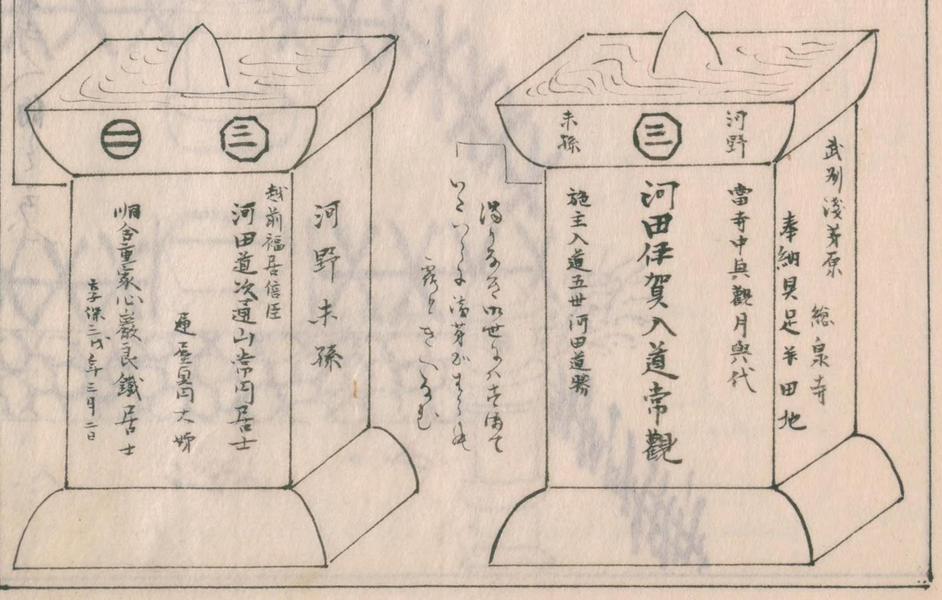
桓武天皇二十四代孫千葉守流公従総州入武州居住ス石濱城主之

弘治三丁巳十一月八日卒

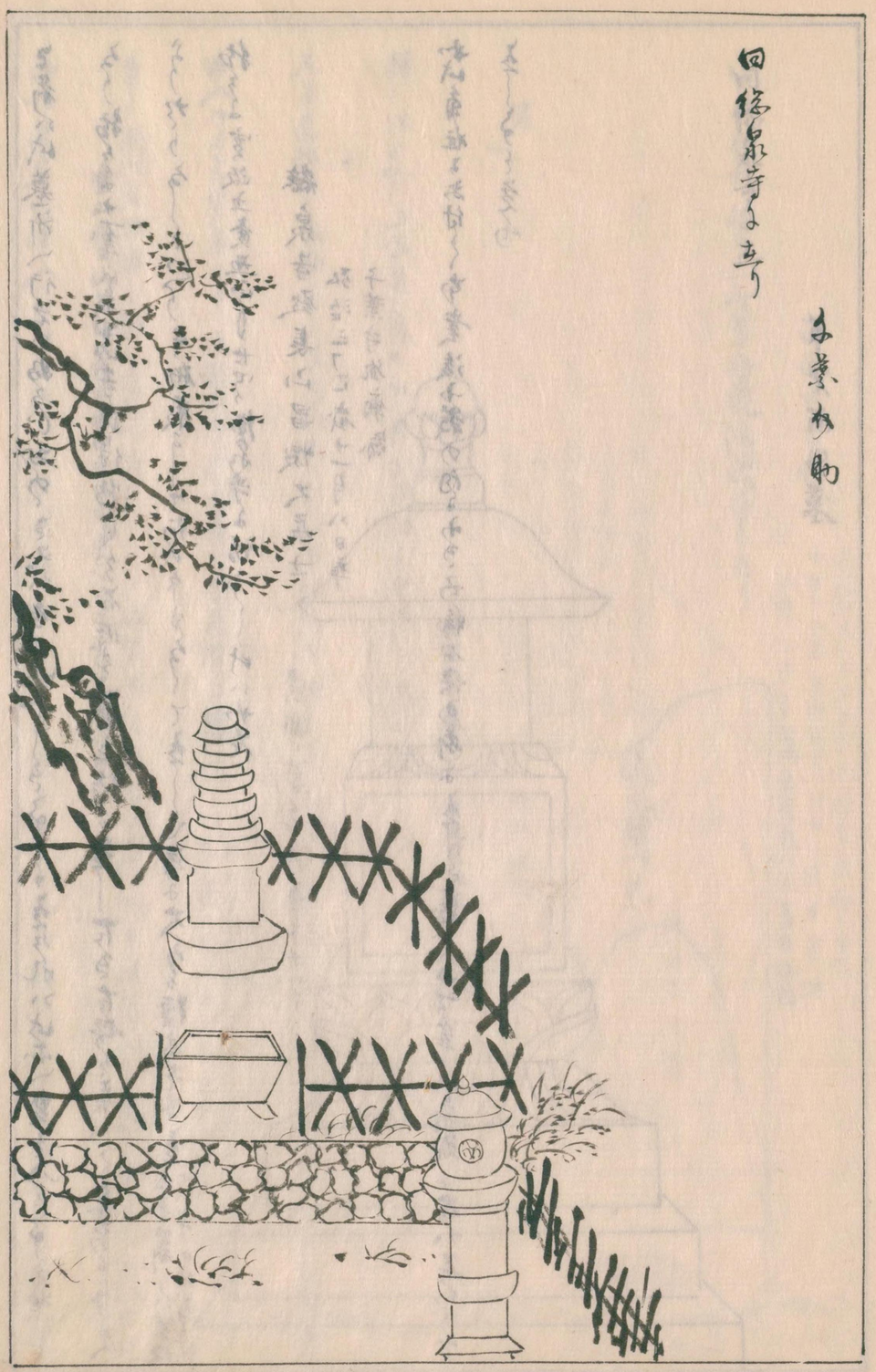
川田入道淺塚

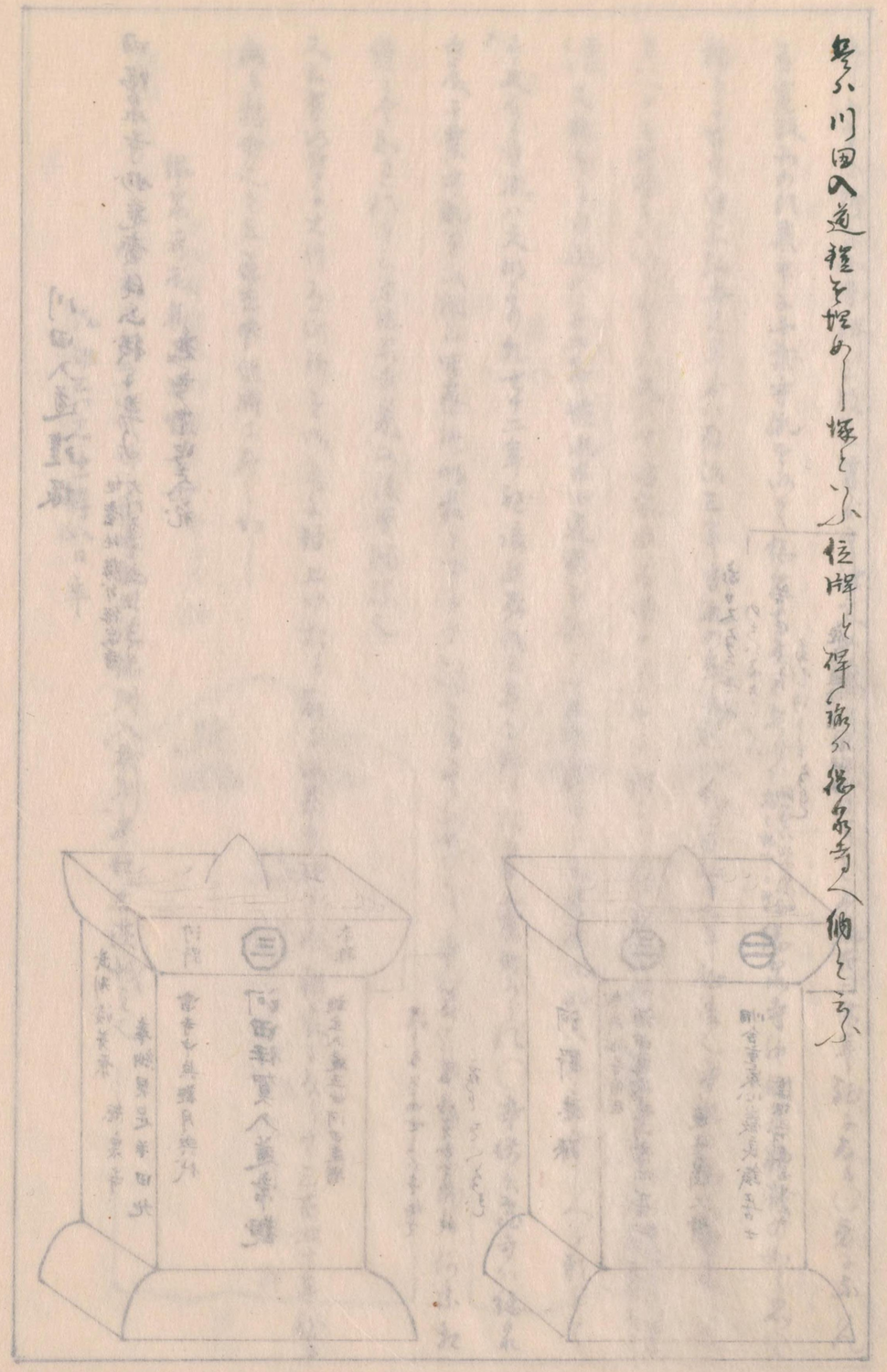
同総泉寺妙亀堂純山様に在り（但堂は接分総泉寺大門通りに西なり）

惠方堂四天祀



国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

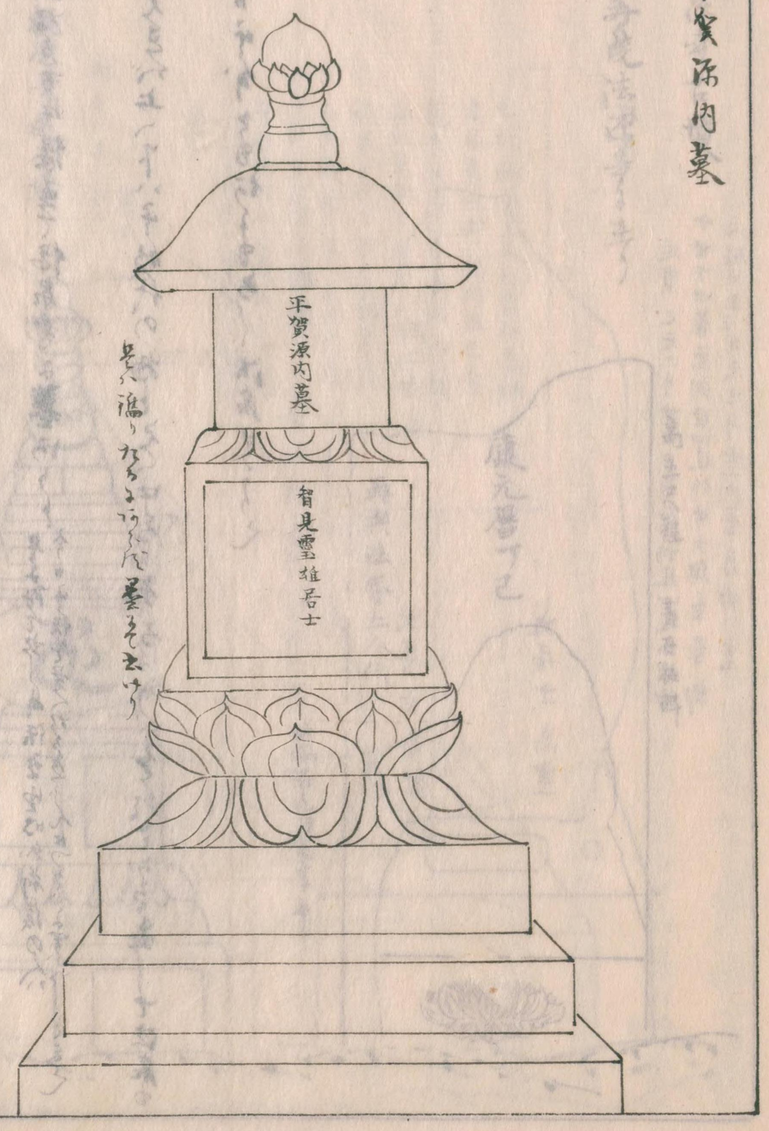
已前ハ此墓所へ行者ハ始るしおのき又ハ色々いやしきものとも五ヶれハ此所へ其を入るゝを禁し
なり猶ゟ十一年以前高寺純信村自分石脇を築き侍ふ其し古き古塔を居つゝ墓ありと寸支
よりたりなしといへり其柳藪にして何の事もなくて五ヶしく浴ハ大なる橿木壱本五十一年以前ハ寛政
十八年の時なり
猶ゟ寛政五寅五月廿四日総泉寺ニ詣ぐし時ハ如是

総泉寺殿長山昌懐大居士
弘治三丁巳歳十一月八日卒
千葉守胤廟跡

如此角柱ニ出付く本堂後小殿の内ニ小さ而輪石塔の前ニ五ヶしく結ぶが十丁年以前頃ニ石ハ居ありて
五ヶしくすと覚ゆ

平賀源内墓

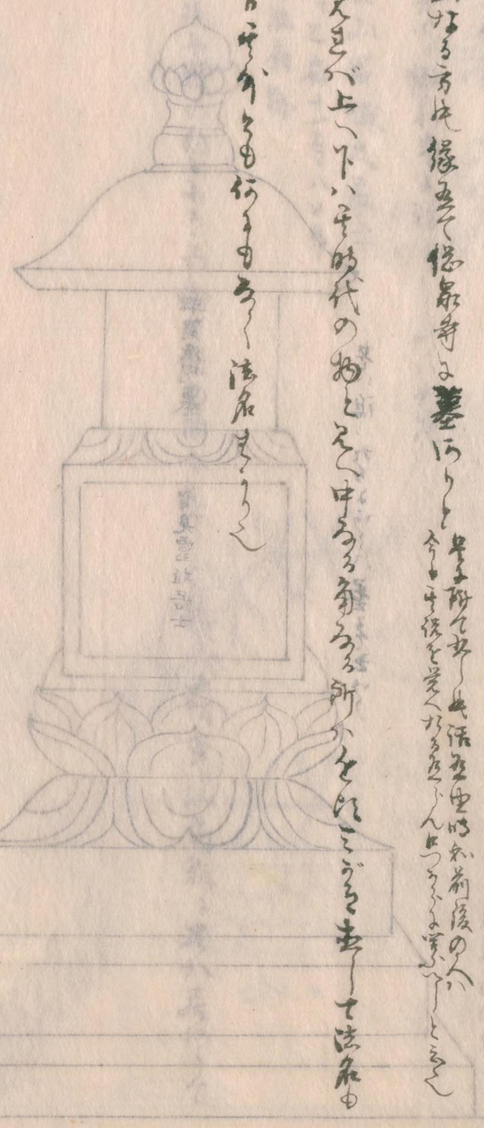
同総泉寺ニ在り



是ハ漏りたるにつゝ居墓をしけり

豊山様ニ此石塔ハ鶴斎松田玄伯所建之平賀墓ニ作るハ非之

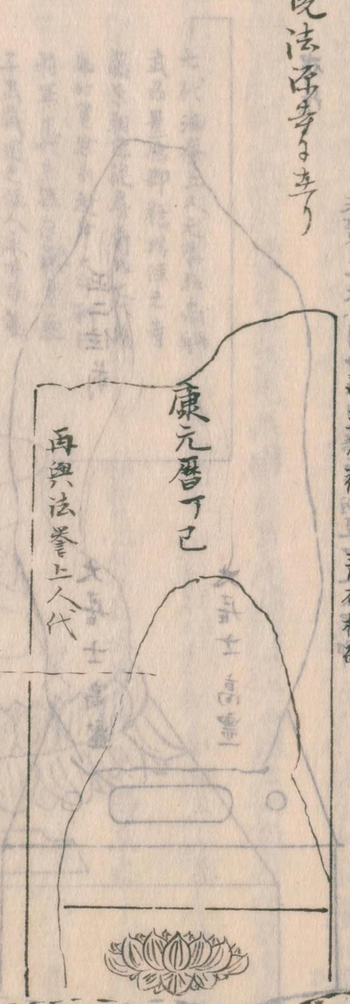
明和前後江都人氏知るなる治安氏称行り其日氏後と云ふに始て稱門急所と体事り氏作を為
秀く俗人氏記明に傳ふ塵学者にてよく何蘭陀氏器物を製制す故あ法て作りをよくせしと云
或人の云ふ寶某と云ふ画なる方氏縁ゑて総泉寺に墓所りと其子附て出し此話至四時和前後の人ハ今も其後を覚へ居るなるべし此つゝに覚へしと云
又云南時右ゝ石塔よく見まゞ上へ下ハ其時代の物と見へ中なる角なる所ハを以こゞる出して法名も
福り知るゆゑ之を年月日其外とも何なるも云ふ法名まゝ



其一

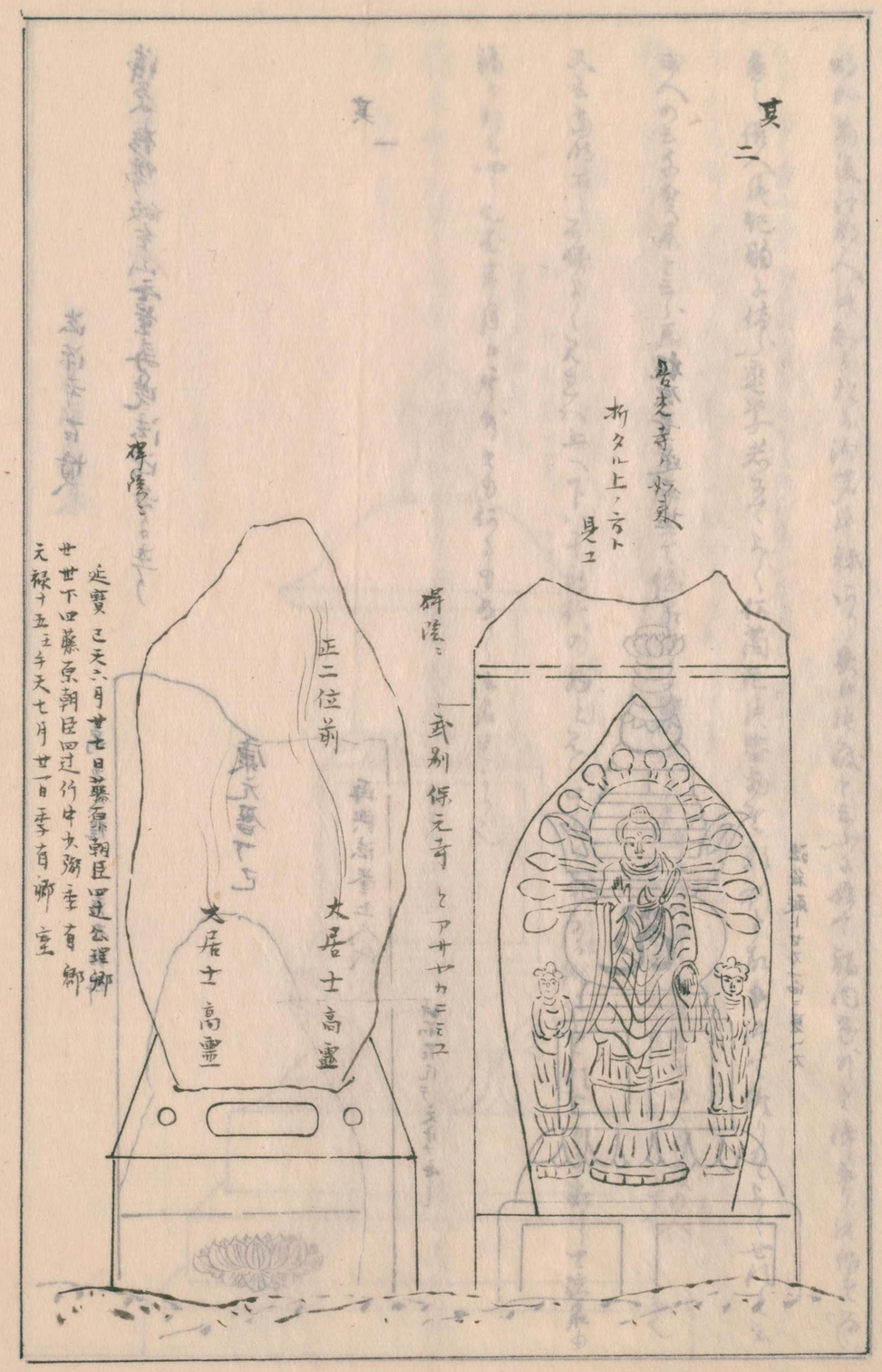
法源寺古墳

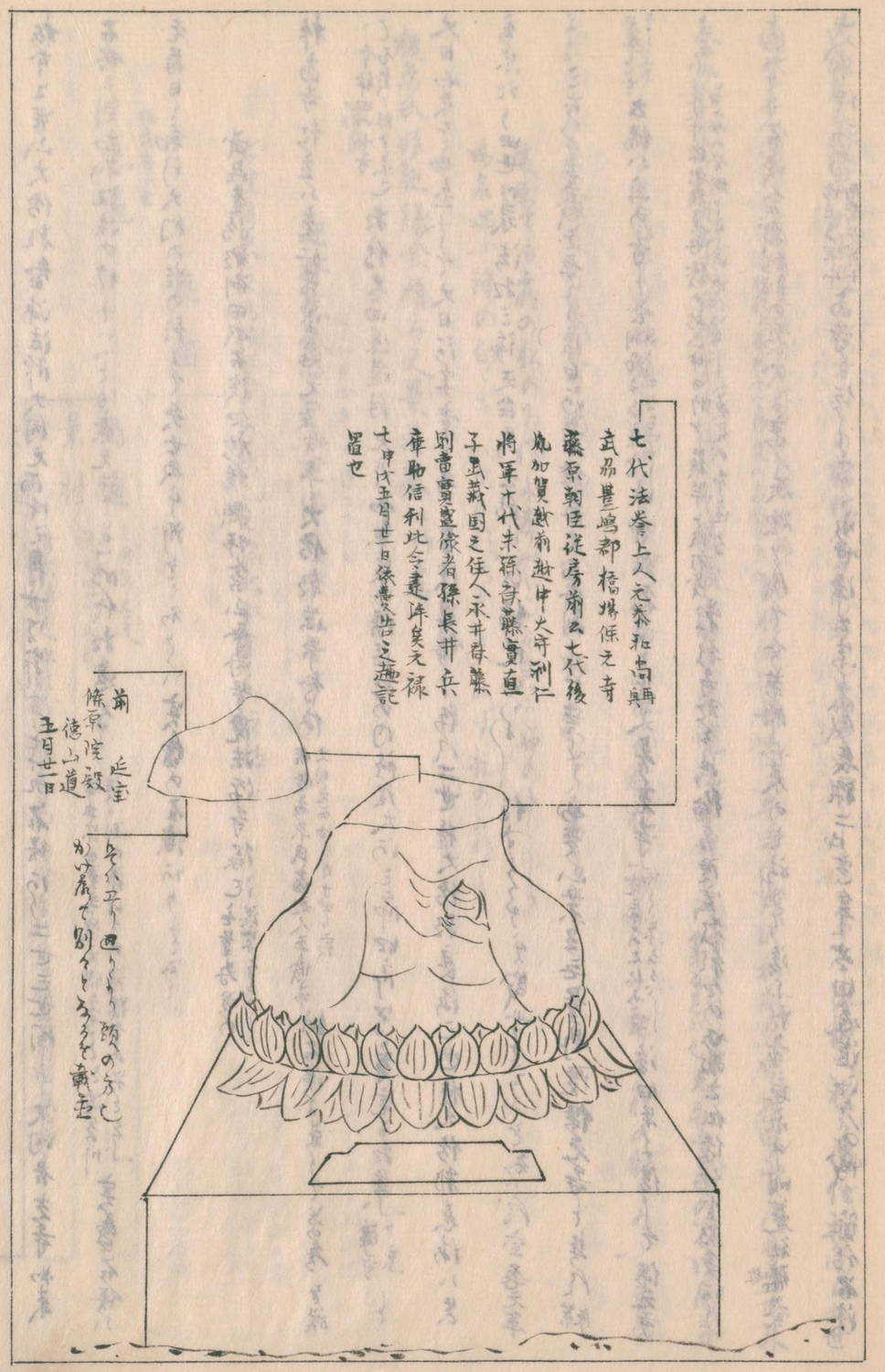
淺草松陽飯倉山無量寿院法源寺に在り



梶原景道石塔

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』 請求記号 863-233
ガラス使用

極楽寺開山大佛殿智海法師大同元丙戌二月廿四日寂年七十九石塔あり二世三世同し　又同名光寺如来
石像を刻む弘法の作といへとも康元二と在り時代相違なり　浄土宗無量寿院元祥光寺と云浄名川後ろ渕の傍にあり浅猿堂の名とす　寛政四石像八
光厳日と勅額大門の額の額にて失せ数多所をうしなふ　實盛の石像なりとぞ

武江豊島郡荊田村石浜今揚梅郷仏堂山無量寿院法師寺縁記　無量寿院の縁記なるべし

極楽寺起立は光仁帝宝亀元庚戌年大佛殿法界智僧　俗姓藤原氏南殿人平城帝大同元丙戌三月十四日寂　其名石浜に来りて荒廃を従
今神田の小寺にあるを称す之　相模太田道灌丹後守藤原家の傍在所の内館大河に近く田舎高野に手宅をおき候へは浄寺と云ふ
大日如来を安置して大日阿字義を集し石浜道場と称し二世權大僧都良海三世權大僧都慈梅八生
天宗たり四世以来法相三論天台真言之時宗の僧徒あり　住するもの出家世とゝふを知らへ宝亀元年
より三百八十余歳を歴て後白河帝保元元丙子創して寺とし妙光山無量寿院保光寺と号す
如来とす　古仏は此寺と云川りよりちる寺とかくなるへし　中古弘行寺と号す文禄光寺　一説三寺の名仏なり候くならるへし　浅田氏に従して保光寺
と云ふ建久中源頼朝奥州征伐の時山中の竹を以旗竿と成私あり　一説家の右側と云ふ此地にいつし人東岳の本道なり　相行寺地にも住給ふ陵宣制紙の比叡山仏像什宝数多あり
といへとも石浜合戦　鎌倉氏の兵火にかゝり灰燼と成て今薬師如来のみ残れり　浅不松帝慶永中明蓮社勝誉
上人両住和尚　號上寺宗山　雨誉上人弟子　当寺に住して永世浄土宗と成　長祿二戊寅年太田道灌江戸の城を築初石浜

の氏家を隅田川の下流に移す今の橋場今戸町是也　当寺は同しく二年今の地へ移る　両住和尚より九世
圓誉上人　圓誉和尚　蓮光観音玉師弟子橋場圓誉　并補院長にて浄家の本根とす　現住の時橋場上寺と寺号改め和尚を中興開山と成す　十世泉
誉上人其弟和尚本山并称号を繕して敗名山無量寿院法源寺と改め　中号は弥陀業なり元和寛永の頃法成寺
と行り　諸寺寛永中大猷殿下隅田川御成の節山中の瓶松を御覧して其名を霞の松とかふなり
名異しる春風夕暮の浅茅原霞の松をいふとなる
寛永ても霞の松の下陰を春やこゝもまかゆのすしき
時名帰ふ謹の言いきん夕日影うつろふいうつす松の霞か

梶原氏将軍鎌倉権守景道墓　北條石塔

法名

迎接院殿向阿弥陀佛湛楽大居士　延文三戊申年十月二十三日

右院号其位牌法誉の所持之元禄寛年中の位牌

系圖

桓武帝十世
忠道
├為通　三浦平大夫
├景村　鎌倉四郎大夫
└景通　鎌倉権守大夫　称梶原太八膳道主の時より鎌倉に居　梶原村同氏焉

豊浦ノ流ノ北ニ榛原城ノ内
村アリ南ニ榛原村アリ此村ニ
榛原城アリ榛原史ノ大刀ヲ
埋ト云榛原史ノ仍然ナルカ

景改 榛五郎 景久 榛原太郎 景長 同太郎 景清 同五郎

景時 同年三諸名戦死

景季 源太郎ニ同

景高 年二ヶ條

景茂 三郎ニ條 五子孫

景國 六郎

景宗 七郎

景利 八郎

景連 九郎 兄弟七人与父同死

実盛墳 僧形の石像を
伝称法蓋遠之 様本実盛法名

藤原院前左金吾従五位徳山道真阿大居士

長井兵衛史正用ハ不能の家譜ニ云実盛の曾孫長井兵衛尉信利ハ正の石碑を保元寺ニ立ツ云
云今尋之信利ハ武名長井の名の人法名道全法師弘安七甲甲年七月十九日卒

藤原院殿前左金吾実盛ハ孫陀佛徳山道大居士
実盛ハ孫陀仏の号ハ様行十三世実要上人の可称院号ハ法蓋が所称之

一光三号石碑 奥ハ大ニ横一尺七寸 二ツニ折ル釈僧上ニ不文ニ可リ

見佛色多衆相具足見諸堂菩薩相具足光明宝林演説
妙法即悟無生忍矣 寛元二丁巳ニ下石裂ル裏ニ
武別保元寺 太田道灌先祖ニ建之ト云 梅ニ太田三郎 義宗ニ云ハ 太年号の偽ニ
再興法蓋元泰代ト 彫ルニハ始メ村より寺内ヘ収ルニ時のなるを 私云始メ村ハ此不明 神の上ニ云ハ収 元泰ハ高山
千年余此一見僧なり 堂ニ偽を作て曰 神ハ称宜ノ智徳から 佛ハ始宜ノ精図次第

大同元年の碑 兵ハ古碑ニハ可ニ云ハ 元年裏 彫ニ見ヘ ルニ 作て 方ニ写シ 無数

大同元丙戌三月十四日入寂
春秋七十九歳

大僧都智海法印

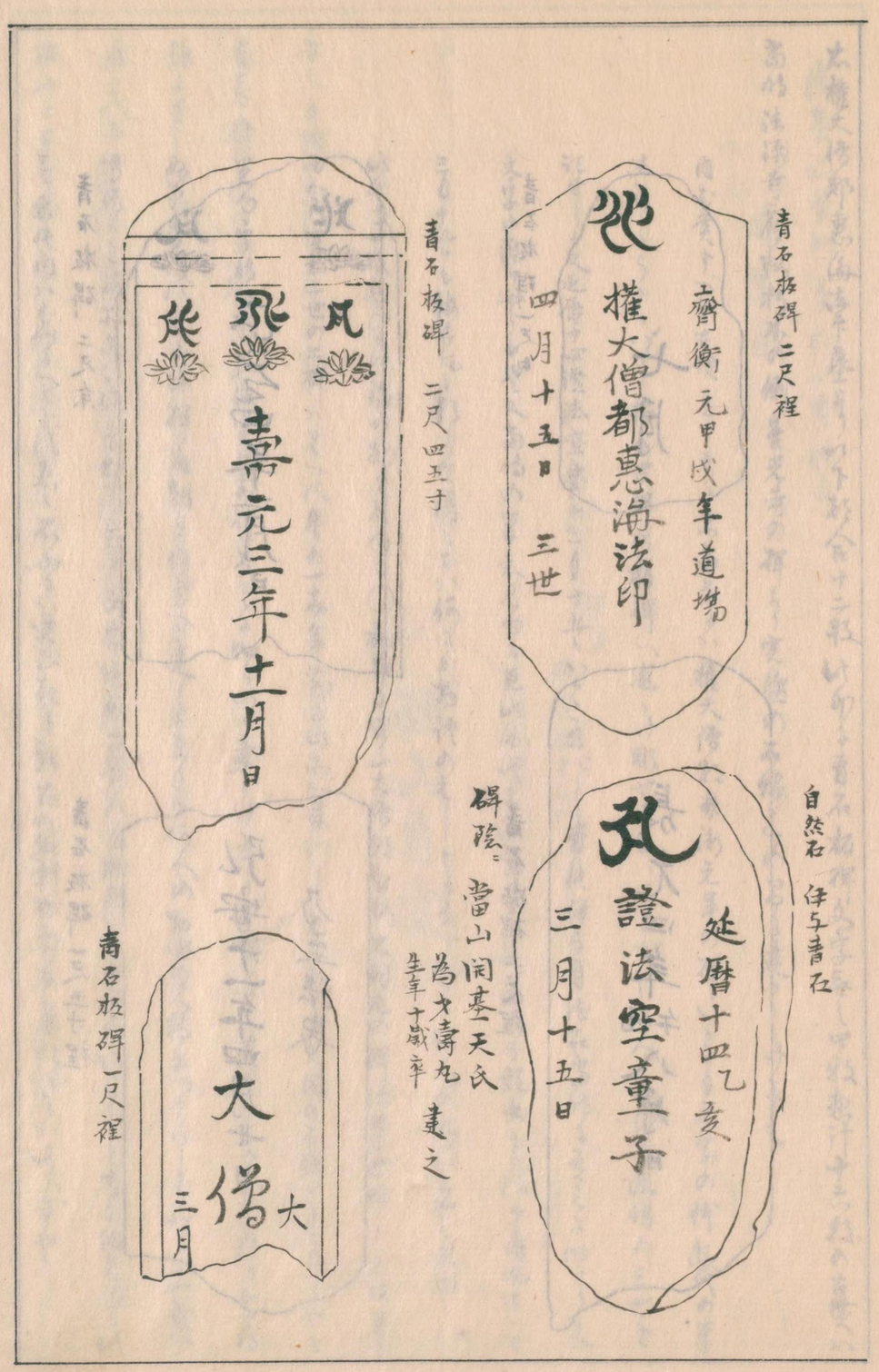
砂尾石濱道場開基 初祖

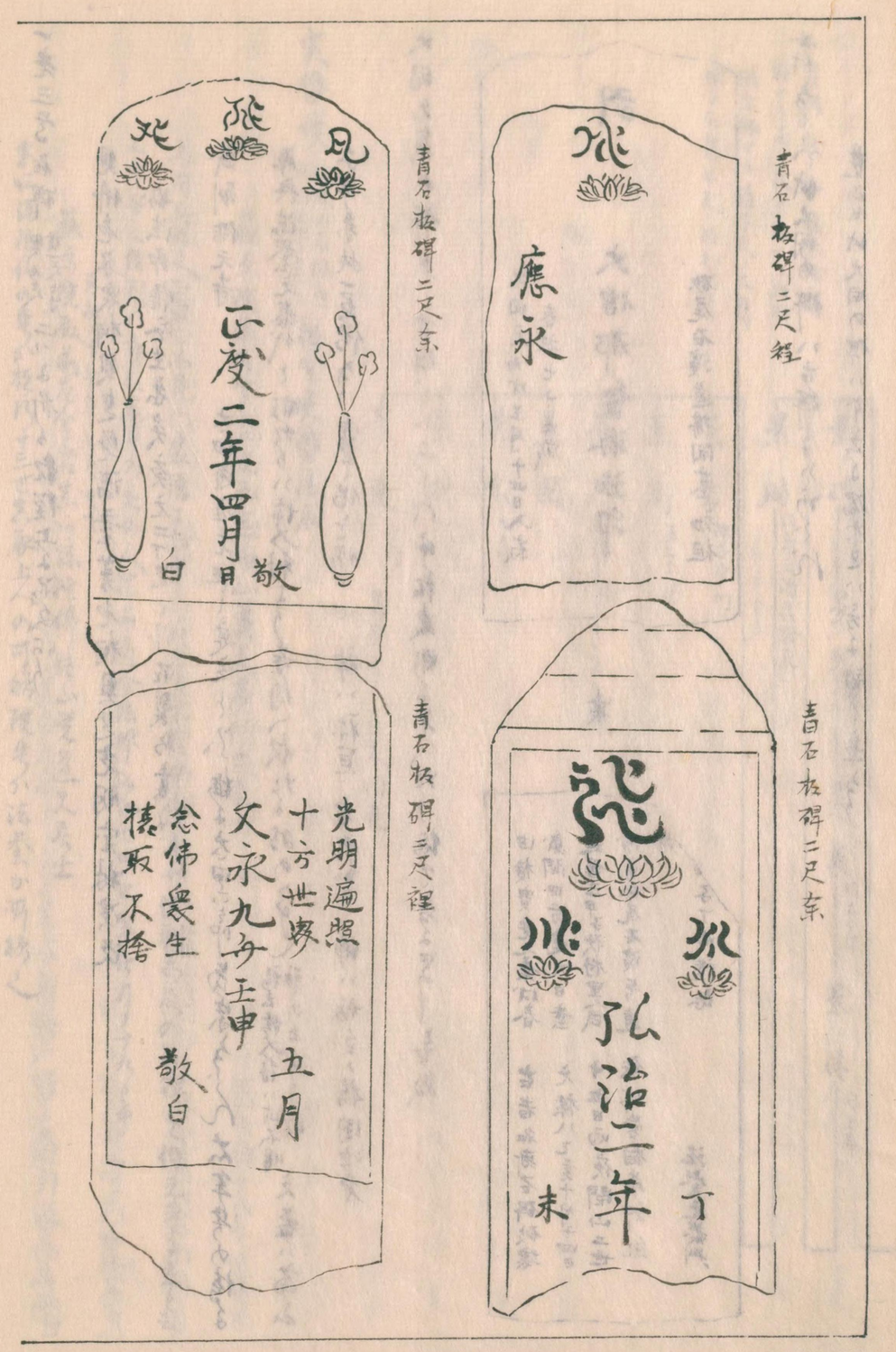
裏

由横賀亀元康戊春 古者名斯石碑破壊
戴間四方建大日堂 元禄八乙亥十月十四日
延暦三甲子秋村里人民 十五日雨夜関山二世
成寺砂尾石濱号道 依瑞夢相承科乱
場 子丁海謹誌 法蓋元泰判

此ニ云ハ此大同の碑ハ古碑ニハ可ニ云ハ
豊山云此大同の碑ハ本ニ云ハ漏ル是ハ方ニ補ヒ遠ニ云ハ

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用



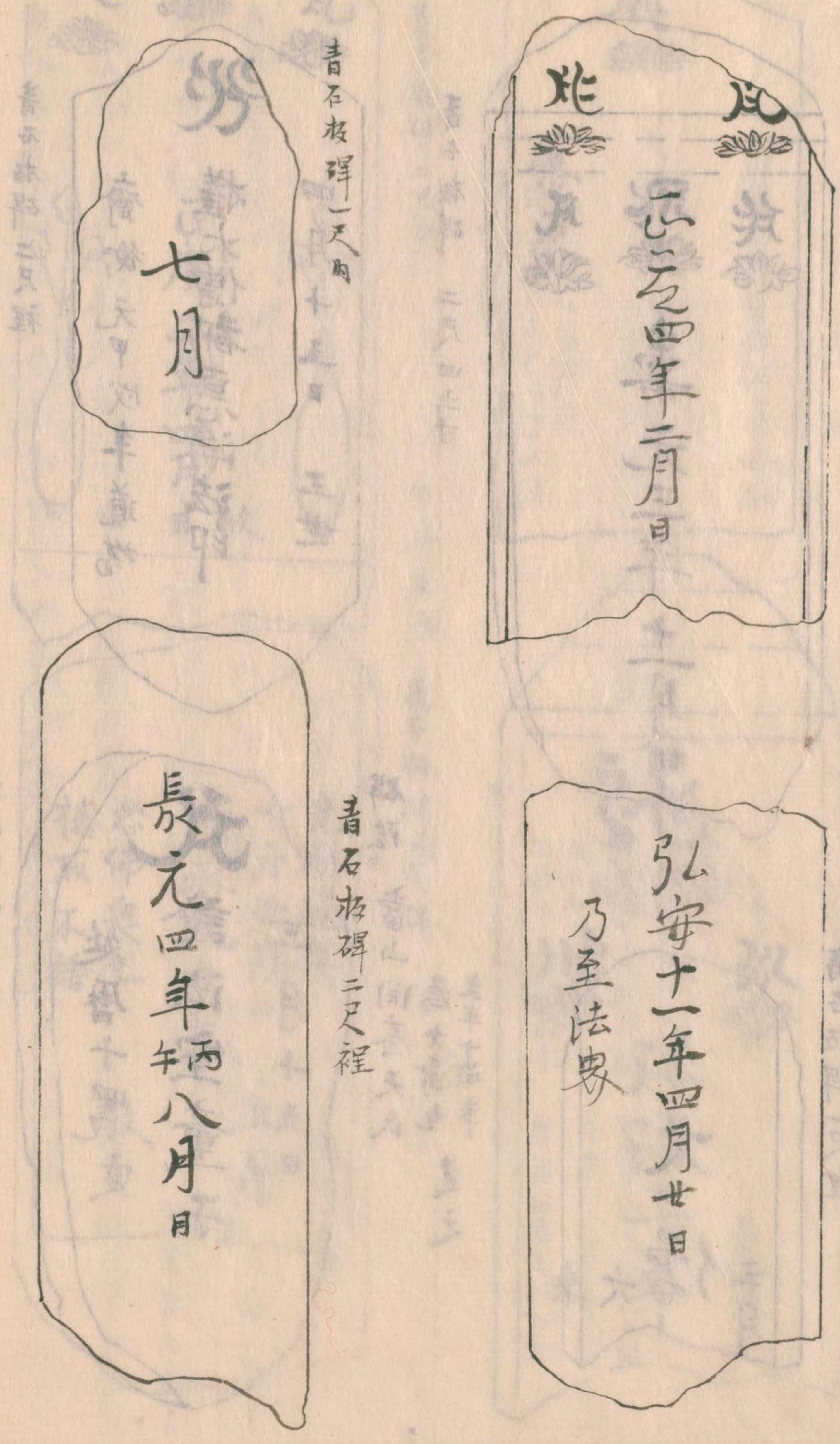


国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

太権大僧都恵海法印塔より以下都合十二枚此外に青石板碑文字無し四枚都計十六枚あり古老の
高僧法源寺境内松林の側普光寺の碑より実盛の石塔との間に建てたりけるとぞ
内を考ふるに古墳なりと云ふ事あるは権大僧都永徳元年の碑いまも文字の体近代の筆
法なるべし左ればこの中に古碑の板碑へ追て彫せしにはあらずや何人か志ありて道場の三世を
記せしか文延慶十四年法寶童子三月十五日とあるべし青石碑当日信心なる者ぞ側して文
文字の論ありしも是文高僧の筆意見るに且此時代に法室童子法尼も疑ひなく女寿丸として
三月十五日も梅若丸に事して後にまた何者かあはれのましくもあらんとて何人の所作なるや更に知らし
此外に一枚追ていけ孫の面も見る○板碑に実山大僧都嘉暦大同元の碑二世三世同じく何ぞと
申ても今ハ実山二世の二碑ハ見えぬ是の一基年号に此ふ見しくあしく大同の石碑に見えずやと
思ひ古時ハ弘法実盛の碑あるを似せて建てけるなり古墳にハ蕪きしかるべしたり今ある
ぬるよ見えし実山碑板別に何ぞ方へ建しもあまくハ何人の好事の人物を知らず似せたるにや或ハ
古僧らしき不らに何ぞ如く字の文字も新古あれど批判いるもまたいふべしともある例なきる此
三ヶ条此内ハまあるべからぬ見るにあらずハ実山在を新古の批判の二つを兼ねたらんハいふべからずや

青石板碑二尺余

青石板碑一尺内



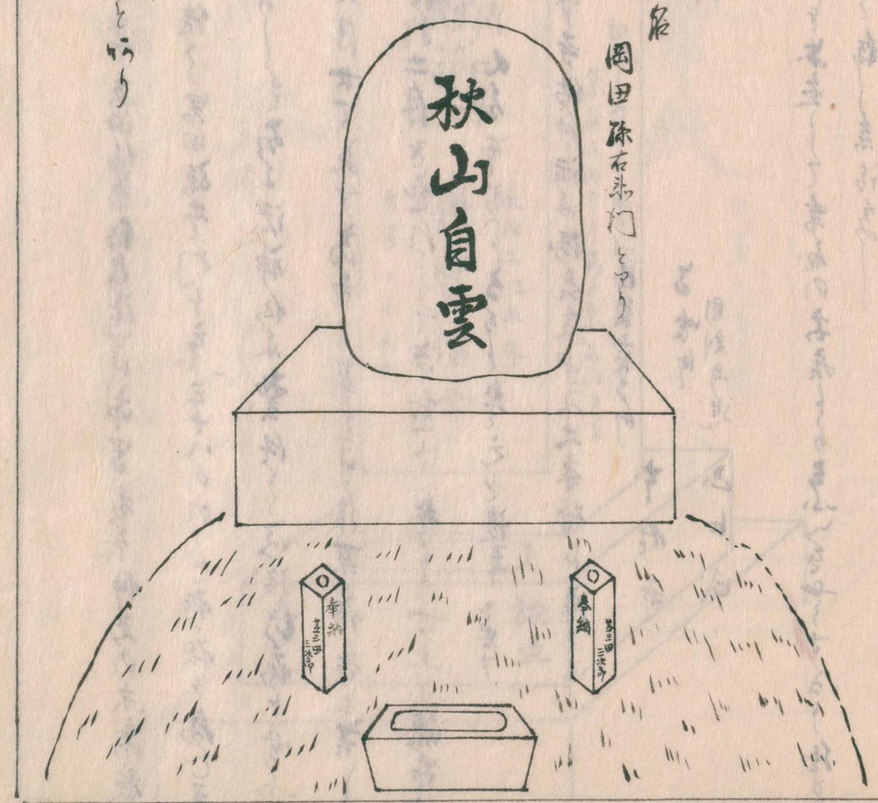
青石板碑一尺五寸程

青石板碑二尺程

或人云ヨネ龍角山下梶原村の梶原塚今ハ石碑なし中ニ何人ハ古塚前の川（高雲川上荒川之）にて百姓ニ掘ルて夜ニ又石塔を毎ニ積ニ失ぬと云ふ又云橋場辺ニ右の梶原石塔ハ今も云傳ふ證と云ふ然ハ元梶原ニ村ニ五十ヶ時せんりうち民間ごとり新ニ石塔ハ自然と多田ニ於ケル道蓋石ニ其と云ふ又他ニ云ふ法原寺草條以前の伝説の傳ハ古塚を集めてうと此傳ふと云ふ いつくにや自然古き寺院のうへに又不ニ分蛇足せしものにや

鳳凰山谷町手杉山本性寺

自雲墓



俗名 岡田孫右衛門とかり

此側に碑を建ル是ハ自雲金神と云り

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

秋山自雲室神緑記　今畧之す

秋山自雲室は楊津氏川邊郡小濱村産にして父田侯中納言隆正卿南望翁京仲光の末裔祝
岡氏千文二公を門に千子吉に傍治に家を建く累田孫右衛門と云ふ三十八の時分に病痾を病む医
療正に手を盡すに除んと曰七年能病に苦しむ故に法神仏に誓祈る後に沒後に病を愛ふる
ものを救ふべしといへり延享元甲子九月廿七日世を辭す高野に葬む其後某病痾に苦し
むること三年自雲は素より志を定めして信教二月を重ねしてより年愈々長り世上に流布す
智者大師曰心能化天と成心能地獄と成心能聖賢と云へり之を證す　下畧す

紀十四年患ひて三年忽死の病苦を分ち寺僧は語に楊貴妃の冥府に入る事を云ふ

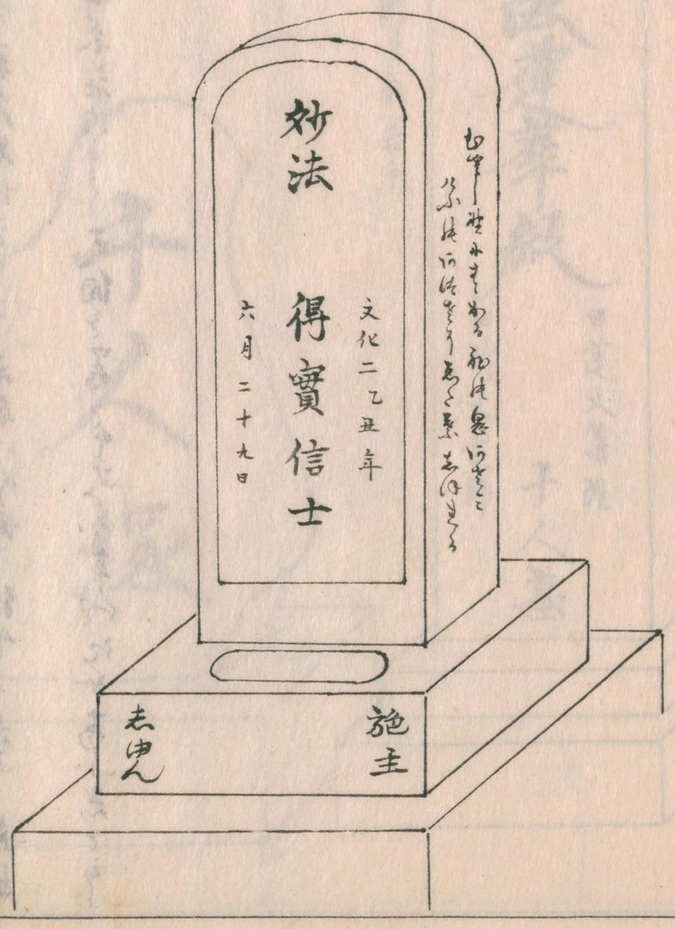
宝暦十三癸未年秋九月

享和二壬戌年十一月再校

今病仏と云ふは寺僧に別に戒名を授くして家祖の霊府に入れ居ると云ふ
とは人と霊神とは云へども病仏と稱し奈語多し

墓碑自清吉墓

浦安新町戒妙光山円光寺に在り



此墳墓は如何建しものなるや記に詳しからず八最後なる辭世とは

鬼塔と清吉傳

清吉は文化の初め世に明し織ふる異名鬼塔と云ふ元来八丁堀に住せし悪漢にて夫婦ふるの数日を強くて後に伊勢大神宮社内にて天網を罹れ其父は年代紀を誤ふ悪と云ふ

太全円光寺に在り

恵方は一尺五尺位

南無妙法蓮華経

日蓮大菩薩

日什大聖師

千人墓

新宮新吉原

碑陰に

寛政十戊午

六月廿六日と見

千人塚

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

多人墓ハ郭中無縁於女なんとは俗ニ近稿の墓とてこれ又多人塚と云ふハ何人なや
刑に逃ふたる者は首を葬るとて塚の前に穴をもふけ蓋まハ院をもふけるを云ふ此内へ
納む無縁の冥福を営むるとてこれ仏名にてハ宮内庭と云人にこそ
此一様の内ハすべて右やうの墓のことなれ又世俗労病の病に首をもふる事ふと
云ふるまたよし其所へ又ハ小塚は京四向院別院まゝハ自分し様の種々
へも納るの俗法なるとなん

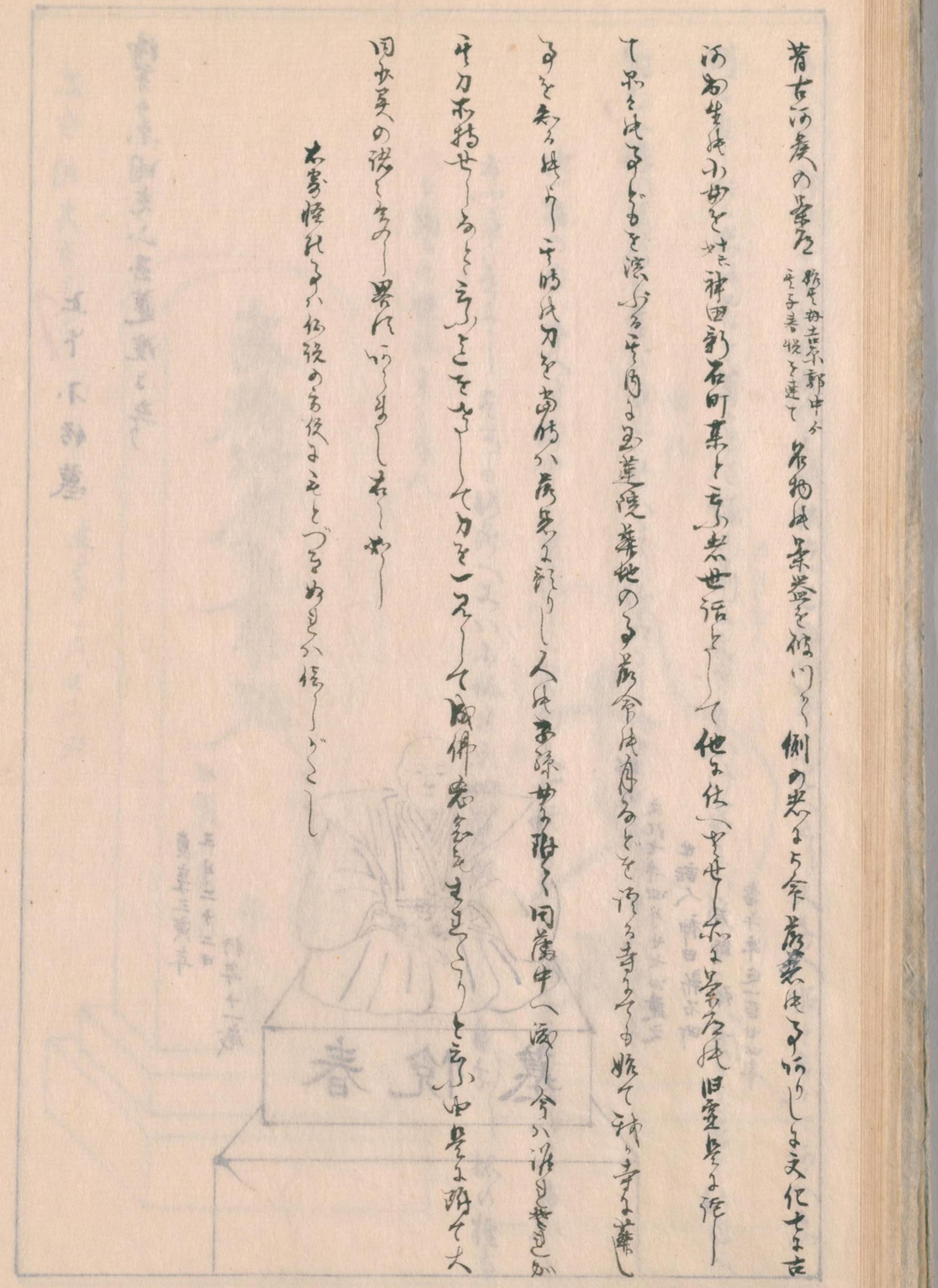
上下小俗墓

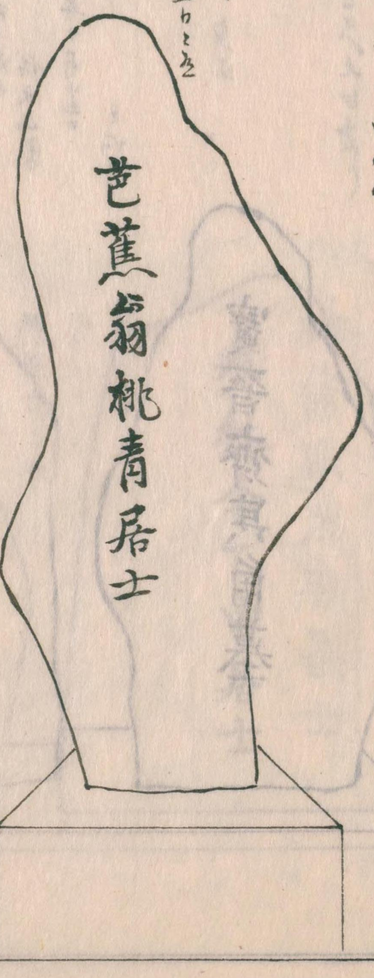
御茅ヶ原周光山玉蓮院に立り

貞享三寅年
三月二十二日
行年十一歳

揮毫
文化七年四月廿七日建之
世話人 神田新石町
瓦師 弥七
當午年迄一百廿四年

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用





昔古河侯の家臣 [illegible] 郭中ゟ 其子善悦を連て 名物は家器を彼門へ 側の老ゟ今 [illegible] 其所ゟ文化七ゟ古
河為生は小田を十六 神田新石町某と云ふ老世話として他ゟ仕へ世せし不ゟ家臣は旧室長ゟ語し
て不ゟ其事どもを演ぶる其間ゟ五蓮院葬地の事 [illegible] 寺ゟ始て 試ゟ寺ゟ葬し
事を知る時にて時は刀を尚時ハ [illegible] 人は [illegible] 同藩中へ流し今ハ [illegible]
其刀不持せしなと云ふことをさして刀を一見して成佛 [illegible] 大
同少笑の説と云ふし畧は [illegible] 如し
右寄恒 [illegible] 伝説の方便ゟ [illegible] 信しがたし

芭蕉翁碑

[illegible] 蛟龍山長学寺 [illegible]
根村川 [illegible] 異人伝

碑陰ゟ
元禄七 甲戌年
十二月十二日と云

芭蕉翁桃青居士

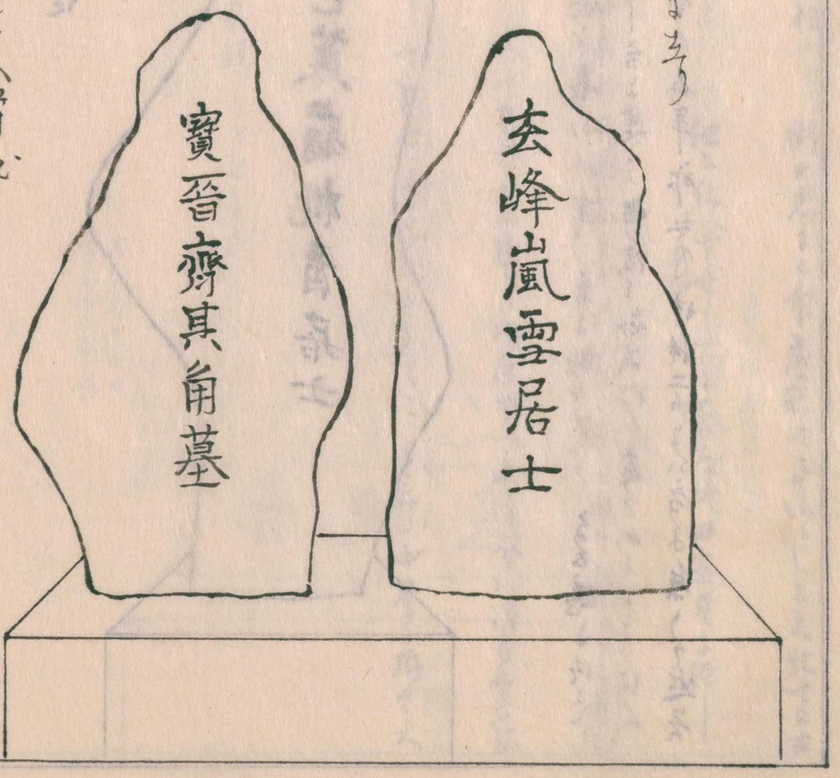
此碑ハ芭蕉翁の門人 [illegible] 角師の徳を [illegible] 塚を建て [illegible] 魂ゟ [illegible]
と云ふ又其角 [illegible] 碑陰ゟ [illegible] 建て [illegible] 何人
[illegible] 碑 [illegible] 又此碑ゟ志 [illegible] 毎年 [illegible] 中は二百 [illegible] 集りて [illegible]
[illegible]

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

玄峰嵐雪
宝井其角 碑

保川春日町蛾龍山長安寺道其塚の右にあり

碑陰に
宝永四乙亥年二月三十日
知友門人建之
佐文山書
宝永四乙亥年十月十三日
とあり



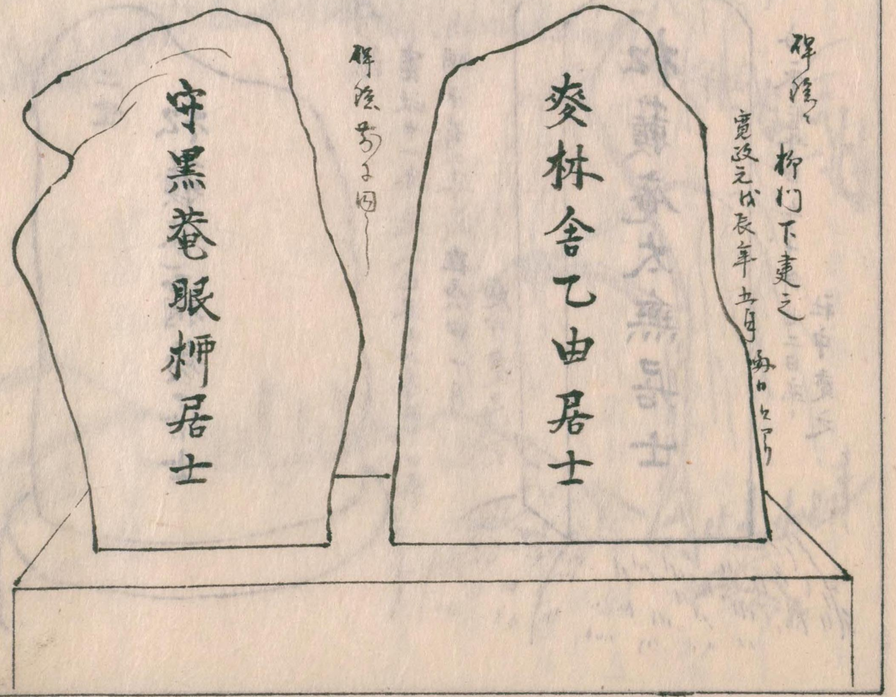
双方とも青石にて高さ二尺八寸花

青林舎乙由
守黒庵眼柳 碑

太田長安寺にあり
高さ双方とも二尺五寸幸り

真石

小龍石



碑陰に
柳門下建之
寛政元戊辰年五月[illegible]日とあり

碑陰に
[illegible]

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

古池の碑陰に

むかしは雲も見る里後の夜の月　夜雪庵 素成

夕汐や登るは月のこゑ　雪牧楼 亀永

うつり行しら玉ちる花に　玉雪庵 子交

安永二癸巳歳四月十二日
深川 親和 七十三歳 書

此所ハ天和貞享の頃世に名高き俳諧師芭蕉翁世をのがれ住し家居の旧跡にて中頃は池也
芭蕉翁古池の吟の古蹟なり池影を遺し碑ハ青苔にうもれ蛙の声もきこえず俳諧ハとにかく
翁の世に在せし所の名を後に書伸庵前ありて古池の句を深く慕ひて汀に生せし柳ハ古偽の旧跡
柳を翁の植させし處に白かねに世に出し世の唱音伸庵の庵中に此庵ハ有後に雪へ譲り立
しに今ハ四世完来の物と成り芭蕉庵の故に日々俳諧や翁の名と云ふ也後の築立らし池泖
まで新しく屋敷もつゞき古池と成し所りと今ハ植作の名を残と成田氏と云ふ中略　江府より
其一翁の旧記にハ多く半は口さへ知る人も少なく中略　年頃を多年営すといへども其未

賛世にと云ふ文翁人の深川古池の旧跡ハ今ハ或武家の屋敷となり芭蕉庵ハ後年旧跡を
慕ひて再興せしと云ふいかがなるべし

梅子板本俳書を考ふるに昔ハ実に翁の旧跡は世に古世代に続きて遠郷に風雪に
残きしたるを古まれ仏是一度佛施せしを再興せしものなれども旧跡は地所ハ今は
庵は名義の文ハ古は古世を書は不知や生活進みて紀すべし或人曰芭蕉庵桃青ハ中興の
祖なり俳諧秋風の時なりや奥羽行脚に思ひ続きふるとき

古池や蛙飛こむ水のおとなりしとす

其後古池の句をもちて俳風を一変して
一字蕉風を発明して今にいたるとも

古池や蛙飛こむ水のおとなりしとす

と改めらるしとと云ふ尚俳諧を嗜む人に問ふべし

要津寺ハ雪中庵蓼太の草創所なり其ハ大かた芭蕉翁の俤を模していとなみて其傍に諸の墓
碑を建しに今ハ蓼太の碑の文字磨滅して読わかりかねし

撒蜜他列郵阿兒要披遲草尼

雪中菴 蓼太

庚子鄒次吉

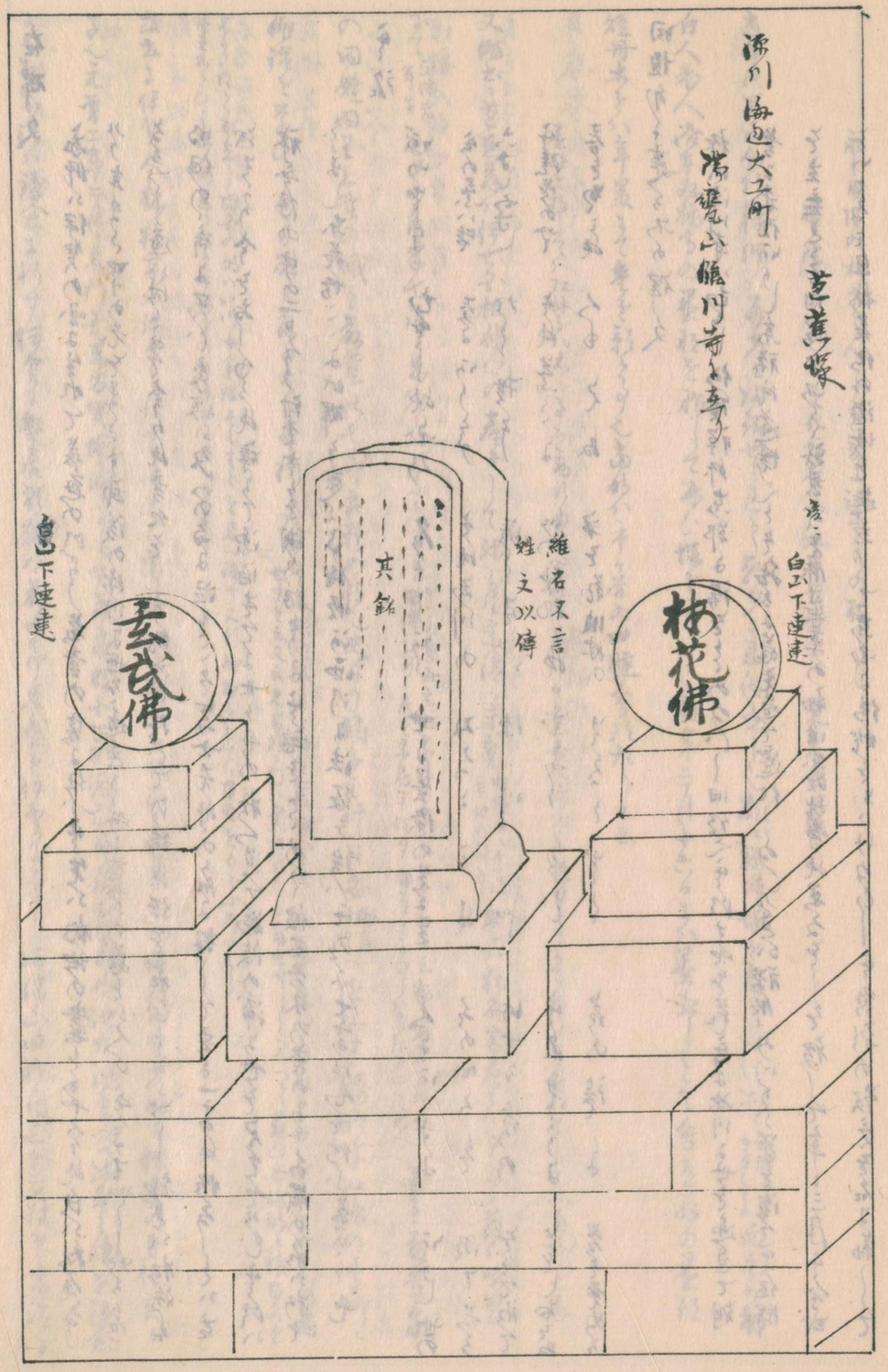
蓼太先生者隠君子也都人士以為金馬待从流亞矣乙未春於崎陽客舘得俳偕歌一章言是先生所著僕不能国字讀故就譯士某得觧觧則與在景中意在言外大非俗品可知蓋僕亦所感因賦一絶寫其意欲顈昇之諸所不辭也

長夏草堂寂　連宵聽雨眠
何時懸月色　松影落庭前

乾隆四十年孟夏望後三日

雲間程敍南

此人の云ふ右ハ五月雨や夜もそらに松の月 蓼太が句を長崎にて清人の需に付けるを解して詩作せしとなり今世にもてはやせしは実に南畝子の作文にも華人の作に出せしものありしと云ふ其後ハ知れず梅の実るにまかせてありしかや其後ハ右の



如く清人作文する所なるべけれども何とし人ハかりそめなりも実をいふせば亀梓城光を澤士
来とハ出ひたるべけれ澤士誰と名を敬すべきものゝ南敬子も亀人の名何とも出ひたるとも亀
梓此名なり其めなり誰と見へ侍らべけれ其を出意しものゝと云ふ又云ふ雲間禅
南敏も心付へきとそ

或人の曰ハ西月面や云そうな掘し力ふ是ハ同心病此句なるとも自を無に蹙
ひし心同しきものなや又南ハ自此ありとる宮上此端なるに来ハいまだ無る歌ハ
うこぶくれすうこそ是等もよく出ひしと云ふ最美雲後二ツもこて所作なし
となり

蓮蕉塚

源川海辺大工所
滞鷺山臨川寺に在り

白山下連連

梅花佛

維名不言
姓文以傳

其銘

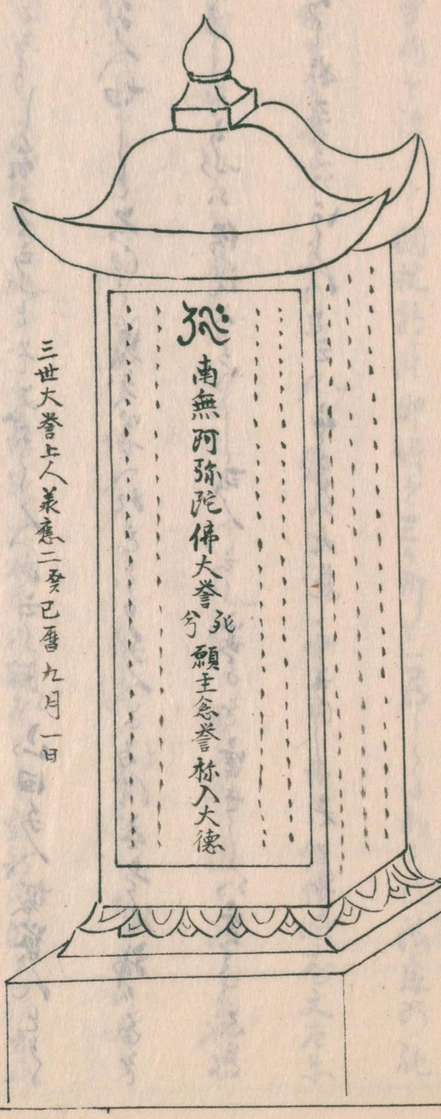
玄武佛

白山下連連

右碑文

山田滝右之門外人供養塔

徐川道本山宝巌寺ニ在リ



ゆゑ無長宗清を告ると云可き休ゝ地に能不をんとゝ居宅をかまへらるべしと或所宗清我に松柱を一枝を折て
地に差して曰若此松柱大蓋前世に居宅を此地に建べしと是年松柱大栄を得たり宗清悦び私家を
賦して以松柱を為氏松柱の号自是始る宗清子孫繁昌後新氏も亦宗清の末と云し（松柱宗説なり）按ニ宗清は我
前当西夜三男孫河内貞雲より五代左ノ門業宗より子之信昭ハ末を称す東福寿永三年六月朔日条下曰
武衛先年孫年左ノ門宗清（左ノ門尉季宗男）平家一族也是亜相下急最初被尋甲之処依病遅留之由被答申
之為定今老下向之由今之業給之故只而未冬急之有亜相被申去遅寿之時命急云々此宗清志
池禅尼侍也平治有事之刻年懸志於武清仍為報謝事之相具可下向給之由被仰送之為亜相被
命之日示此旨於宗清処宗清云今向戦場給者進可候先孫而借業関東之根引為嫡家和事也
平家零落之今冬之向之条尤禄職之由直冬之盛請内存云々

此塚ハ或人の説に血流かりける故にかく名付るなりと云ふ或ハまたいハ
もと高く見ゆる塚ハ右の如くなりたる由なりし濤をくハ刑場の名に自然と
罪人あまた刑罪の所にあつまりしとぞ云ふとぞ又或人の云ふにハ山田某人塚築んとて
九百九十九人迄ためしけるに千人切しと云ひて数度算へけれども千人に満たず是非にて
害して千人の数に満たしとぞ云ふハ俗説なるべし或人の云ふ実ハ寡婦を害せしハ実なる由なり
右由来ハ此ほとりなる所にかく云ひしもの九品と云ひし者也

紀伊国屋文左衛門墓

本所霊巌寺境中成等院に在り此寺ハ同院に何く之を為る正面に

歸性融相信士　　享保十九年四月二十四日　　紀伊国屋某建

如此記せり相伝ふ此寺の住内を読ふに同院紀伊国屋の印塔を三ヶ所と存しけるに彼家の施
主して今ハ無縁なれども石塔をも存せしものなりんと伝へたり世に云ふ所ハ紀伊国屋文左衛
門と伝ふれども正しき証ハ或ハ伝へたるを見ざれども初め文左衛門と云ひ後に或ハ伝を改しにや也
ふと云ふハ或ハ住居ありしを其後云ひけり紀文と同じ事にて此あたりにありしものなり
んか此紀伊国屋文左衛門ハ人の知る処にして豪家の材木の問屋にて富有の聞えありし
下総三丁目一丁ハ此人の住居なりしと云ふ其性質涼達にして金銀を湯水の如く
費しける其の行状揚屋町と云ふ所にて家茂寺の方にて年始の夜金をおしまぬ

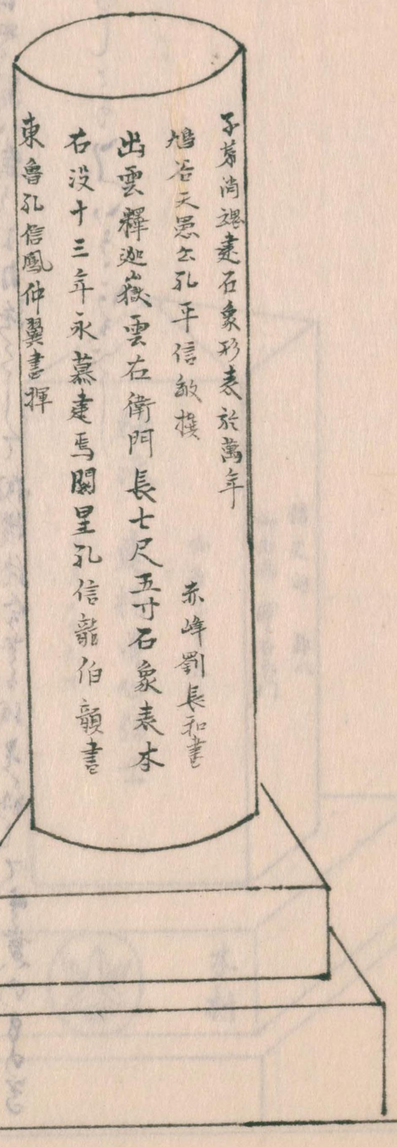
豆まきせしるは人々に携見して世に紀文大臣と稱ひ二條の妙家寒ひて深川に住ひ能
諧を書子其角に学ひ手山と云ふ

或俗云に紀文は一代に家を起し又一代におとろふ其後ひきを稱んとて千數ことをいはを數ひ多
かふ盛りて入り又はかりしかるは云とは為ひとも おもむきは此ことは其の世にか又能芳
苦して後子孫相乗して散ひ紀文一代の見識とは天地ひんこくす

寂逝ヶ嶽碑

深川寄岡八幡宮社内にあり

右ハ万觀房叢之前に建



後の方に在り

天明七年春二月朔天建置茅真鶴崎衛門
出川降氣新出大人身長丈餘旅月日絶倫角觝
相撲鳴於深川一朝化去姓名尚傳空存其地

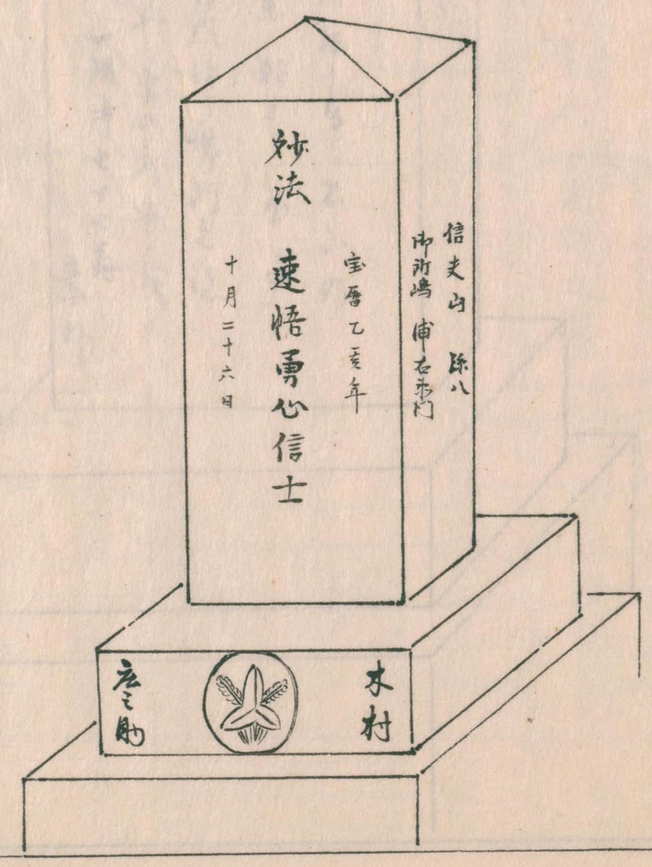
国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

新廻り嶽雲右衛門傳

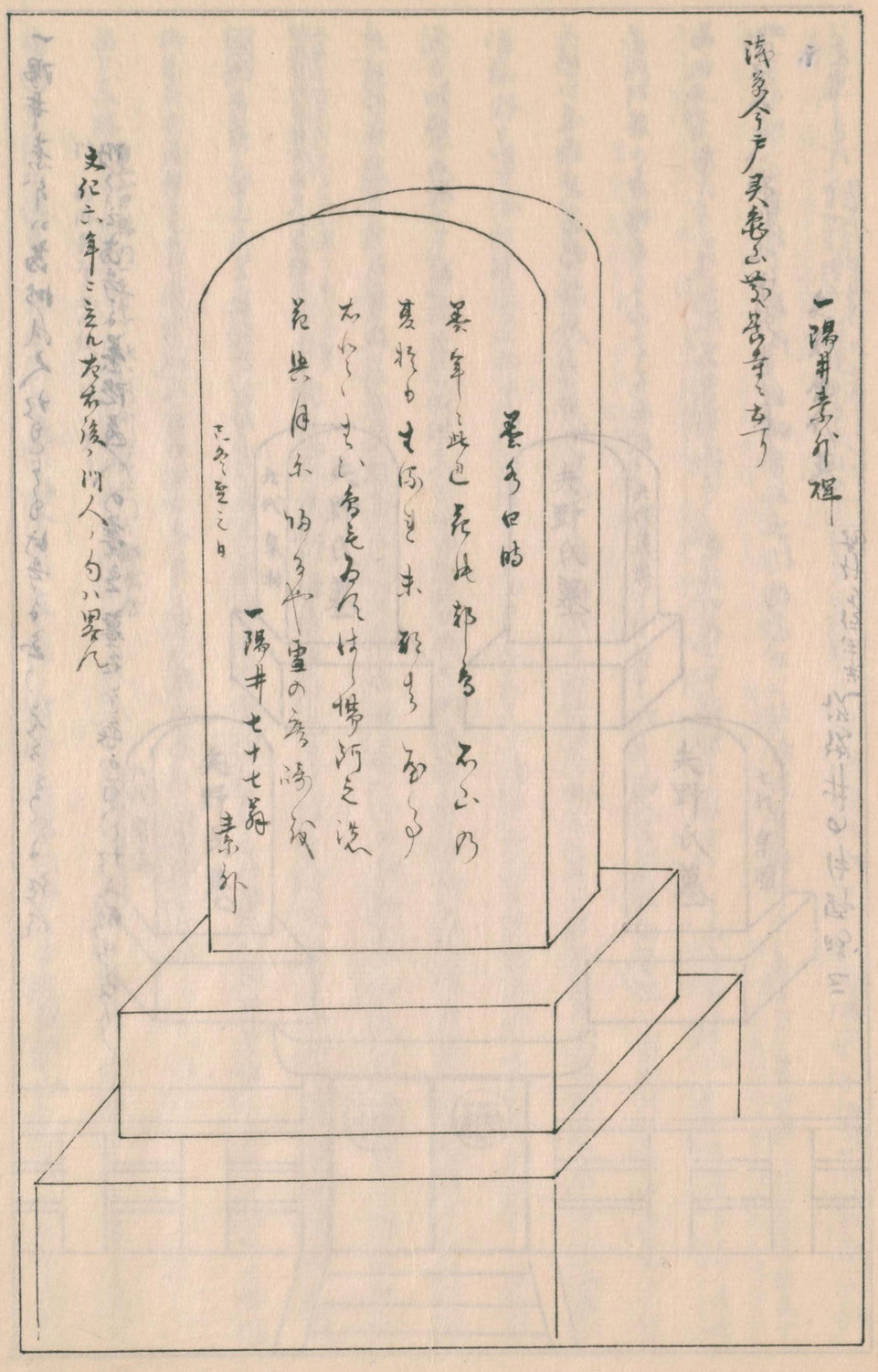
新廻り嶽ハ明和の頃世を明し雲見彦（松平出羽守）に抱相撲なり此程しハ千貫先鶴崎右衛門十三四忌に前に建る所也（新廻り嶽ハ前警なり先鶴も始ハ前警迄しと云）右の高さハ新廻り嶽に如ケ永家し之墳墓ハ雲見に有り或人云ふ新廻り嶽ハ奈りに力強くして相撲に合ざる故其称して其意のもの写も終り或よくせはりしとも云ふいうこゝろ

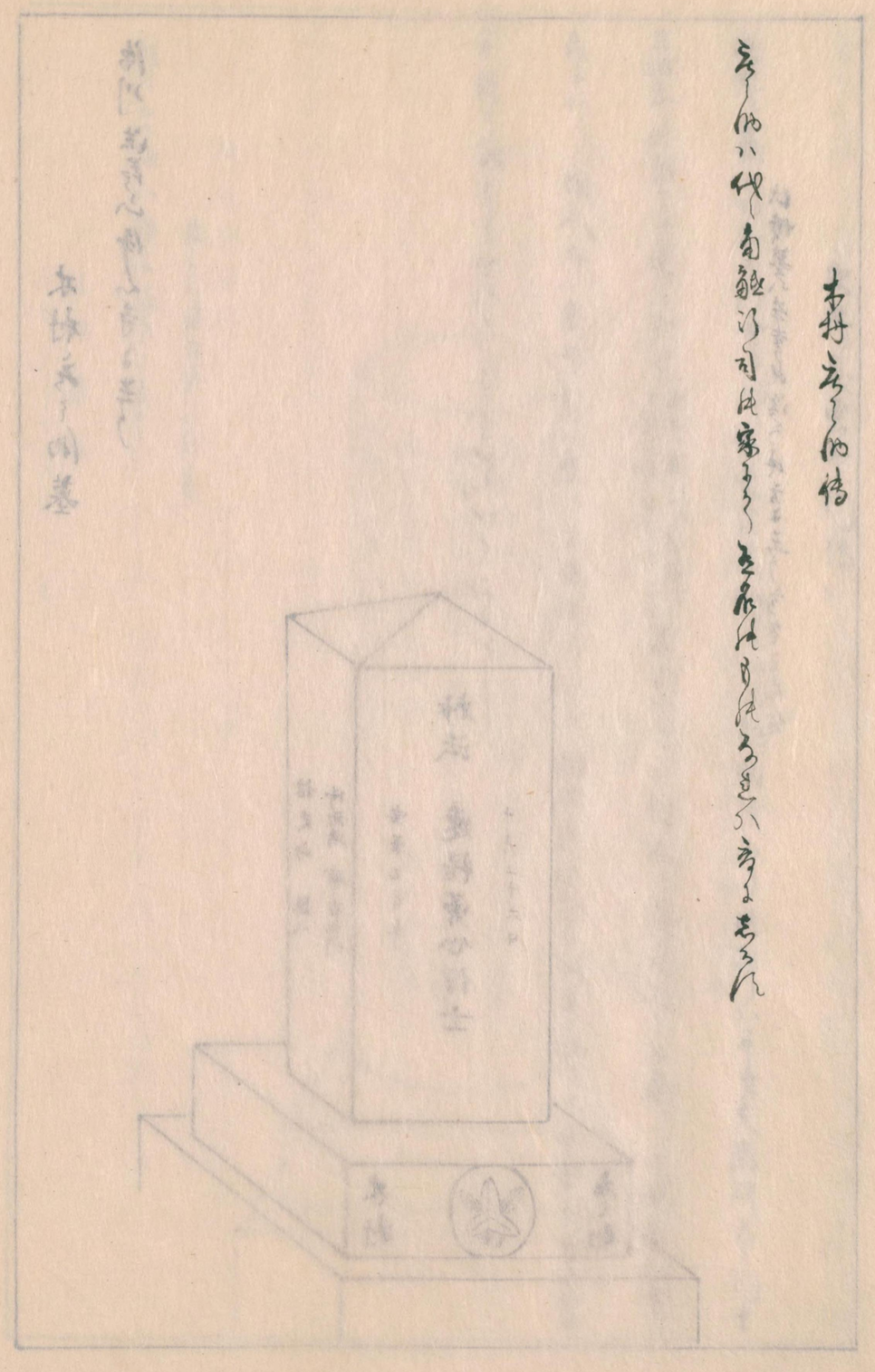
木村庄之納墓

深川法花山伊心寺に在り



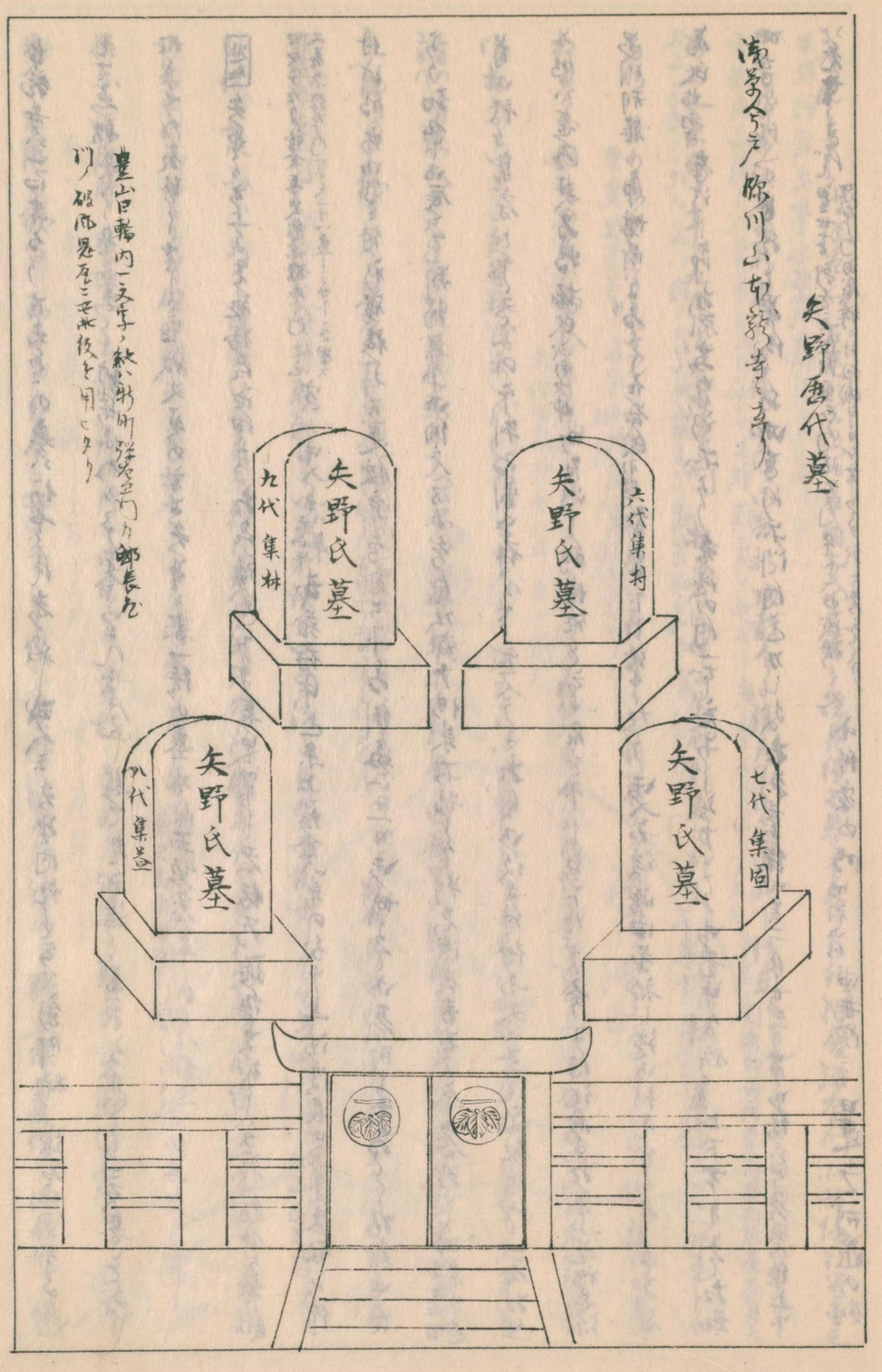
此墳墓ハ本堂に法名に在り高さ二尺位





国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

矢野氏代墓

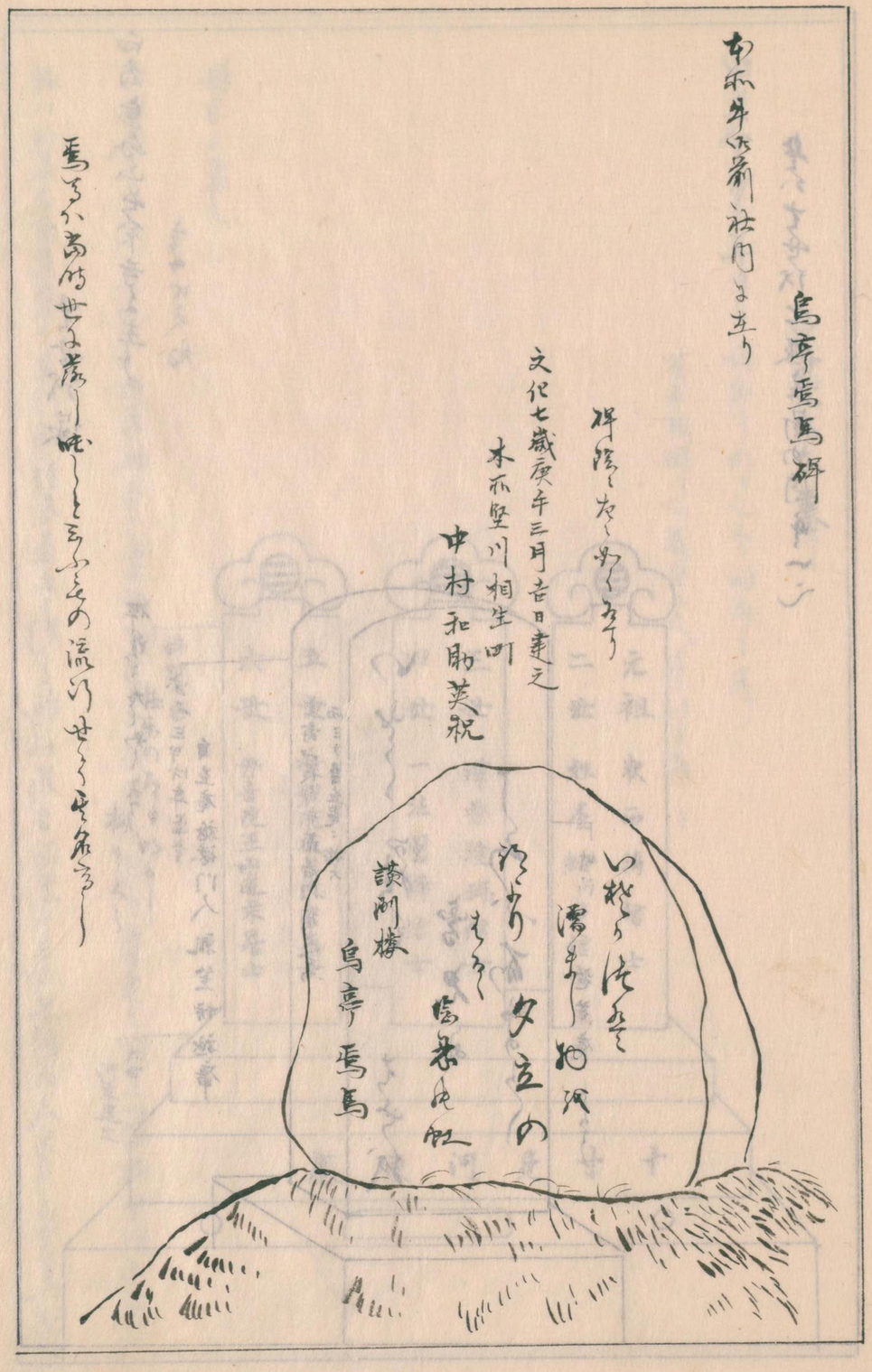


国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

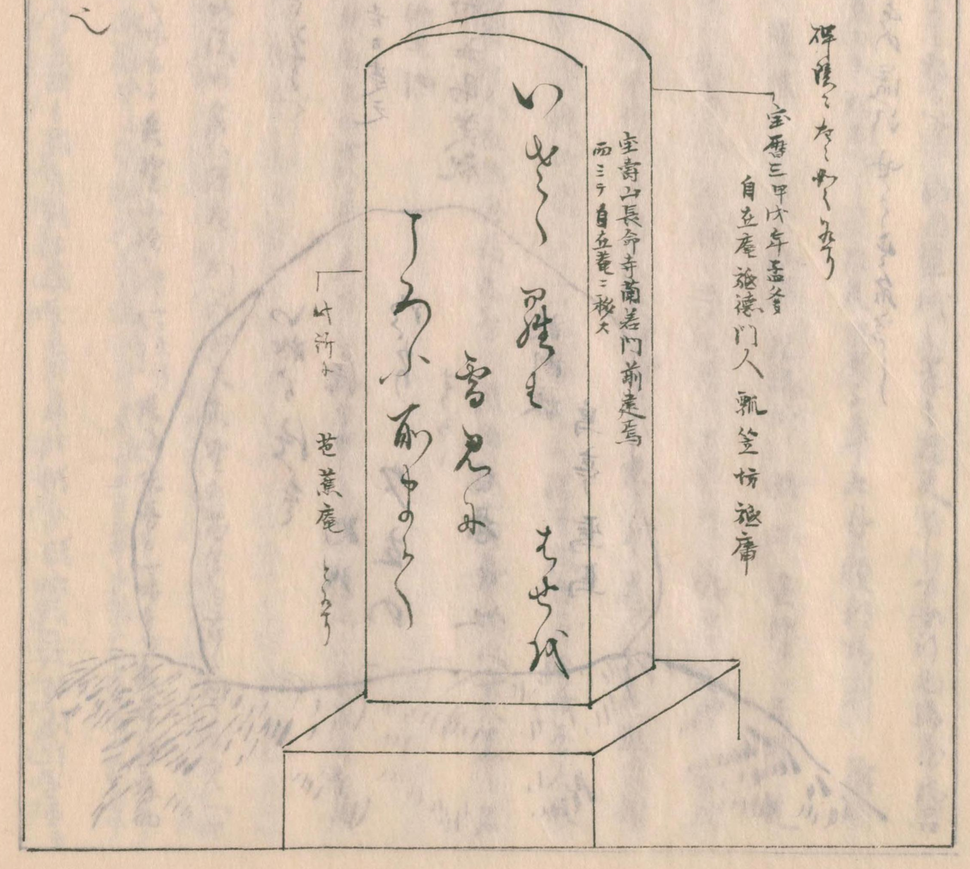
国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用



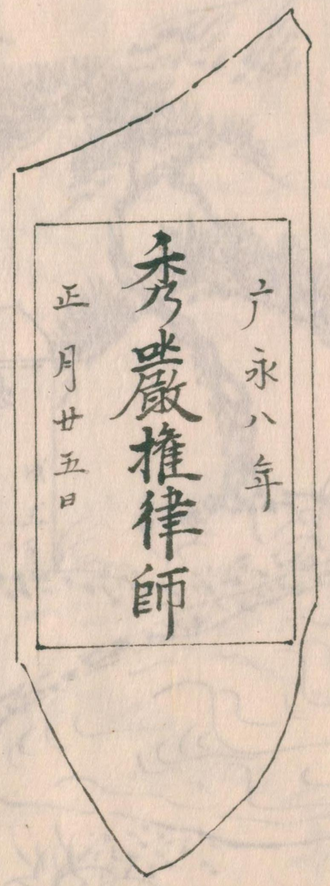
国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

姓は伊藤十寸見童と号ハ河新屋藤右ヱ門と称ハ若ハ河東と云ふ 米川の人なり 米太夫 梁雲
の門人なり河東ぶしの元祖なり享保十年七月二十日没す享年四十二 墓地本新寺中成
稽寺に葬る

新梅屋義古碑

向寄新梅屋義とて婿出し始る之今同所に在り
青石数碑之長さ一尺八寸以上落し



国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

無不向高白贊大的神古日下新橋至殺まりて文化八未春池を掘し時古中より出こり凡
但百十年社前に有る

西福寺 古碑

隅田焼月光山西福寺に在り

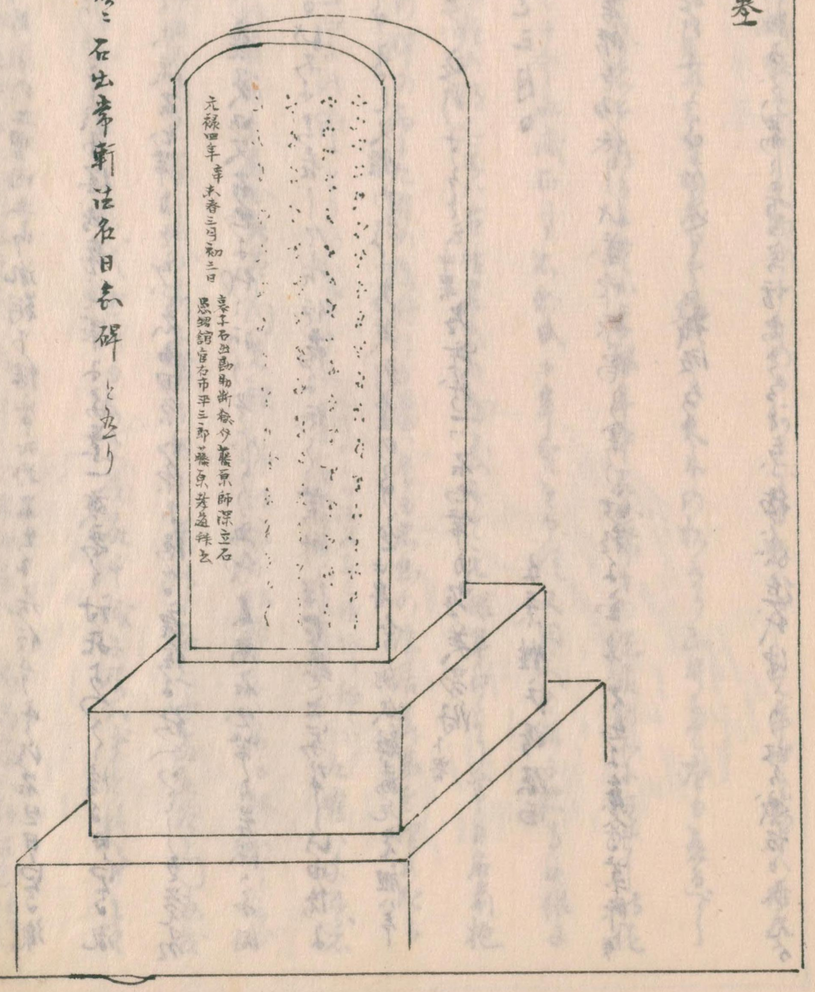
国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』 請求記号 863-233
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

十ヶ年程以前源右衛門裏大池より掘出す巻石は後蓋田の家せしと見ゆ今は庭前の巣山は山
に居る梅に伴与の青石古くは見れども中こう永山家に見留ざる石なり又文字は脇也とも云つて
細き書にいつて呼るべし古代の文字には異乗なる筆法之又日月清明も知らし右に文治二年とか
世に在り側には何かなくてはなる整ひ奴心にて其何見とて人は墳のことく何月何日とも呼るべきに
日月清明とは云へずしらく乗しくる出せり

石出帯力墓



牛田村文葉山西光院に在り

元祿四年辛未春三月初三日　喜子石出勘助断絵少藤原師深立石
恩賜館官右市平三郎藤原孝道拝去

後に石出帯斬法名日表碑と立り

碑文滅く未分明記讀

西光院繊板

上略　江戸に至つて右衛氏の辨ずる所なる年田村の名家ハ西光院薬師ハ弘法大師の作にて
豊嶋流の子孫にて兼七郎師流の二男同五郎流胤下総常州石出に居住す其後石出日向流
胤と云ふ此年田村に別業作りて後下総海老旅筆にて子孫一族悉く討死よつて後に日向流
胤永禄二年入道完聞すより末流石出常也と云ふ其小田原北条下総守康信に仕へりとしを覚兵
天正十一年五月廿六康信より寛吴以支石出に代々行りそれより五代義斎石出常吉保の子同
苗吉英父吉保みたる時此にて此家に隠居して居住病に依て薬師経百巻出写して此由依に
係る無蔵写りいロ宗旅のる事あり文明の頃に吉英影堂のる事あり　中略　今猪氏解義先祖八年
も子孫の性に由緒行りけるに施行するを云　中略　吉雄一の石出常吉英等附　下略

于時正徳三年巳三月日

子孫　性戸隆西

解云　戸隆西と云ふ者医師にして薬師を信依し此薬師作像を祭り江都に至りて石出家に薬師并
石出家系を写して解義先をハ隆西施行するを述てる繊板なり
古人の子十三々なる者の云此板古へ前に在りとる時出来るとを云ふ後ふ近代建てりたる繊板にて文字かかる

寺に傳へたる由緒を右の傍繊板に写して寄せしものゝ何となく板ハ要して年田ゝあるハ非れ
此薬師ハ年田村なる牛田の薬師と云ふ名家也る由ありと傳へたり大本の板なり正果して居由云ふてし
と思へるゝ之同村寺院に小林権之丞と云ふ者を祀るに其ハ元禄年中石出常力の隠居此所に住せし時従
来せし石出の家士之打続き去着して于今無蔵西り石出氏由来を申れ又同人の孫に在るも猶に
常力居蔵と云ふを石出の隠居居住の跡之元ハ百姓名前の由緒にて元禄年中より常力名前抱
屋敷となる　此時小林権之丞も当所に来りし　西光院石出代々の碑の前に九曜の紋付たる墓ハ是も石出の隠居前途を埋めたる
墓と云ふ当所ハ石出日蓮宗之成りゝ一字此所にもよりけるハずしと云　九曜の石に法名あり三誉何々と称せしが遂者ハ此の老人にて法名なり　九曜ハ子孫ハ不
当の役　小林権之丞の役割ハ如此作と云　又同所にも住掃部宿名を石出之為先祖ハ掃部宿に移居して名を掃部と云ふ
宗系ハつゝ什器を傳へて石出常力の先の家と云ふ在に常力方にハ系傳由来之由来為先祖由来
と常力之道へ至りより猪也とも両家由来之事を数代屋敷にもみる苗居住後に及ハずとは子孫
上ぬるらし
拙子前文参考するに子孫の嫡流石出此家に元より居住して常力家ハ　佛前家へ譲り石出　在此に此人家
の孫子小伝る所に石出田獄此所に大牢四五株並べ其時の役者を捕へて此家の由来を云大書院石出常力と云人誠信の士なりしが役者を行つけ其せふ見しとかつるゝ赤役者を動かし見しといふ又或人云自然と罪人を子救ひかるゝ由自ら宿せしを今ハ本を奔ふ　其後孫
常力吉保年田村抱屋敷を自分の名前として其子吉英父子共に此所に居住し之を屋敷

法名日念と云ふの小林猶之傍先祖者郡に從仕しして以來引續て此所に住すと云ふなり

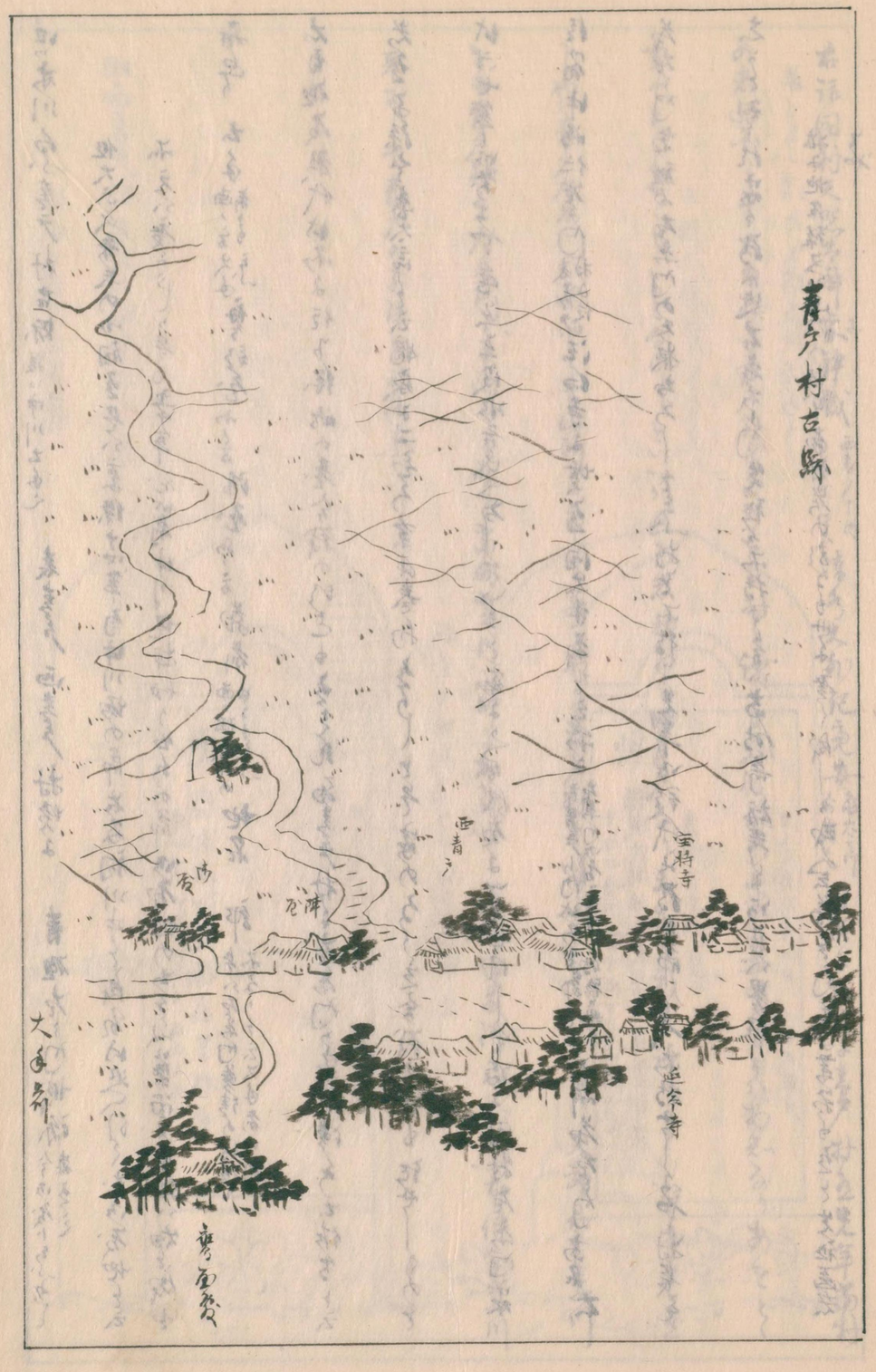
萬西三帝清重墓

浩江村西光寺に在り

本堂右邊に建り

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

四ツ木川向ふ青戸村古跡 後ハ中川古手之 表青戸 西青戸 村境ニ 青砥左ヶ門城跡 今ハ[illegible]

但大六天弁天の小祠是ハ享保十四年有中川城の節右衛門川中と成故此迄へ引く其ハ成地と云

不元ハ廣かりしハ是も五十年前以前中川堤押切り出来の節此處地のあを以築留メ手ニ給ハ畑と成也

居也り 古手 南ノ方大手前ヨリ云ふ 寥新屋 北ノ方 陣屋 西ノ方 葛前 西ノ隅古城の曲ヨリ云ふ 地名 郭 是ハ左衛門屋敷の時移れ不なりと云大手前の間

右青砥屋敷代此所ニ住下総路の巻合戦の時迄も是ハ西青戸村ニ左衛門ハ家ニ清水ハ云作事と云

老五子孫今長太郎と云嫡家ニ二ツ之家ニ巻物ハ有りしとそ家のなり立合戦のなりも記せしものを

此六七年以前ハ長左衛門ハ居ハ有していまゝ家ニかへらずなり一見せずして居る同村左衛門家

後筋中路仁左ヶ門 表青戸村ニ住 法印寺ニ墳ハ同大手前と云所ニ表青戸ノ内此所を郭と云左衛門ハ屋敷ニ時移れ株不 山崎茂左ヶ門 当名 太

茂左ヶ門先祖ハ左衛門の大根なりしと云ふ物を不持ニ先年此所代此郭の節何人不持せしかや村長も

志うと知られ家々郭ハ処右茂左ヶ門先祖ハ不持ニ者ハ当時奇妙考ニ何もハ畧れ

按ニ地名録又ハ近代の板本当録考の事ニも世ニ廣く成しハ或人云茂左ヶ門家ニ業物も是と先祖画者

ハや

右話同村天照左弁 家神職 西青戸ノ内 寛政二ニ住久 清水大和 紀寛安 長太郎分家之 同張ニ相名ニ青戸村ハ先年当村

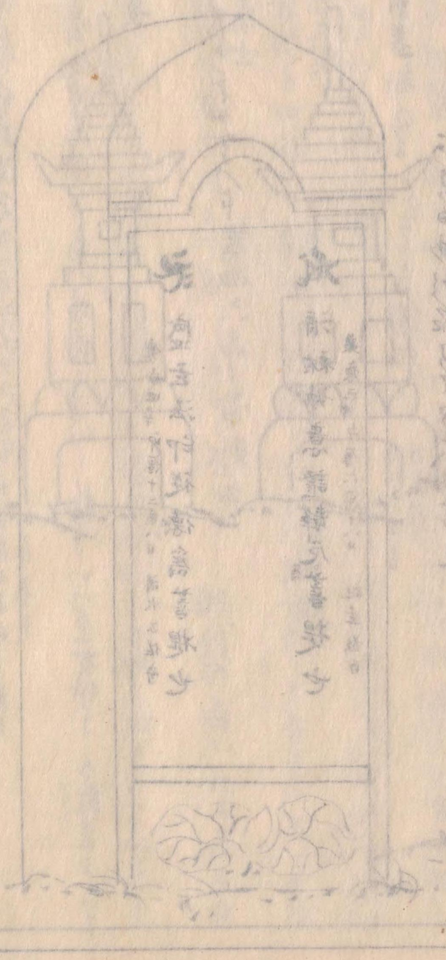
の老也玉して太の相名青戸村ニ至りをと村と読ハ是ハ彼所の事の云ふ其方ハ物知なりあをとく

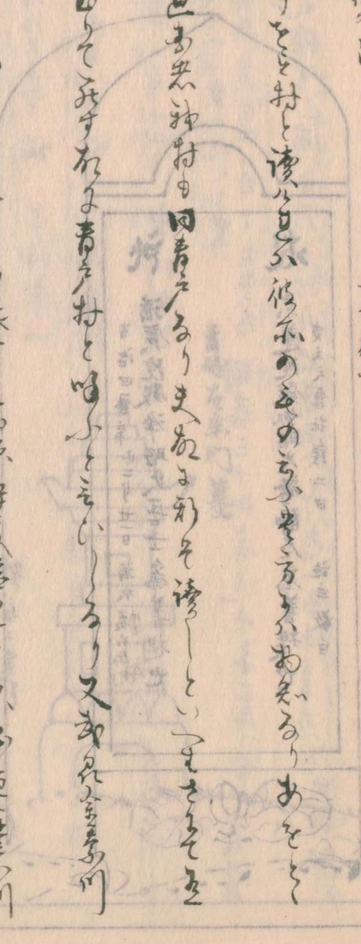
書てよくもをとくよこなひしといへハ也当老神村も同青戸なり夫故ニ形を読しといへもさらて是

しや青戸左衛門ハ漂泊して此所ニ至りて死す故ニ青戸村と呼ふと云いしなり又或名金奈川

ニも青戸村ハ左衛門ハ子孫今ニ存す当時其内山所ニ為張せし画師伊藤清名と云ふ本住金奈川

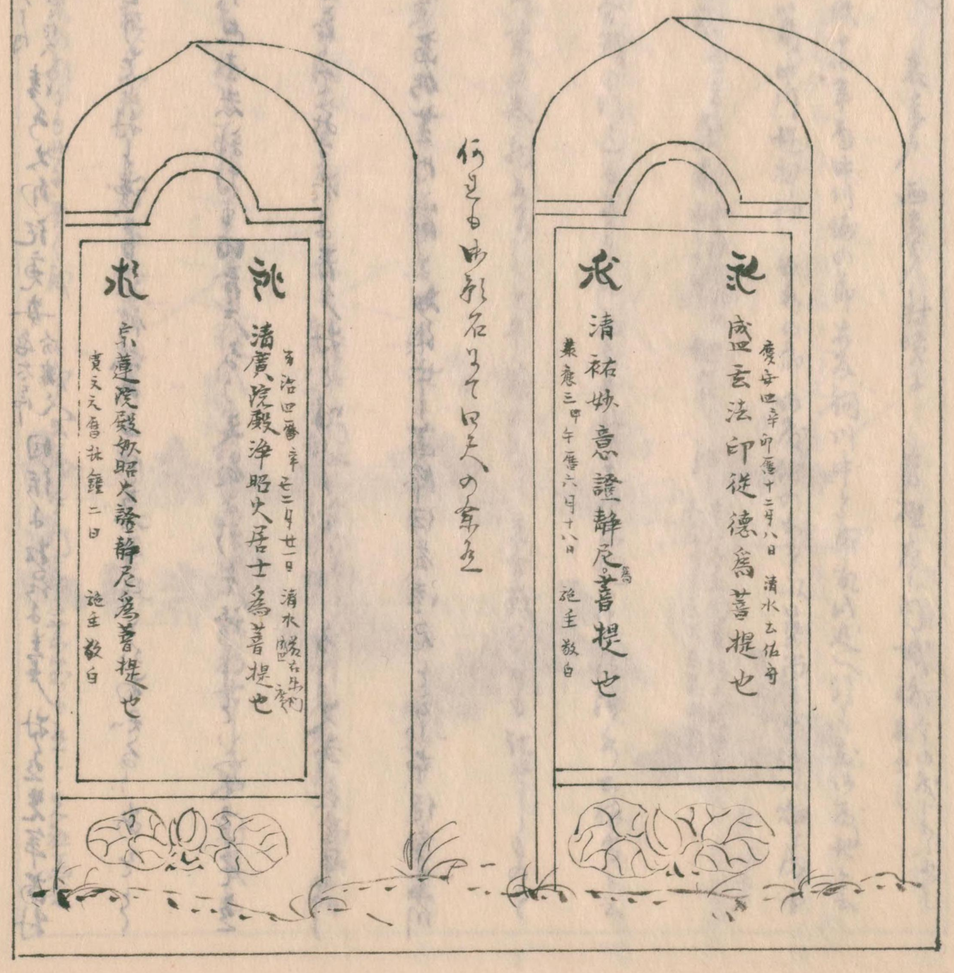
巻にして青戸の子孫と云伝ふ





清水古佐寺父子墓

同西青之村長久山延命寺にあり



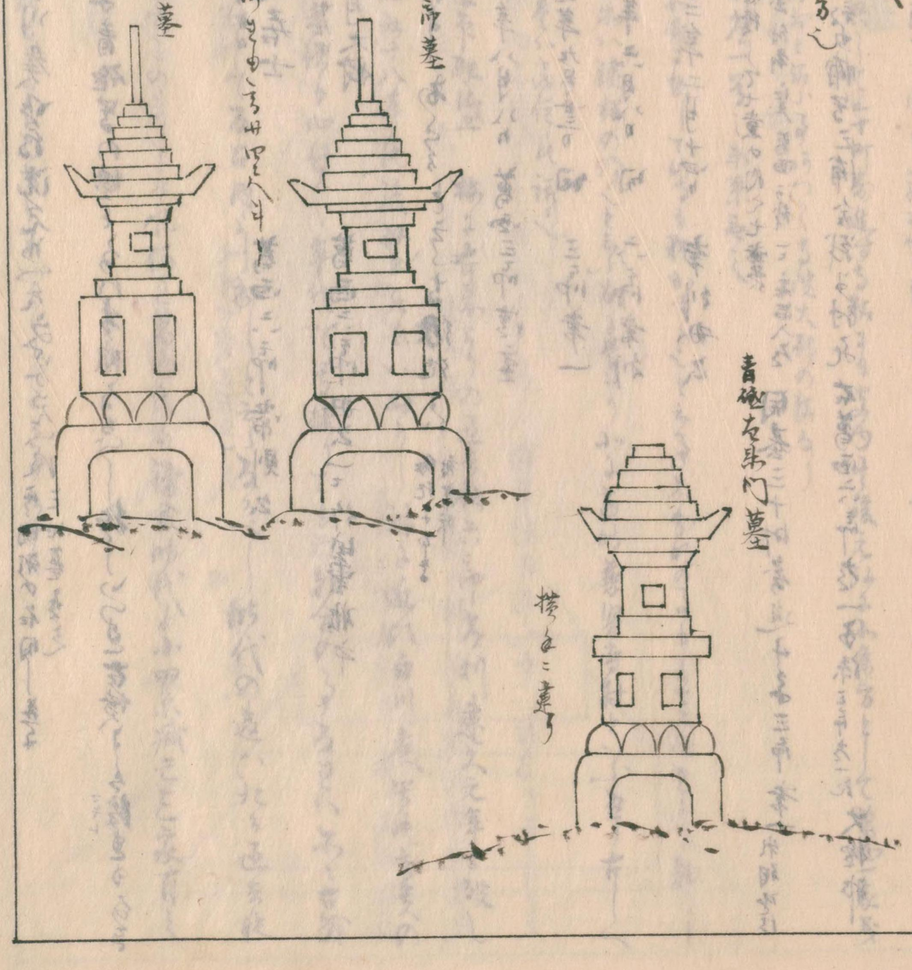
何れも由彩名にて日天の家也

前にしるし清水古佐寺地塔なり

善賢寺古墳

上手墓、名戸衛道の門口ハ木川手前の方也

日照山善賢寺にあり



国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

真言宗善覚寺右ハ三境ハ近年白川侯の君の臣に遣し文字をえらひ入レ古開の石碑一基より 三田墓在之

梅子今寺の僧をして葛西姉子青砥等の墳とるハ言ひるゝ由ニ梅子いつもと古墳よりマキレ也をあるき

そめるなり

當寺過去帳にハ

栄照院常山大居士 建久元年三月廿日

葛西三郎常則公

舩香院紫雲妙月大姉 弘安十年十月廿九日

葛西三郎妻公一に竹林雲雅字

中後と云ハ先祖の時右古碑より出たるとも云ふ縁記ニ 縁記ニ有之

高徳院殿勇玄居士 建久四年八月八日 葛西三郎清重

栄賢院殿常山居士 元仁元年九月廿三日 同 三郎常一

真覚院殿寂入居士 弘安十年六月八日 同 六郎常判

香林院殿紫雲妙月大姉 正安二年二月十四日 常判母公

葛西兵衛尉入道寂昌 十六代平氏在続して七堂の内之七堂あり 然者平山 児玉 御制 宗戸 葛西 河越 ニ家品入道 同基三十町寄進せし 十三郎常一 孔相伝

建治元年五月八日 若建ノ二年十月 四日許でや 民部丞輔家三浦合戦ニ討死 右葛西六郎左一子孫三郎左一記 大掾部

葛西六郎左判なり

然文面 和田三浦合戦ニ三郎兵衛尉等 葛西八三郎子孫なりや 討死せし子左判 姉子の子此寺を建立して法号念

及子仕ハ姉子として此寺を中興して三十町寄進する趣も出而中後元弘ニ小条方として葛西一家我

貞子次ニ至り中後小条 小田原 乃時おと殊ニ寺行つくる院大破の趣なり

大条者ハ八葛西氏左判左一等ニ末孫なる

縁起ニ子孫葛西氏 天正十八年 小田原小条ニ従して此寺も相助することも不分明の事も有之又面々云り難し

中興の時今此地ニ移る元ハ此所ハ境様の説と云ふ前ニ見たり 此ニ当時善覚寺村と云ふ寺有しく

ハ善覚寺村ニ寺院有之里ありし当住職説之

中興弘安年中 當寺第一世 現住 法印融盛 梅子古来よりの過去帳ニ六郎常判 建久元年ニ設し

て其後弘安十年ニ死去にてハ九十八年後後姉子死去ハ始りし 姉子近年白川侯等此高貴人の

方葛西ヵ墓所ならん救世ありハ寺僧も心付く年代記等操りても不符合のみなる事ハ不ニ古戦

従派ると云を先ニ考して縁起を作りして左古碑より出しと云ふなるへし 時代の違ひにおけ過去帳

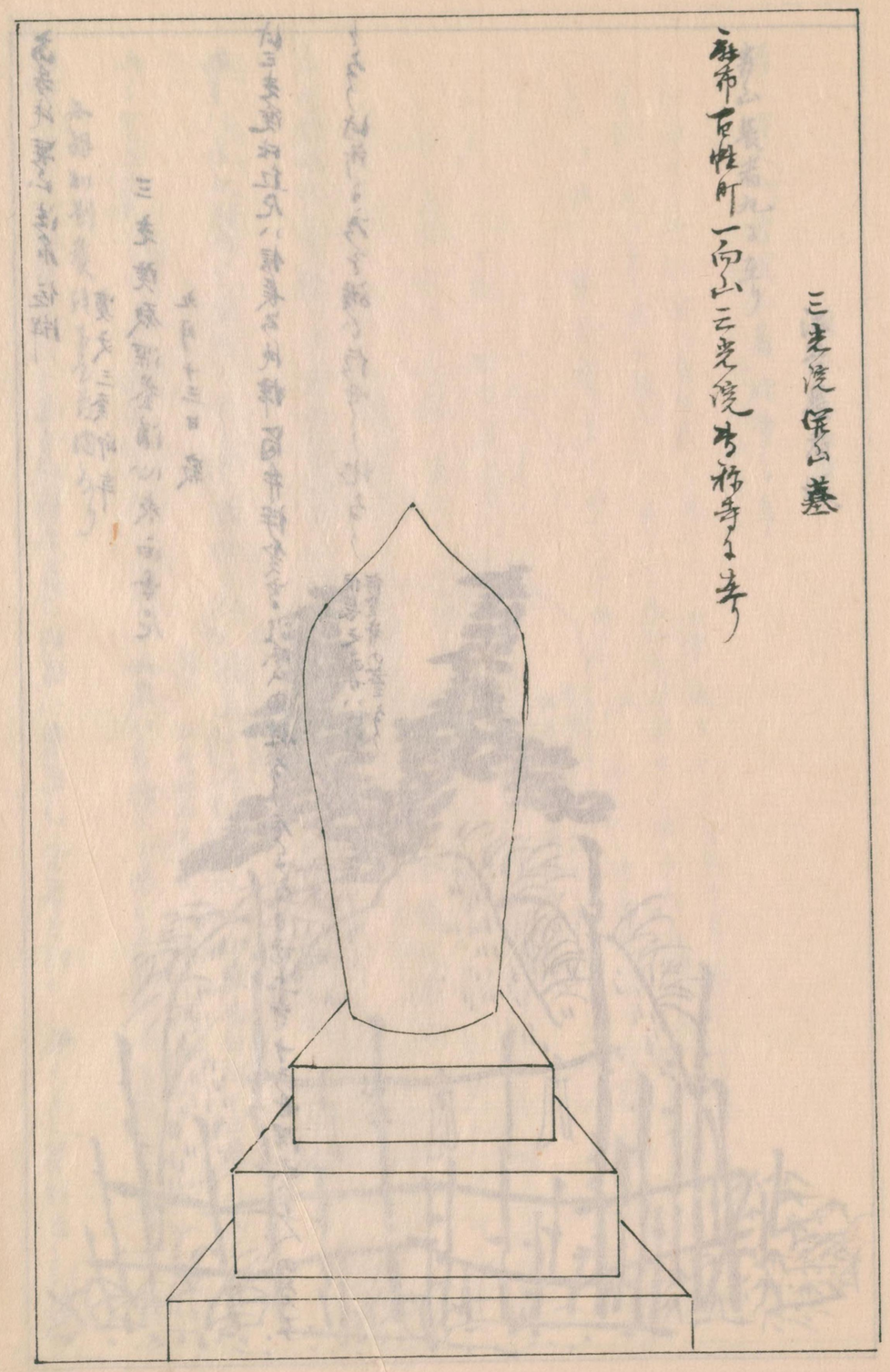
こそ誤りのまゝ古く伝へ此ニおゐてこのましかれ何も葛西氏も鎌倉時代より小田原滅亡と家有し

なるにて

附く云青砥左衛門尉ハ一字新古ともに見あたらず いつてしくころなるや

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用



高井氏 長山法名 位牌

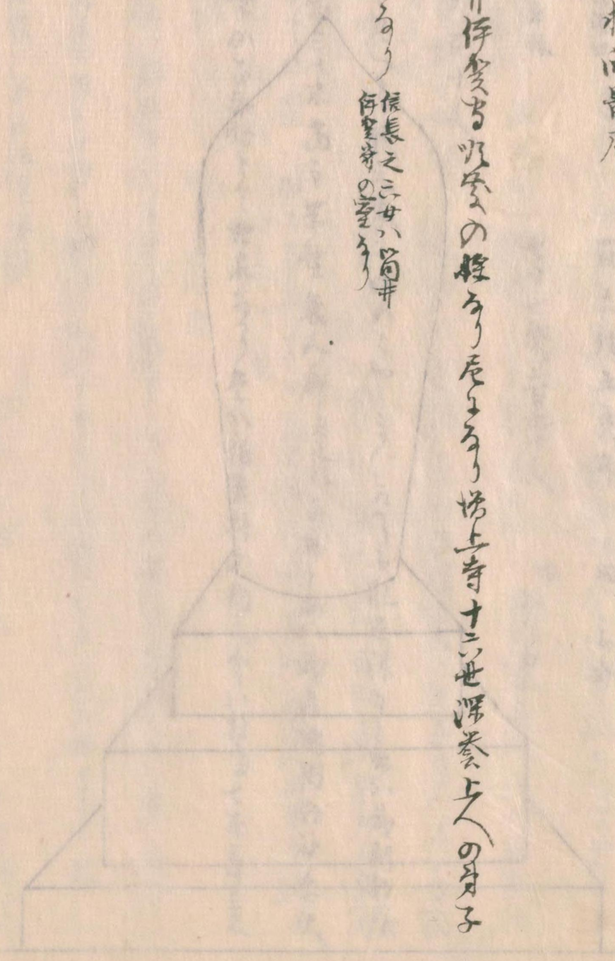
寛文三癸卯年

三光院殿深巻清心求白善尼

九月十三日 寂

此三光院比丘尼ハ信長公ノ姉 筒井伊賀守順慶の姪なり尼となり境上寺十二世深巻上人の弟子となり此所に庵を結び住せし地なり

信長之二女ハ筒井伊賀守の室なり



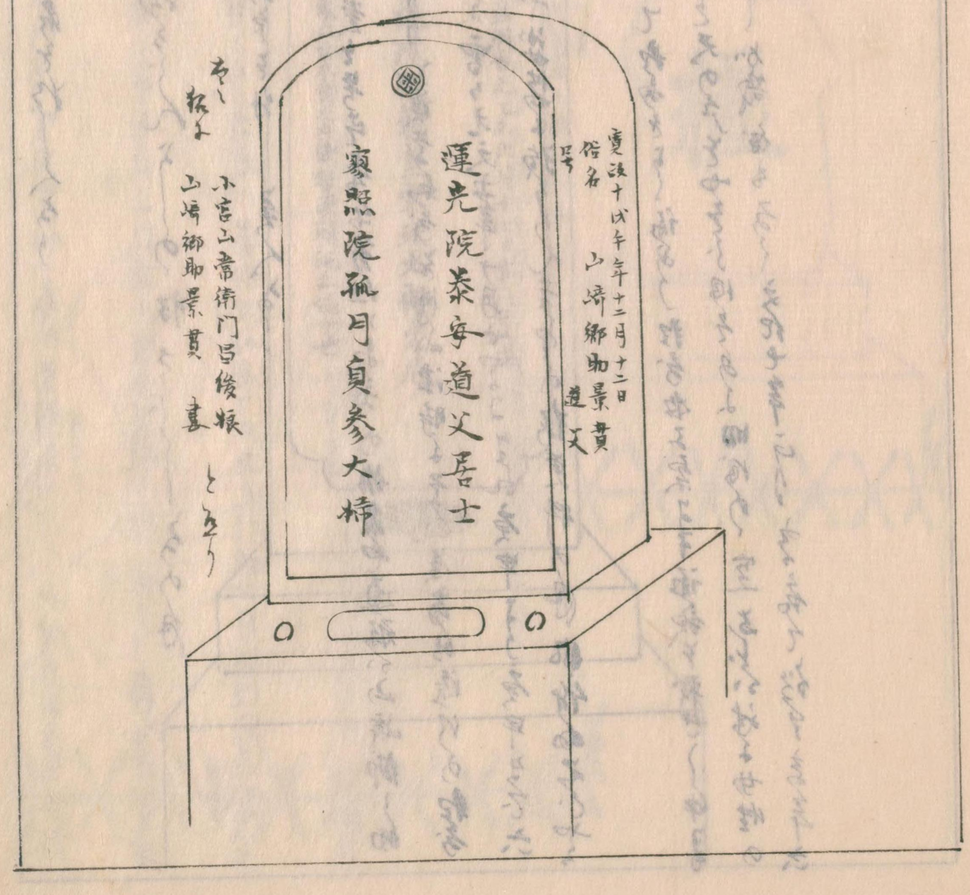
浜谷長者塚

青山長者丸に在り

女相加別愛 [illegible] 内なり

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』 請求記号 863-233

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

山崎の所書にとゝふ迄世相家に名を得し人なり

辞世

[illegible]

年迄に住二十餘町 [illegible]

名は初景恭後景貫 [illegible]

年迄二十餘町に住し幕府の先手与力と漢学如何を内山淳時に学び後高橋流行の相家を諭し高良橋別当に次て名変大に雪る元文五年十月廿四日に生れ庚申より庚申生で六十一歳にして歿す辞世 [illegible]

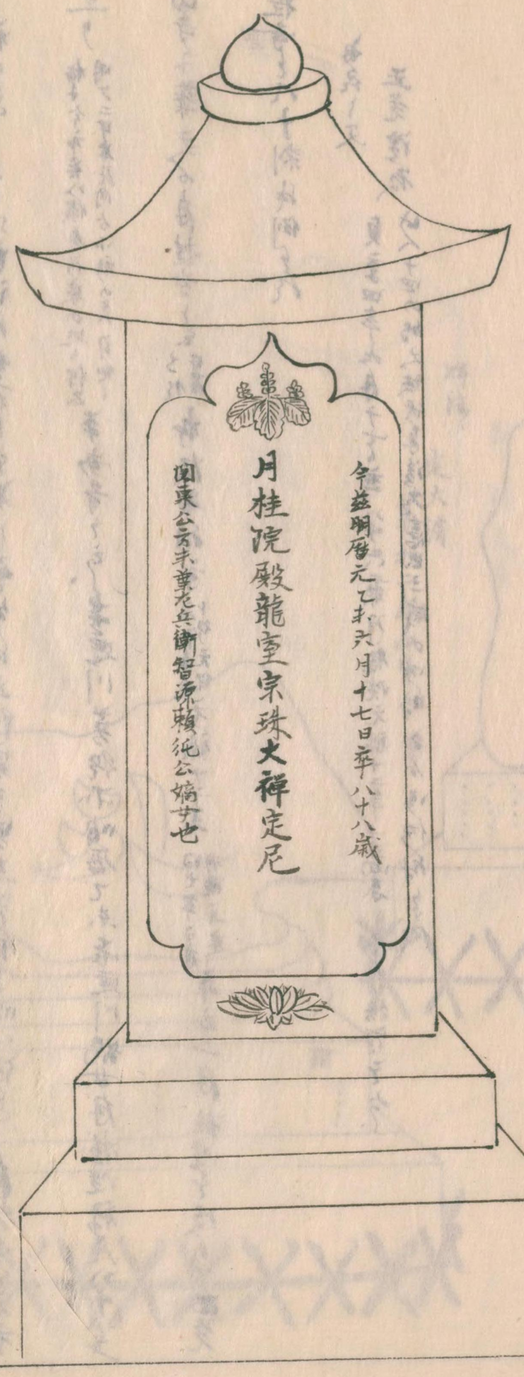
[illegible]

[illegible]

十六才

月桂院殿墓

市ヶ谷川田ヶ久保正覚山月桂寺に在り



国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

高寺は興基長連川は曲橋也之 梅ノ中ヨリ異本器ニ一家ハ是刑家を書して異本ニ方と私稱

古河ニ移ラ見しよりハ古河ハ公方とも共し平和ハ二取家を異本器ニ唱ヘ張ヨリ月桂寺ハ元帝

居ニ遷リ 梅ノ今市居八幡尾召家の処ヲ得ス 明ケ二甲年発酒ヲ以移の是 引地ヲ 平安寺と云ヘ 長連川 葬程不明 暦て来 長連川 嶋女 月桂院 稱尾 八十八歩

逝去 高寺ニ葬 支分 月桂寺と云 ヲ作 百石 柳沢 尚羽守 浴松平氏 ヲ得 光保 元祿十二年 同七年子月 桂院 年 寅 正月 桂院を改めて 正覚

正月 桂寺と云 十刹ハ例とす

月名之文

正覚院殿 貞享四年九月十七日年八十六葬月桂院元祿十二年十三回来 是より 俗宦を云ふ

此人十四の時大坂 伏見 後宮 憲出三歳の時 出分 御伴附と成

定史消墓

四ツ谷小寺町 地福院ニ在リ

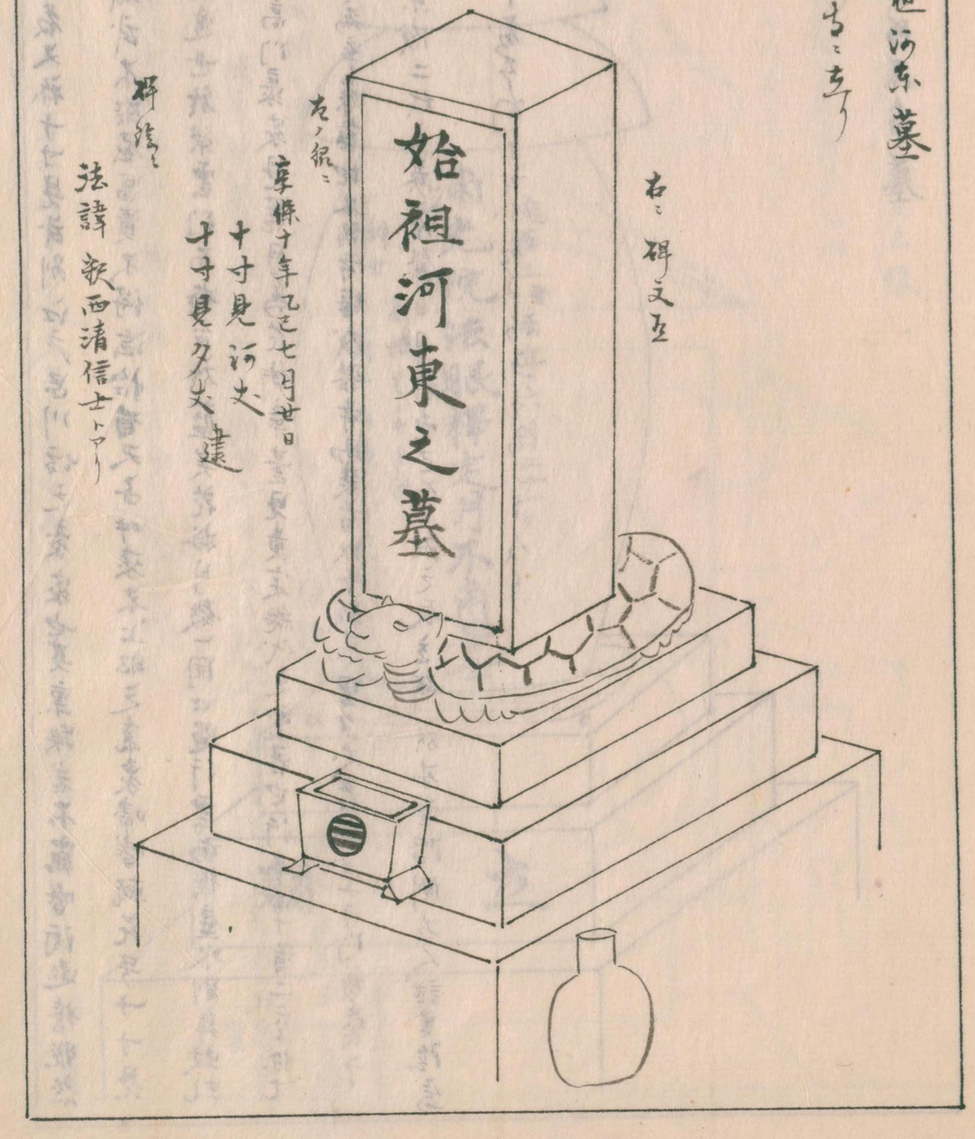
碑陰

定火消

享和二年四月 と云

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用



右二基純石塔ハ江戸定史清ハ新純小忠を送葬する処なり 山田清ハ新名にて清河長 口葉

純右純二郎ハ有し 世子先陣或ハ云ハ無しと云ふハ此定史清純小忠純事なり

元祖河東墓

墨地本郭当中 猶当ニ立リ

右ニ碑文五

始祖河東之墓

右ノ銘ニ

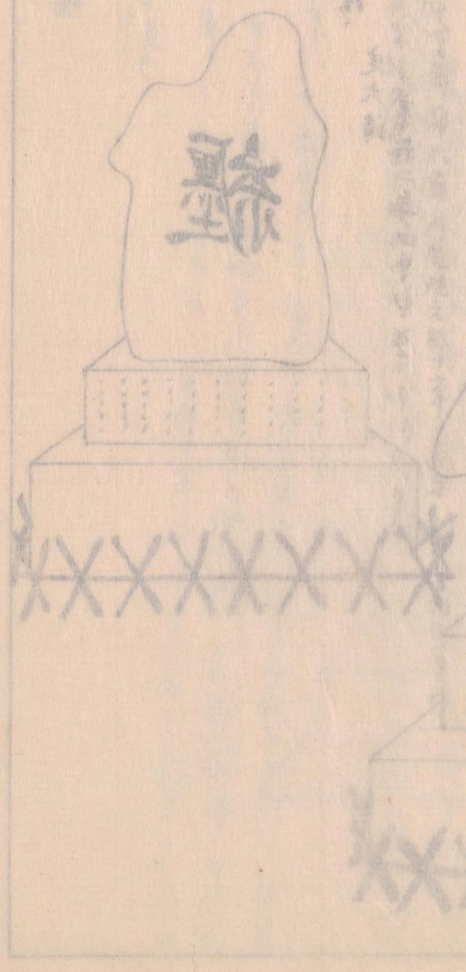
享保十年乙巳七月廿日

十寸見河史

十寸見夕史 建

碑陰ニ

法諱 釈西清信士トアリ



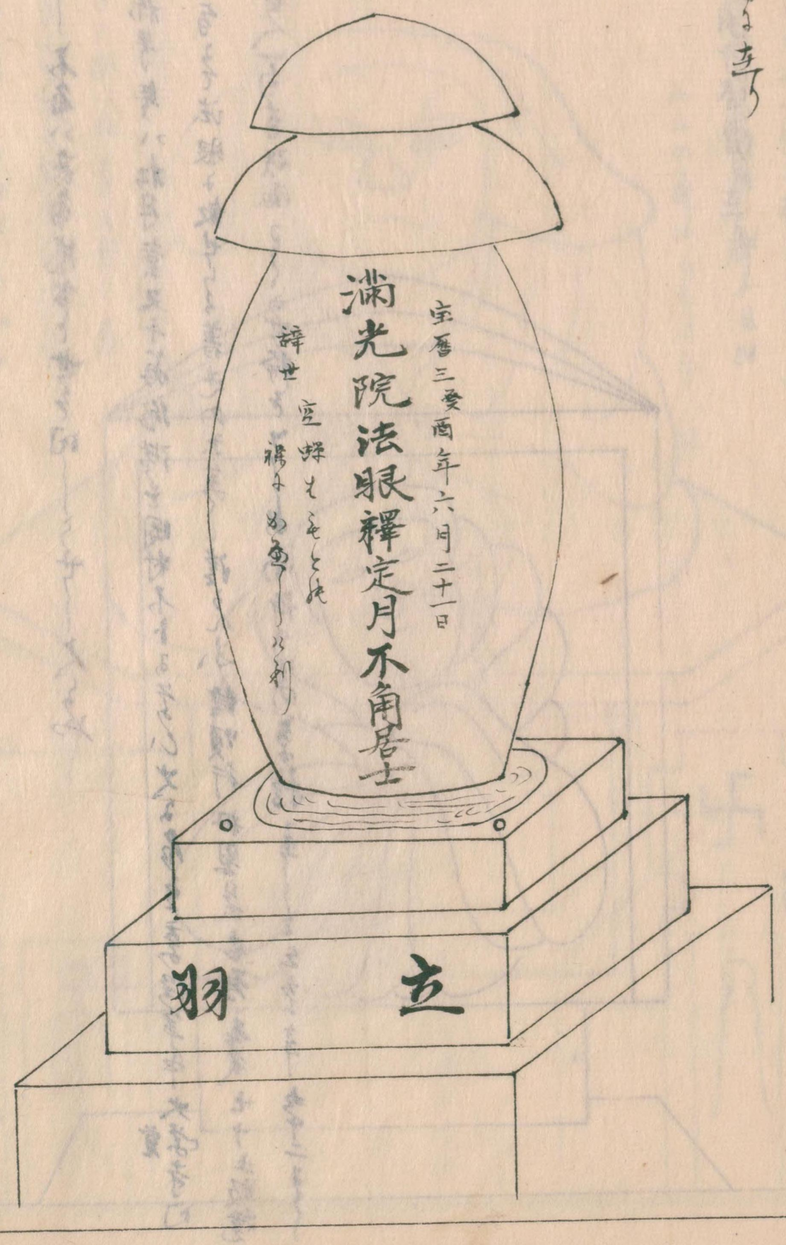
国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』 請求記号 863-233

ガラス使用

河東居士氏伴叢又称十寸見武別江戸品川坊之豪家也其稟跌岩不羈嗜酒遨嬉脱然
破産兼濡不成武不能屈富貴不得淫恰有天子呼來不上船之氣象嘯嗜輒花号十寸見
堂故以氏焉後遁世於梁雲門而極旨於蓋矣花樹月殿一開口過行雲動梁塵水則舞蚊虬
山則泣麋乗日高門豪家見羅月為花街章臺見貴定絶代之望君也行年四十有二享保七
己秋七月廿日以病卒葬築地本願寺塔成勝寺即喪者以千數孝男夕丈君前学于門後養于
家善兼紹其業成二代之美家聲日月彩色已而一紀之辰立碑於本堂階側左人謹書陰焉

[illegible]

立羽不角墓



国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

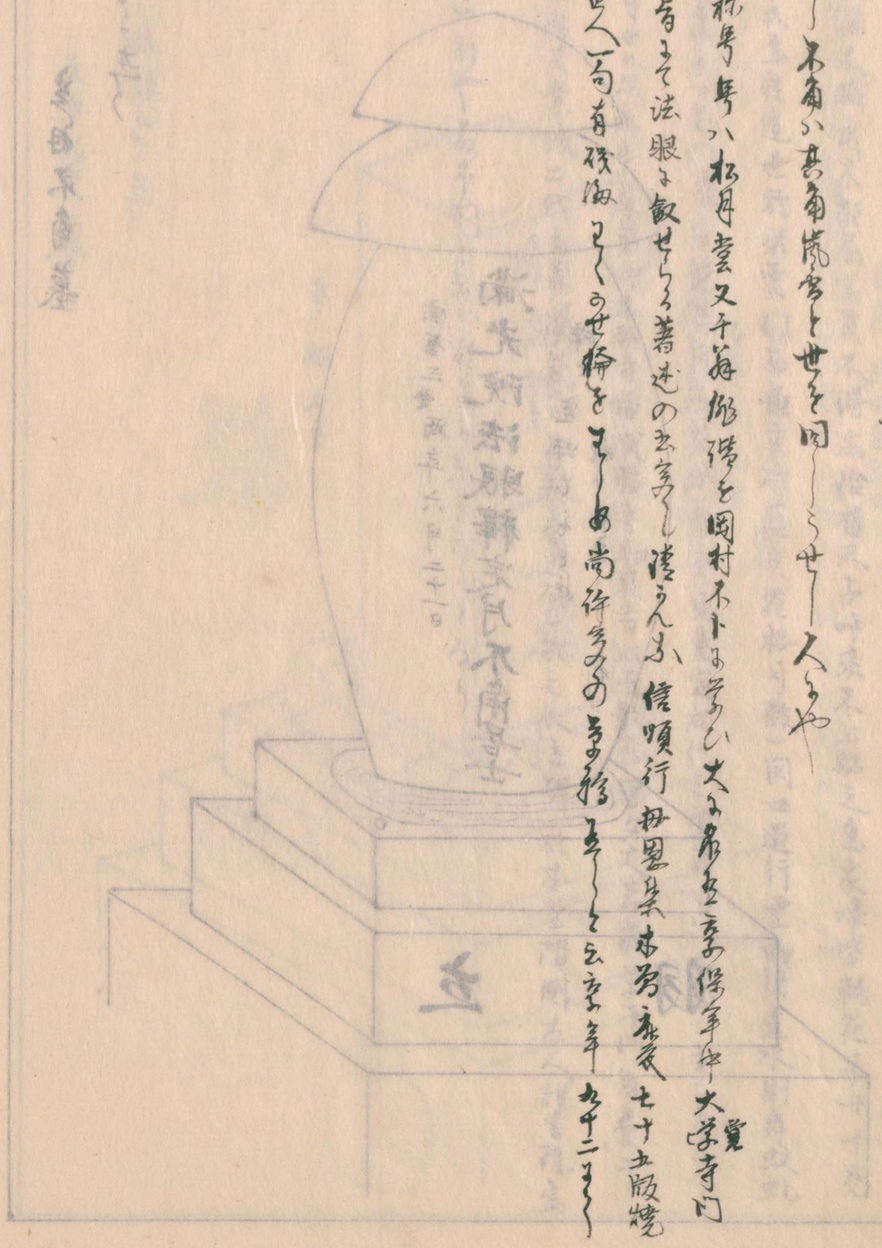
今ハ八十端迄陽家此人立科業不命と云ふ人子孫此由此石此俗ニ元祿年中此法名ヲ解て見ル

不角此先なるべし不角ハ其角流宮と世を同しうせし人なや

立科ハ祢号号ハ松月堂又千蔭俗諸を岡村不卜にそなひ大ニ名ニ立家保年中大覺寺門跡の令旨にて法眼に叙せらる著述の書寫し諸うんふ信頃行毋恩集本号春夜七十五版焼

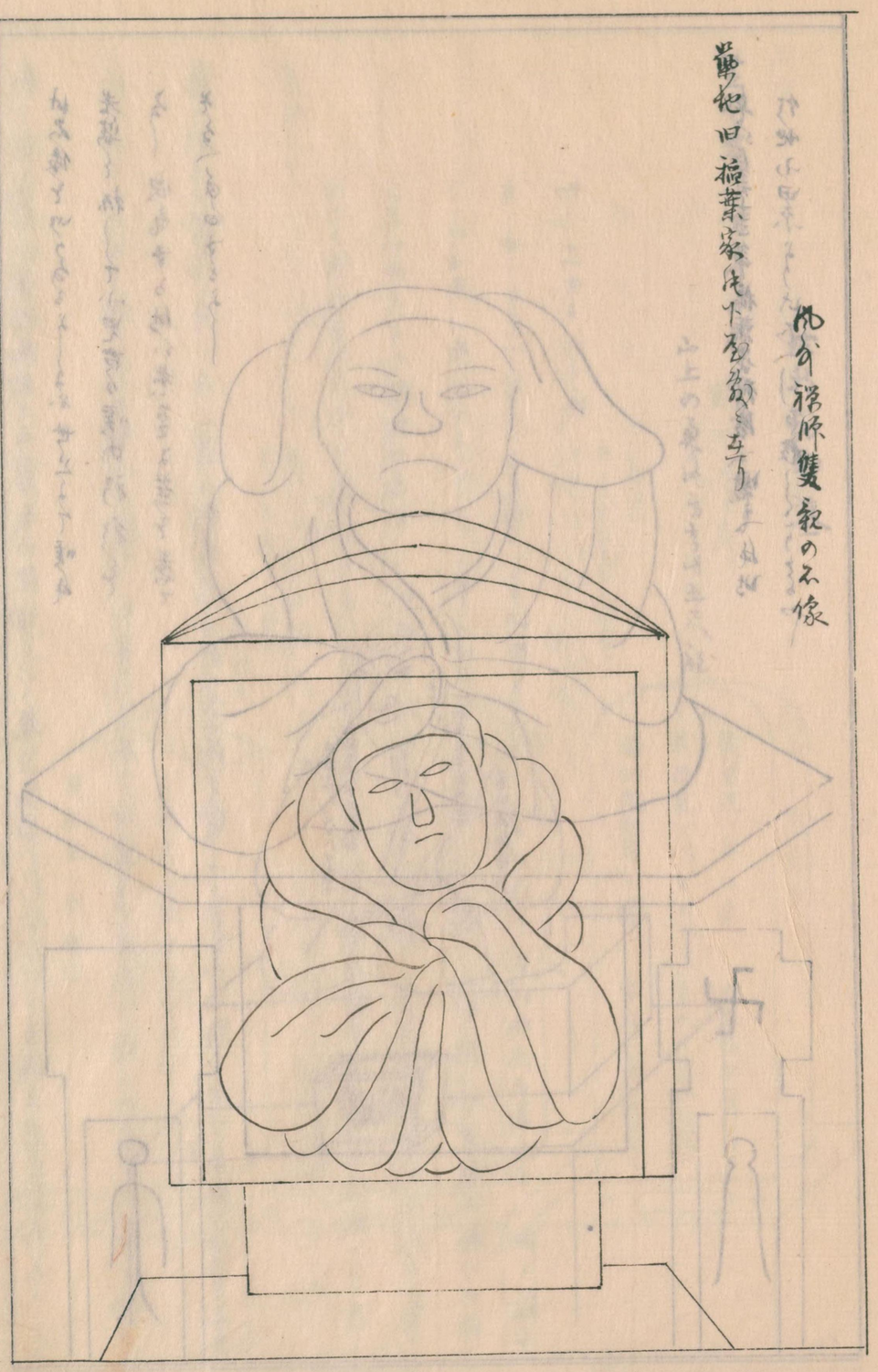
千後百人一句有殘海ことくの世稀をましめ尚許多の事稿ありしと云享年九十二まで

致す



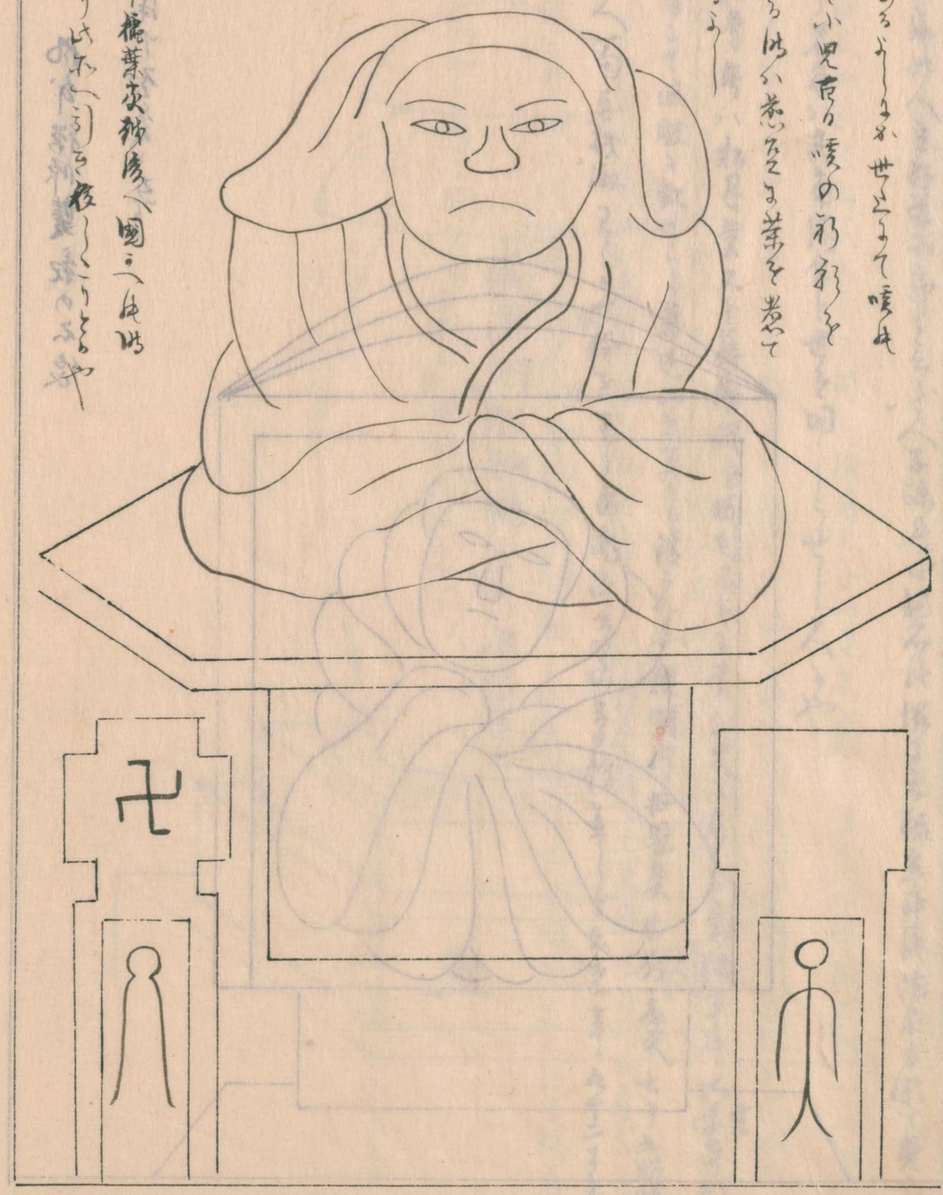
此分禪師雙親の石像

萬地旧福葉家此下屋敷と云り



国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』 請求記号 863-233

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』 請求記号 863-233

ガラス使用

松平越後侯の陰物勘助と云ふ者成の陰物にて長さ有家に持ちたれとも陰の物を三尺斗り切て已も腹切て死れり其毒気を感じて右にて其形を作りて墓所とする極下の病を行ふに劣端なりとて人後の精成就に行筒に湯を盛りて納む人ゆへ右を建て家根を蓋て湯の中に

成出に越後家内元祖秀康公へ本多豊後守康孝家の成功の大男の陰を成合戦の後我が年光に宛果此陰不用之後越後侯なるべし此陰をもらせ給ふへなし送事なんと家臣某をして陰中なるまくさとても御しまじ今日死りたる年三十四五計出云ともを添へて送らる其陰は今の陰の極けの陰と云ふ世にも是の陰なるべし三尺切りしも此陰なるべし南伝流行の川柳原の前句に「柄と陰を切る末世に対する陰

英一蝶墓

芝二本榎長松山義教寺中顕家院に在り

辞世

家は又本来空に立つるなり
月にいざるへ

英一川

辞世

浮きくらせ浮世の業の色とりも
ありとや身のうす雲にそふ

英一蝶去

英量院一舟日達　明和五年正月廿七日
英徳院一川日長　安永七年正月廿八日
量仙院妙壽日栄　安永六年三月上六日

本是院妙壽日量　正徳四甲午三月朔日
英受院一蝶日意　享保九甲辰正月十三日
達心院妙好日性　正徳三癸巳十二月十二日

英覚院妙艶信士　寛政六年五月二日
英壽院一桂日仙信士
英維院一暁信士

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

英寿院一珪ハ今吉日古橋に住一蝶の末之と云ふ一蝶ハ板本に云ふ其ハ元年橋君に生る又ハ多賀伯耆
某多侍西寛文六年十五江都に下る特望安信を師とす或人の云中橋特望永徳家侍不侍にして
遠く特望家の学意を得徳して登ハ一如此の心をが一群学に和しこれ学意なりしなるとぞ姓ハ藤原多賀氏
名信番一に安雅初名猪三郎後に次右衛門或ハ助に進別賀後朝湖羣蕙海牛丸曉雲雲旧学堂一蜂閑人
一閑散人隣悲房鄰濤房北窓海等其諸号を俗謂ハ其世代門俗名を曉雲又和央元禄十一年十二月無結町
住せる時端ハ四十九宝永六年九月後今後英一蝶と称北窓海と号伊川長場町に住ハ七十三歳す

一舟　門人養子　名信種東窓海孫三郎　僕師家

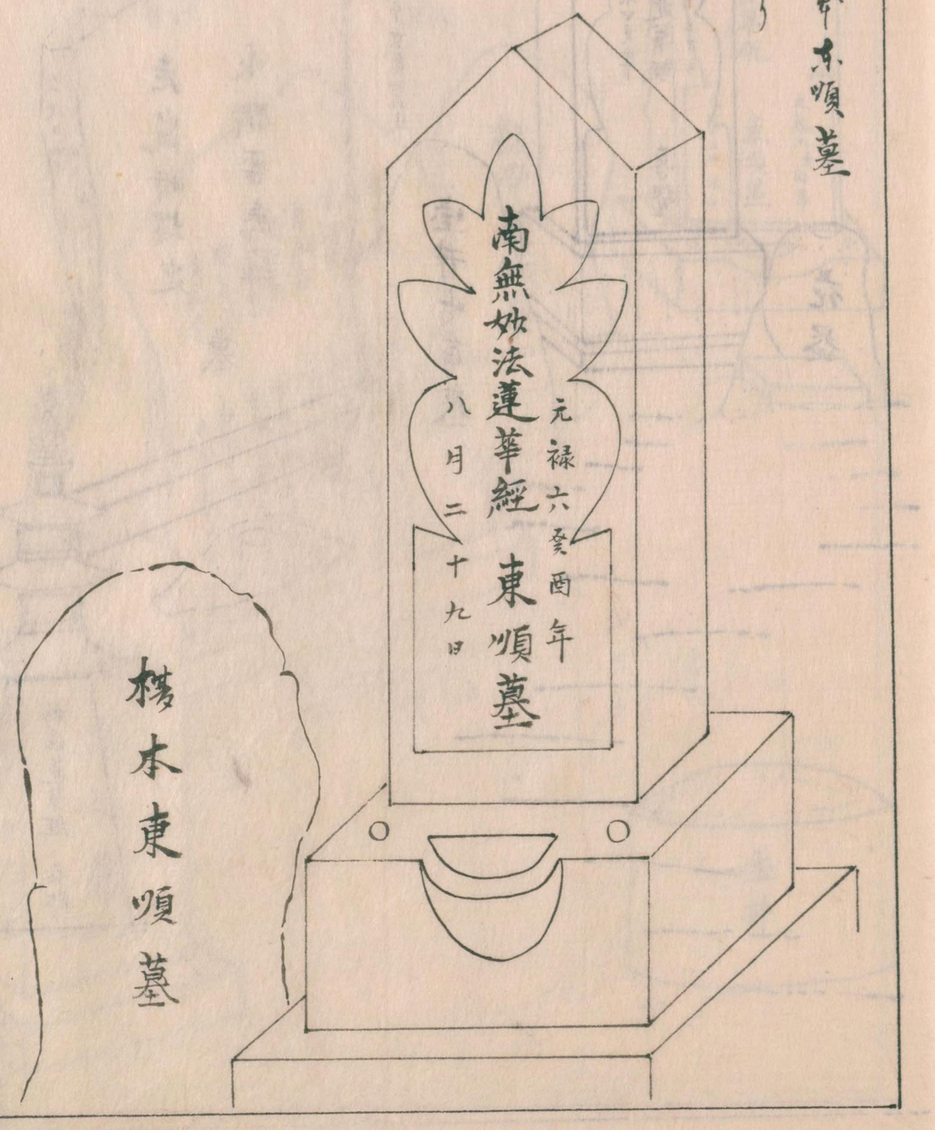
一蝶　男二世　名信猪長八

一蝴　次男　俗称百松又源内一説に号孤雲

右板本に所見ども曉墓の図に序に如くしく板本を参考すべし

板本　東順墓

二本板写古上行寺に在り

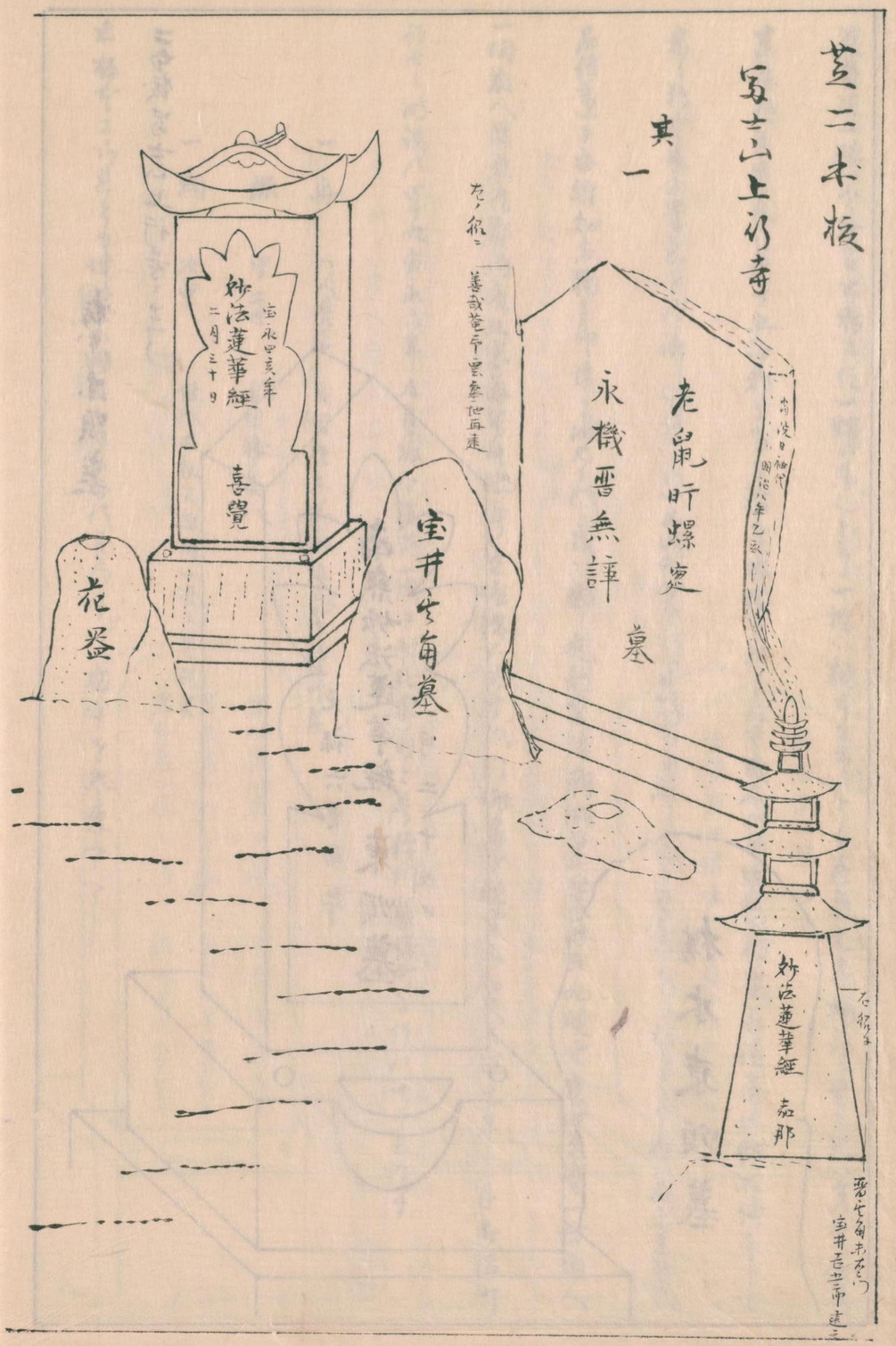


国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

芝二木板

富士山上行寺

其一

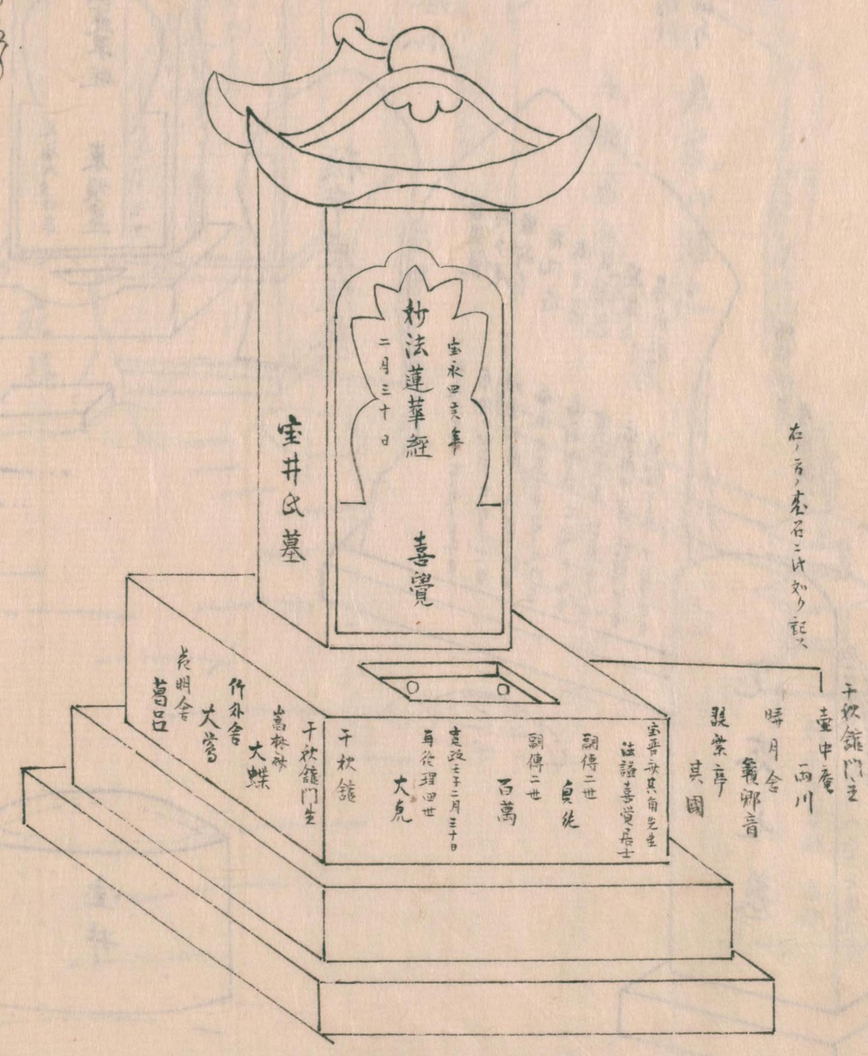


国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』 請求記号 863-233

ガラス使用

同三角墓 此

其戴



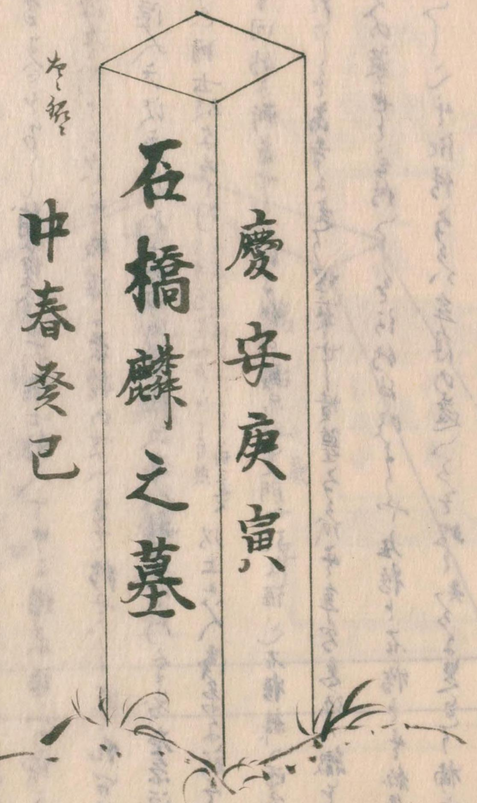
右ノ方ノ表石ニ此ヲ記ス

千秋館門生
壺中庵
西川
晴月舍
義郷音
駿紫亭
其國

宝晋永其角先生
法諡喜覺居士
嗣傳二世
貞徒
嗣傳二世
百萬
寛政壬子二月三十日
再從理四世
大虎
千秋館
千秋館門生
嵩林林
大蝶
竹外舍
大鶯
長明舍
葛呂

右橋麟墓

右同上行寺ニ立リ



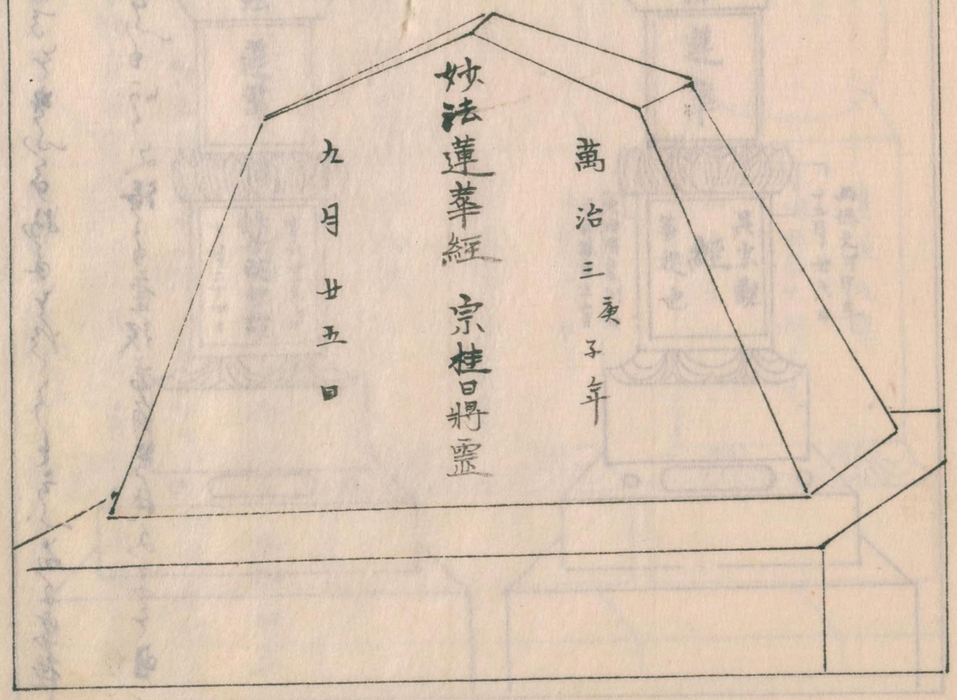
世ニ此墓ヲ左橋忠弥ガ墓ト云傳ル

豊山様に此古石塔を丸橋忠弥が墓なりと云ふは四ヶ世人の誤傳し来りしなり忠弥は叛謀露顕
刑に処せられし事は寛安四年辛酉十月廿九日なるに此石塔には寛安庚寅中春登巳と勒し有れば忠弥は
處刑より廿二ヶ月以前の古墓なるに此にて其説の非なるを知るべし此墓は忠弥は寛安五年
義直元年壬辰九月十三日城中左ノ門基本長治刑部左ノ門といへる老松平伊豆守信綱此郎に来り謀
叛徒黨の老五方を訴ふ信綱西命して其実否を質し虚なるべきを知り即時登城同席に商議
町奉行石谷左近將監貞清神尾備前守に令を下し捕獲する所浪士數人其中に備前福山の城を
奪取し作事猶後の徒兵等老石橋源左ノ門と云老其叛謀に荷擔の吹へ出て待せらる進に九宮殿
上罷斜宮り同月廿一日松平但馬守浪人戸沢庄左ノ門真田内記信政浪人林戸左ノ門金義左京浪人
荻江又十郎北條出羽守浪人三宅平六同士岐久左ノ門（其左ノ門芝切通に於て自殺其屍を塔清に立て今は刑に處ス）以上二人清原に於て磔
刑に處せられ源左ノ門外石橋又源郎も同時に斬首せらるゝ此ヶ件の顛末は寛明日記に詳し石橋辯は源左ノ
門は父にて三年以前寛安三年に死したりしを高寺に送り埋葬せし墳墓なるに其年号忠弥は轍を踏
の叛謀人なるより此墓をも叛賊此父の墓也と云傳へしを何時の頃よりや丸橋と石橋と其称号此
橋字呼るより忠弥は墓なりと誤り傳へし之を訛傳なるは年月の遠へるを以て知るに足れり橋家
七巻の書にて世に流布するものは此源左ノ門は偽作也

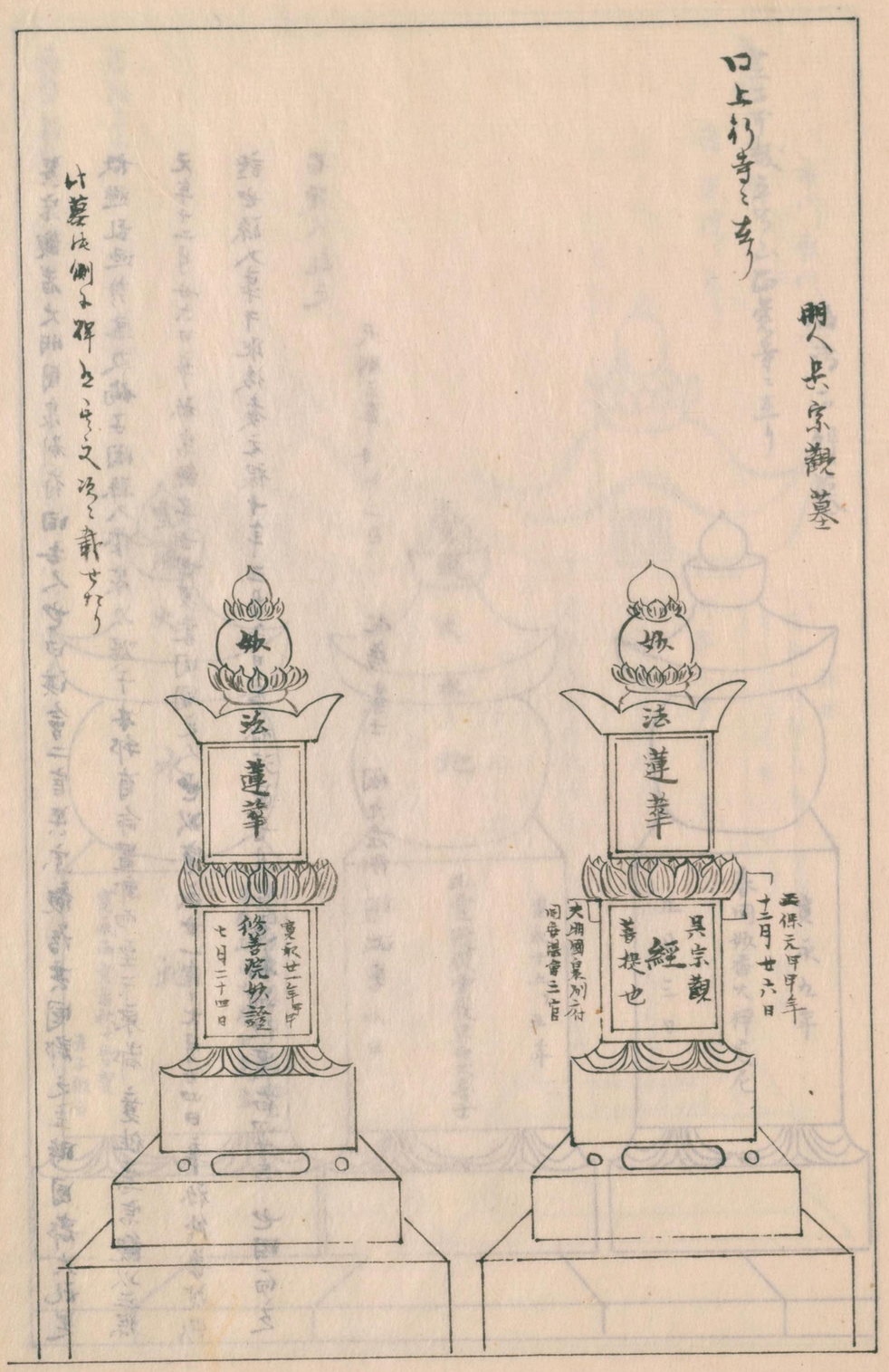
大橋宗桂墓

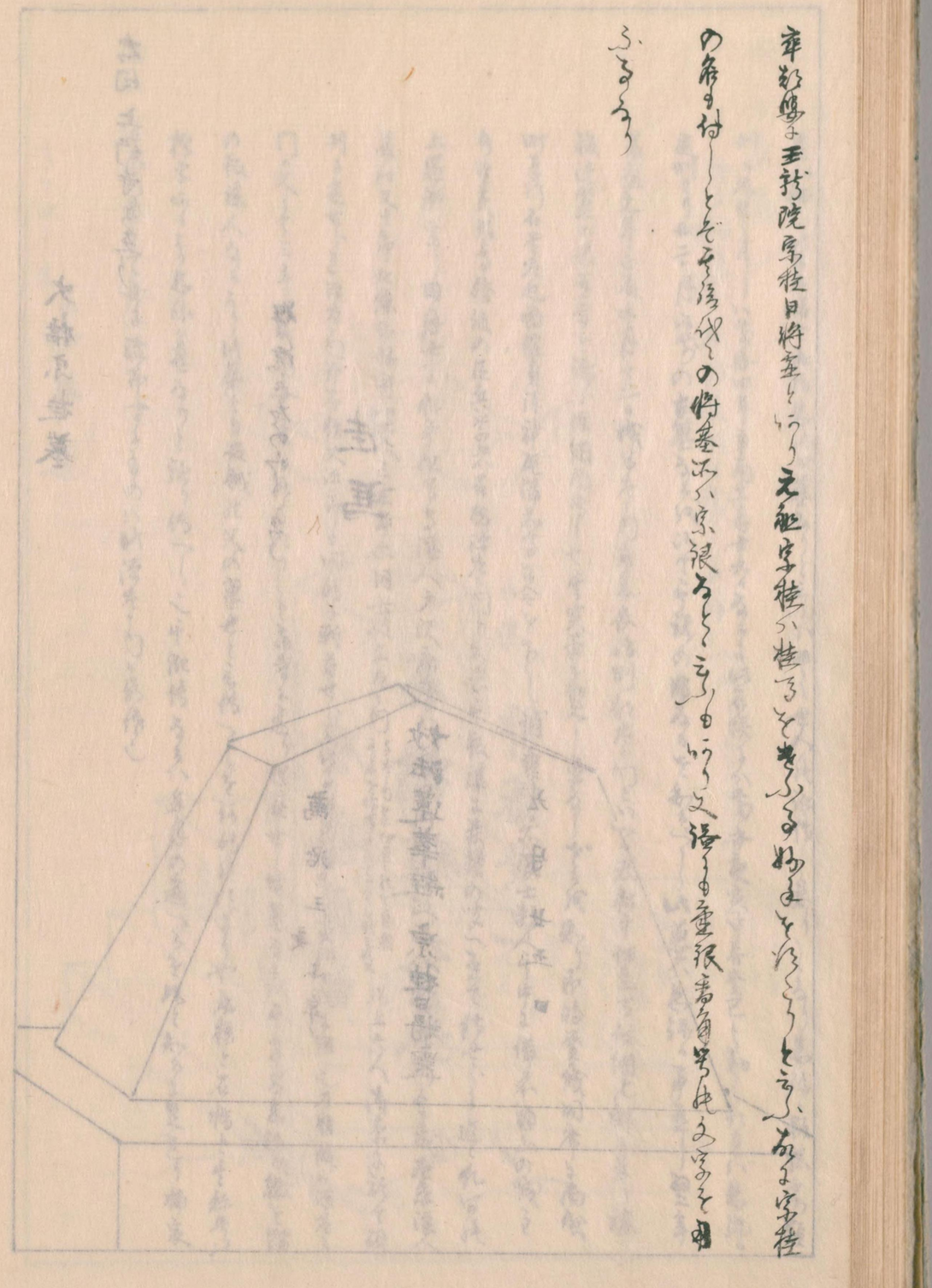
右同上行寺に在り

桂馬



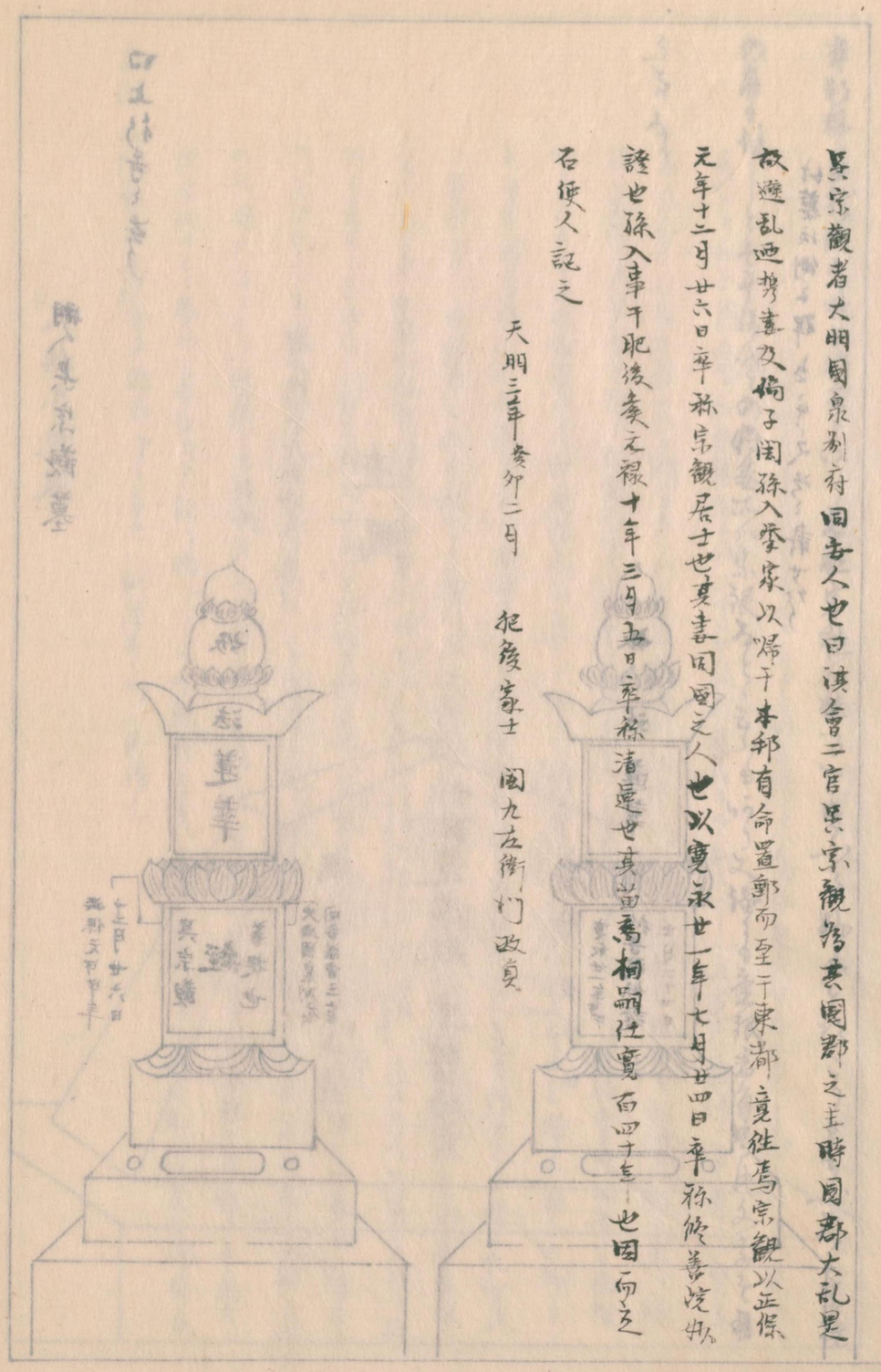
国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用





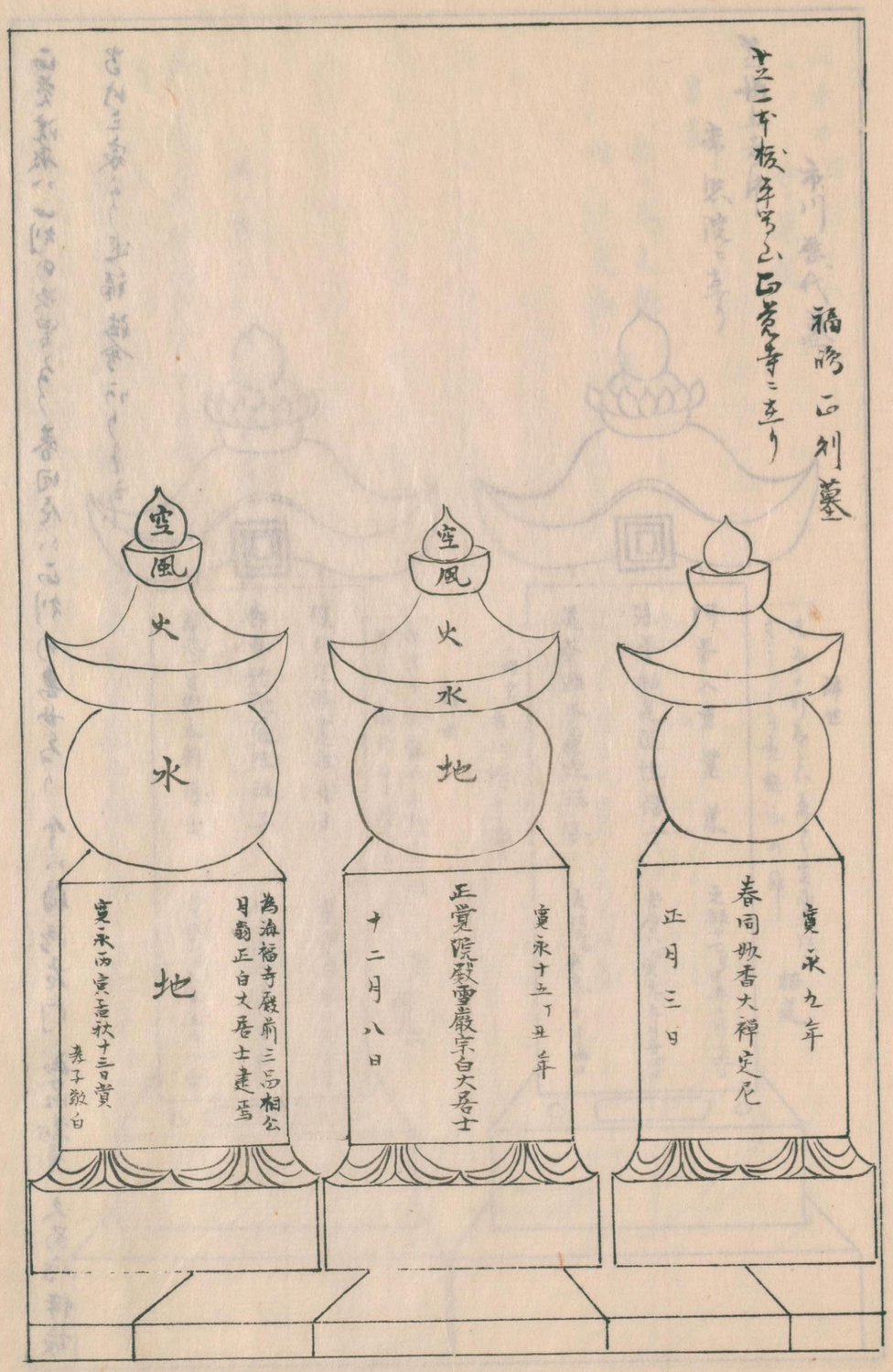
国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用



兵宗観者大明國泉別府同安人也曰淇會二官兵宗観為其國郡之主時國郡大乱是故避乱迺携妻及倚子閑孫入學家以帰于本邦有命置郵而至于東都竟往焉宗観以正保元年十二月廿六日卒称宗観居士也其妻同國之人也以寛永廿一年七月廿四日卒称修善院妙證也孫入事于肥後奏元禄十年三月五日卒称清運也其苗裔相嗣仕寛百四十年也因而之石便人記之

天明三年癸卯二月　肥後家士　國九左衛門政員



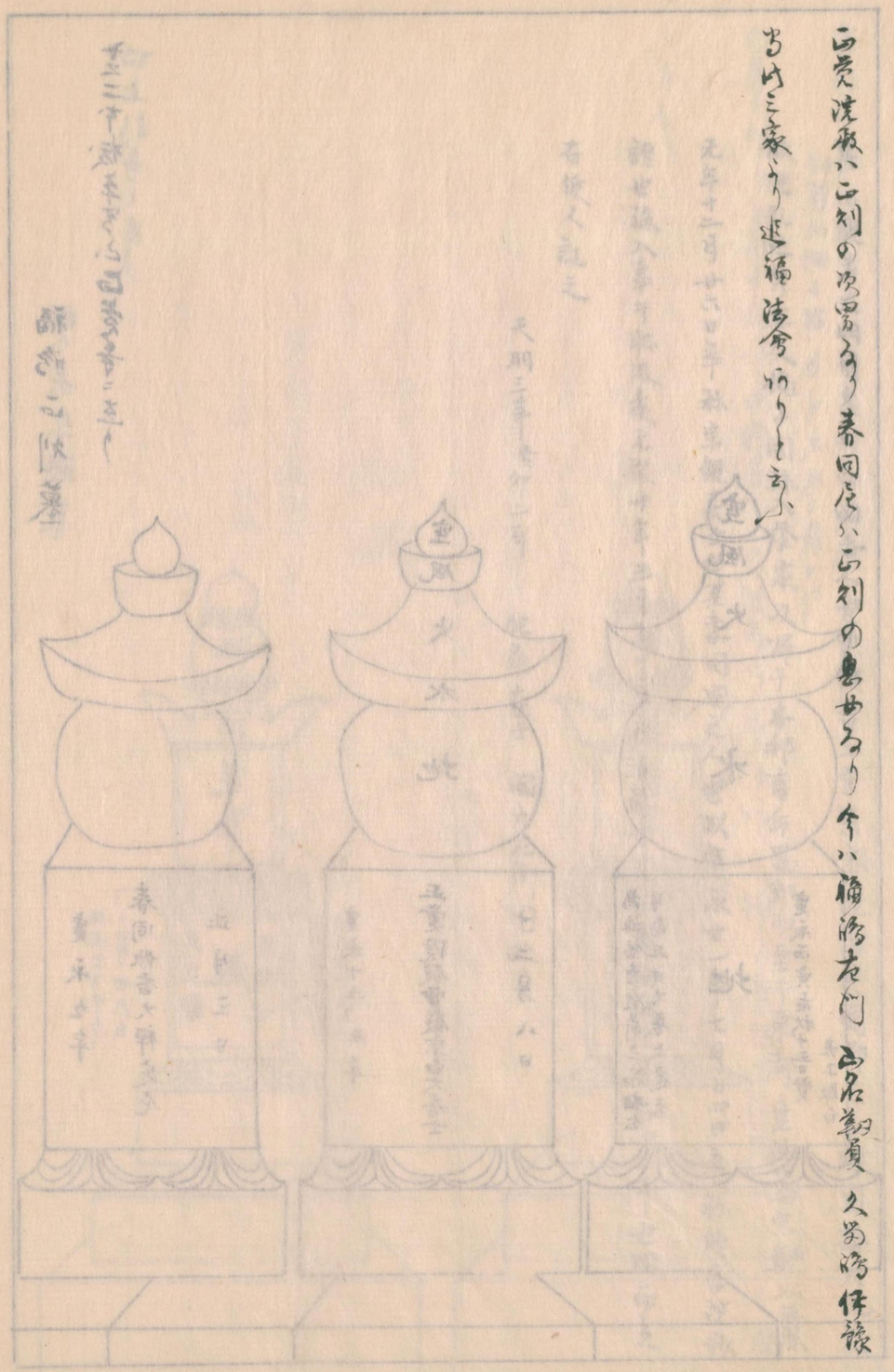
福勝正利墓

十二二本板平野山正覚寺ニ在リ

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

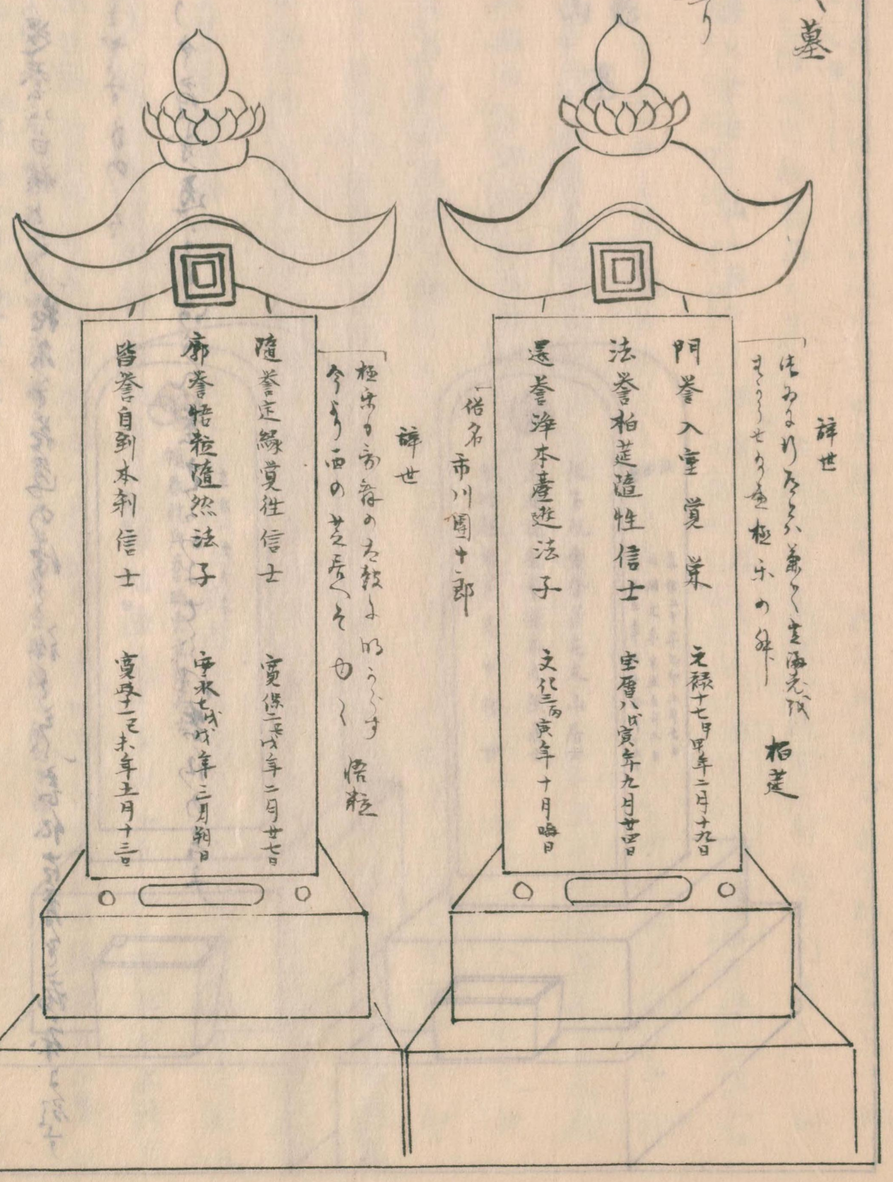
西覺院殿ハ正刻の次男なり春回居ハ正刻の息女なり今ハ福勝右門 山名翔貞 久留勝 伊藤

当時三家より追福法会行りと云ふ



市川歴代墓

芝増上寺中 常照院に在り



辞世

法名なりたるハ兼ゝ定海光戒まゝうしせり是極楽の縁 柏莚

門誉入室覚栄 元禄十七甲申年二月十九日

法誉柏莚随性信士 宝暦八戊寅年九月廿四日

還誉浄本産逝法子 文化三丙寅年十月晦日

俗名 市川團十郎

辞世

極楽の方程の右数に明らかす今より西の芝居へそ出し 悟粒

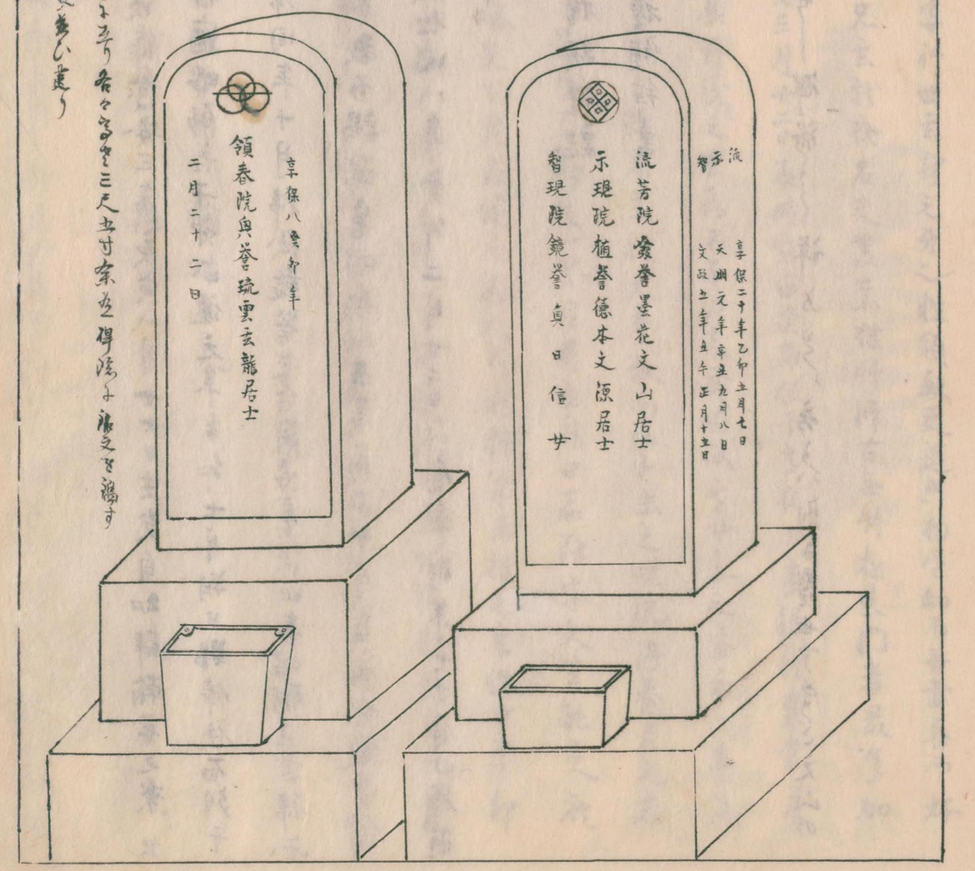
随誉定縁覚性信士 寛保二壬戌年二月廿七日

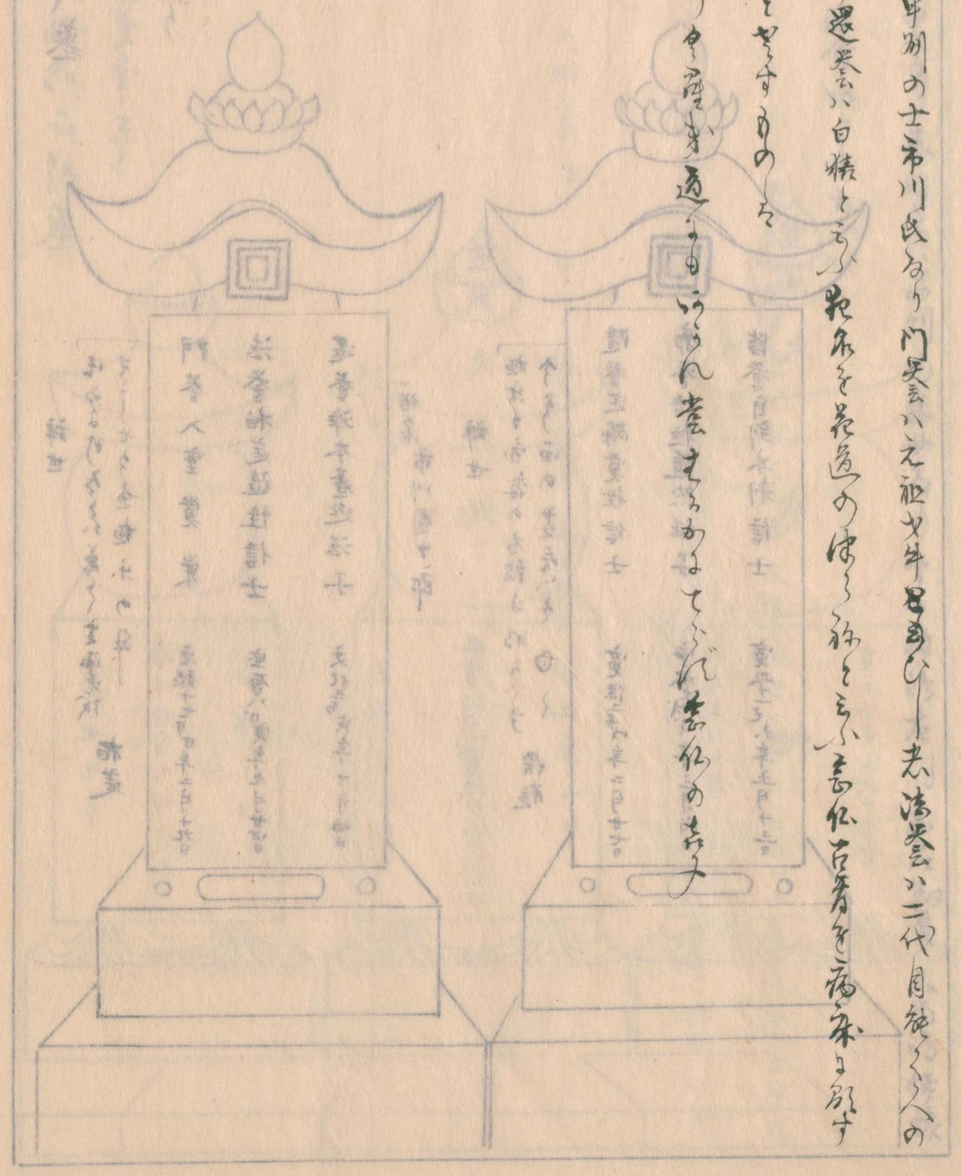
廓誉悟粒随然法子 宇永七戊戌年三月朔日

皆誉自到本剣信士 寛政十一己未年五月十三日

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』 請求記号 863-233

ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

墓碑銘

佐々木氏玄龍字煥甫世居佐名考次帝孝安三年庚寅八月廿七日生矣自幼辭翰蚤之業立
象體之宗天和二年壬戌八月旁謁韓客唱酬若干卷正徳之年辛卯七月朔日賜俸秩而列干
幕下之士制聖塗警尊璉干拜謁之席同年十月韓使聿韓使聿來聘蒙命而謁韓客唱酬且書柬以
叡答之台悶焉享保四年己亥九月奉教而謁韓客唱酬五年庚子十月告病乞骸骨回
六年辛丑六月廿五日辱稟寇命而致仕同八年癸卯二月廿二日以病卒行年七十有四歳葬
武公三孫山下淨運院境内先塋之例

孤孫井上敬治泣血稽顙拜誌

謹建　孤子佐々木嘉猷泣血稽顙拜書

佐々木玄龍先生墓表

詳かなる人物考次を別に整せずして文山の

碑陰之右如此

先生姓源佐々木氏諱潮玄字文山以字行世玄龍之弟之性穎敏夙遒典籍尽幼而善書長而好
学蓺業不通善義顕之論以児秘蘊即今兄玄龍名夫蒙索楷物師古亟件起其門者最多加
強郡矣伯永隨之学矣先生生万治二年庚三月廿二日辰時生田舎歳仕干方松後室孫能業農君
臼府私倉矣男子未育唯一女存而養長野氏之男為子男田嘉武因以為女壻之嗟夙得養老之志
狀先生告老致仕男嘉武継硯而仕事先生難承至於大奎故勿挙玄之嗟夙得養老之志
学享保十四年酉十月二日嘉武殁於是先生有舳生一男呂号立爾曰嘉隆字文生能文於
先生之教慈智書法綾旧業以威于新焉嘻先生老益健而忘人所求揮筆不措之享保廿卯
五月七日午刻病卒于芝地之邸享年七十七歳之墳於三縁山下淨運院之一區慨矣於戯哀哉先
生之与世相睽也名益彊者先生之徳之教治為玄孫外孫之学為業者以文正請誌其麦敬治弗暗
意威之至著記実行実為爾治曰

維世哲人　緝徳既高　墨地智郡　翰墳養豪
要恕愛綏　倹善威化　於戯高士　絶世之曹

表被井上敬治従弟正拝撰
孤嗣佐々木嘉猷文正謹建

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

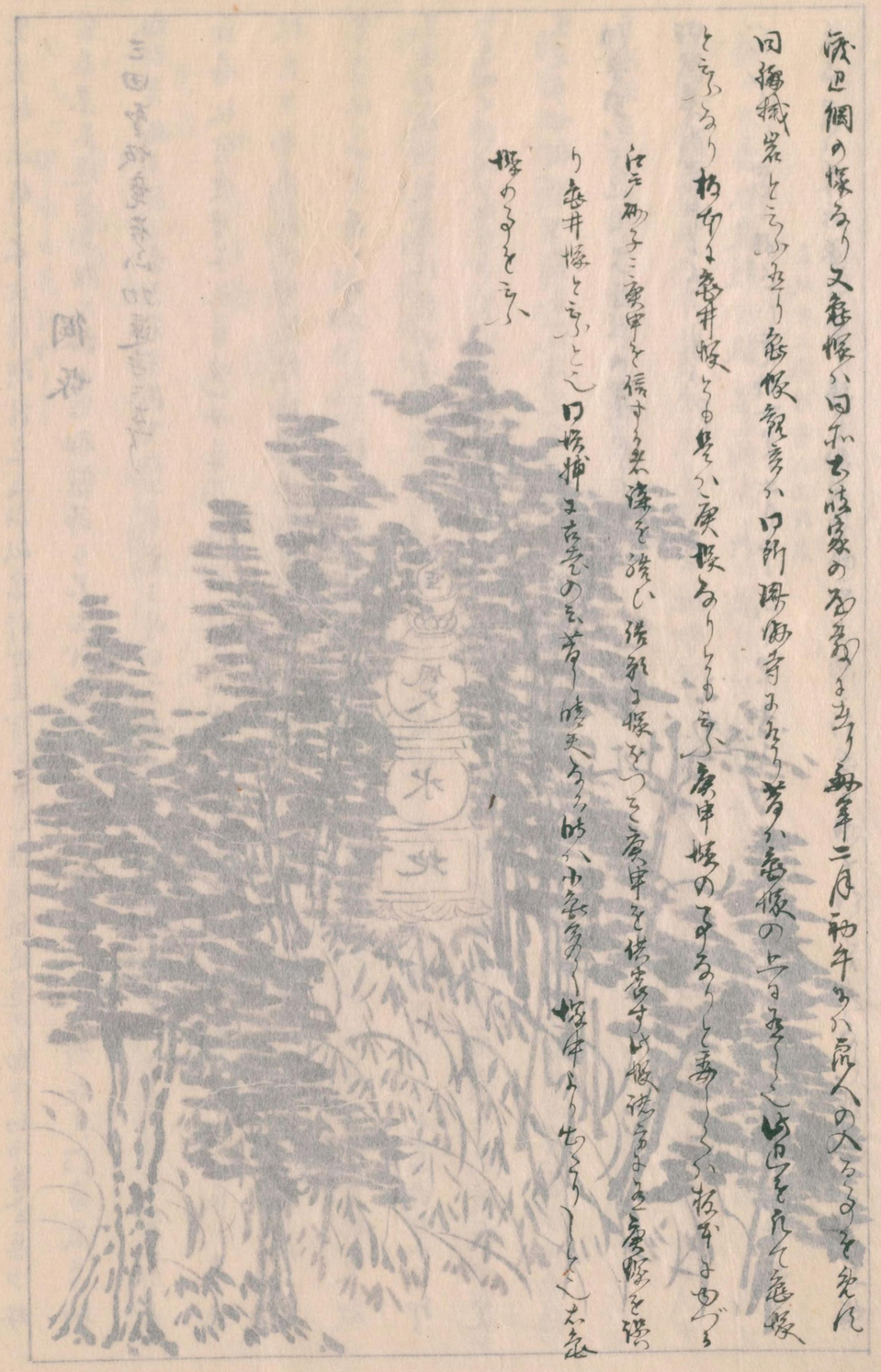
文山名ハ龍衣曇昌堂と称す俗名古物西ノ久保ニ住ス物を好ミ人なり性恵ニ酒を好解
ハいふし常に物なり享保廿年立りて没す年七十七今も住る木古物と云ふて其子孫松平
澄州侯代藩中よりと云ふ
修春院ハ文山氏兄玄務の墓なり

綱塚

三田聖坂竜谷山功運寺に在り

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

渡辺綱の塚なり又庵塚は同和田法家の屋敷に在り毎年二月初午ゆゑ人の入るものを免れ
同梅織岩と云ふ在り庵塚観音は口所瑞海寺に在り昔は庵塚の上に在りしと云ふ此辺を見て庵塚
と云ふなり松本に庵井塚とも是は庚塚なりとも云ふ庚申塚の事なりと云ふ松本に也づる
江戸砂子に庚申を信ずる者深を語ひ法親に塚をつゝて庚申を供養す此塚諸方に在庚塚を謂
り庵井塚と云ふとこゝ口塚捕に古老の云昔し晴天なる時は小庵多くし塚中より出たりしとこゝ右庵
塚のことを云ふ



琉球國

文化三丙寅十二月二日死

正使三度使醫役北嘉親雲上呉兼恩舒昌之墓

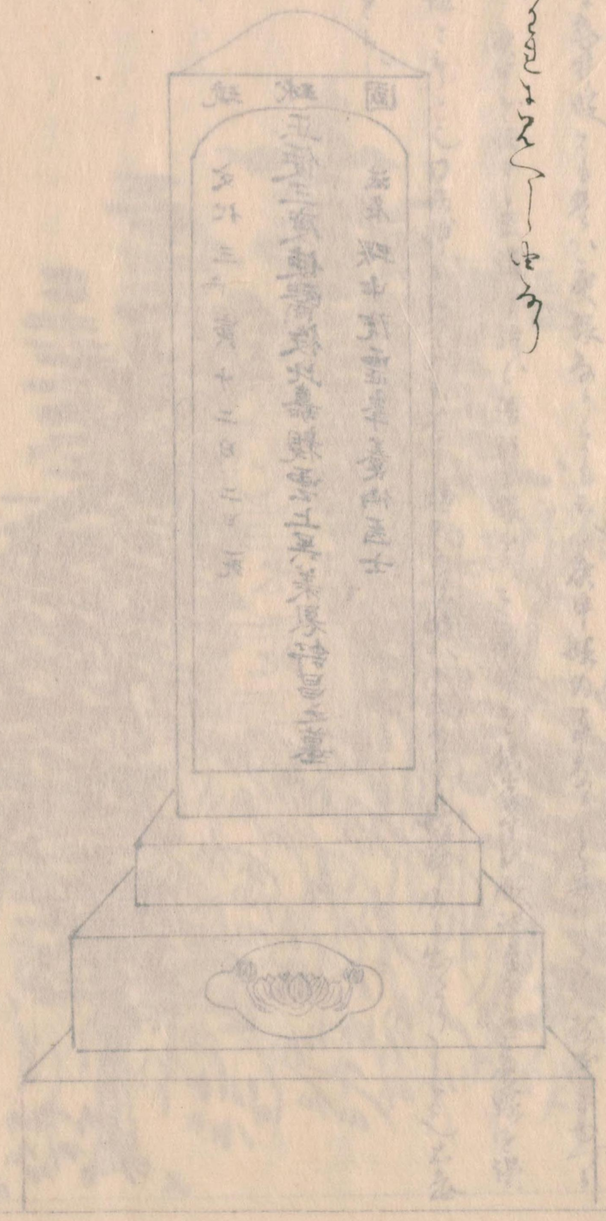
法名 環中院霊峯養仙函士

琉球人親雲上（バイキンジヤウ）墓

芝高輪泉岳山大円寺に在り

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

親雲上ハ本邦の一位二位の位のごとき[illegible]我と此年実本日けて[illegible]雲大に降り天に満り
[illegible]の人と南方暖氣に生れて別して此事に備ふ是時に此都ハ年荒有兵去せしと云ふ
葬の時いとゝ[illegible]

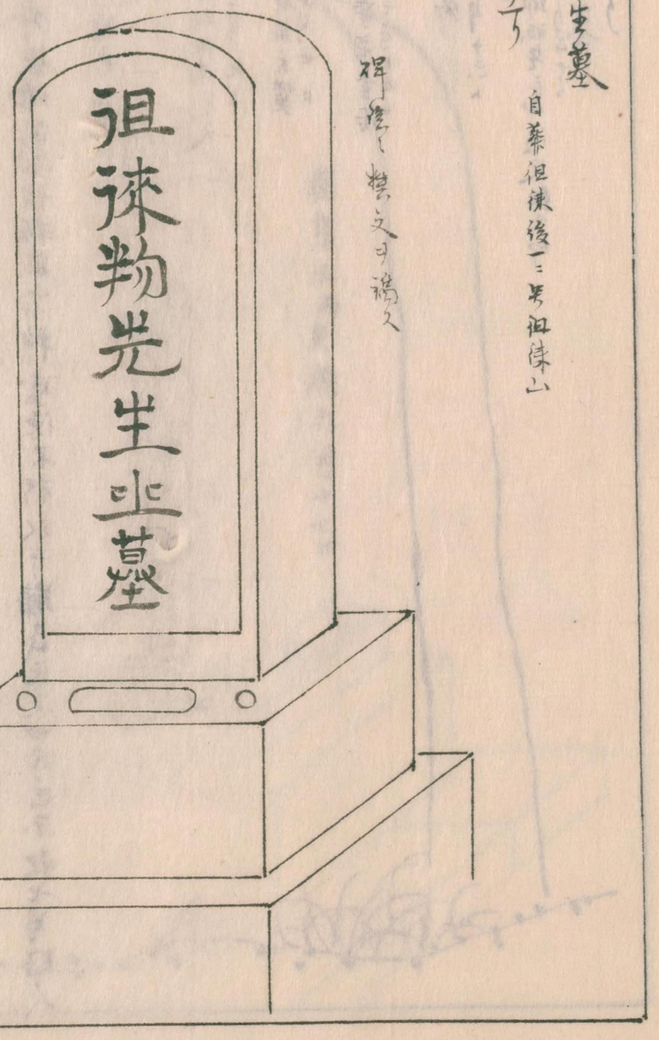


祖徠先生墓

三田寺町寿命山長松寺に在り

自葬祖徠後一二尺祖徠山

碑陰に禁文ヲ誦ス

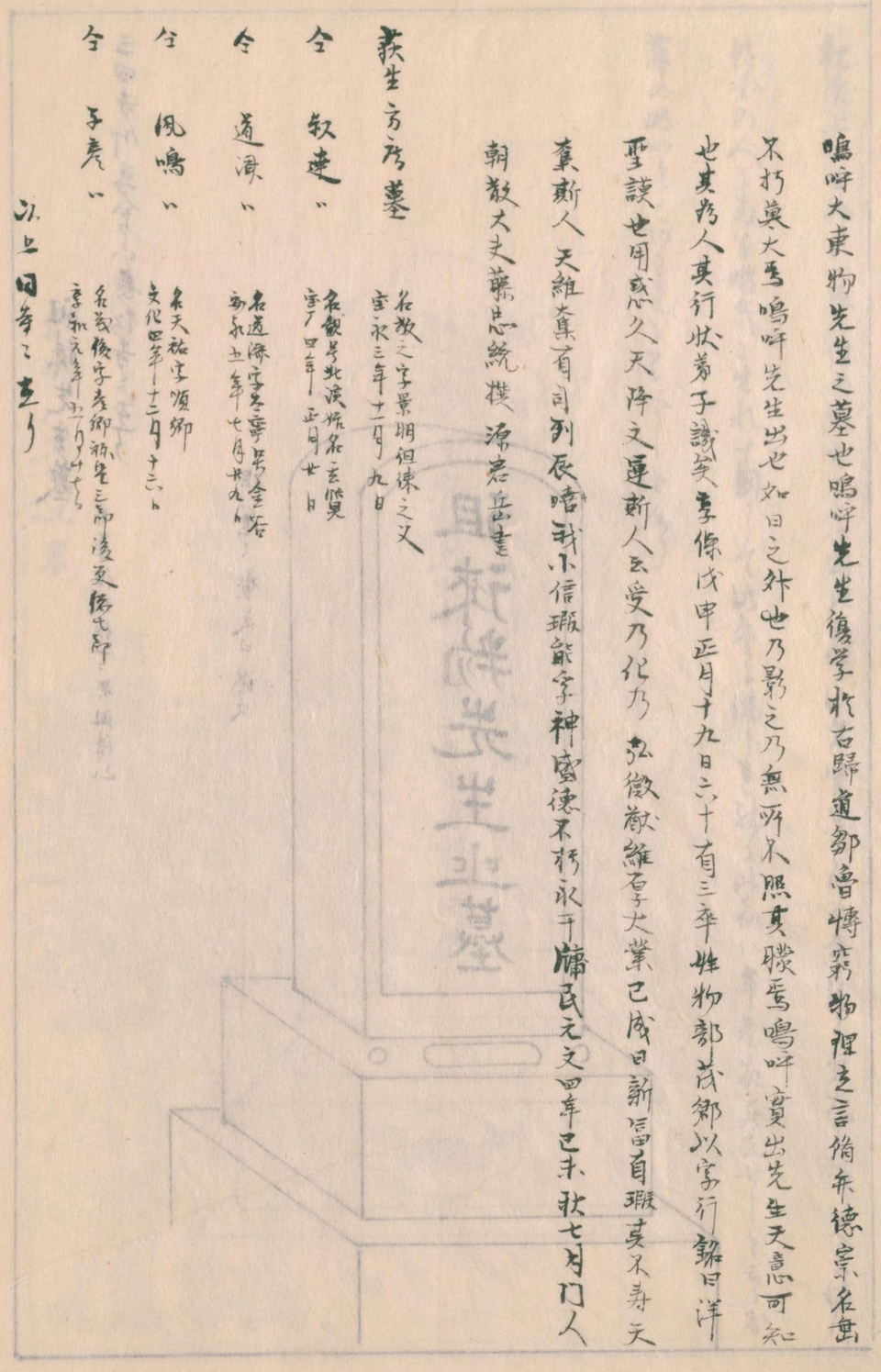


国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

嗚呼大東物先生之墓也嗚呼先生復学於古歸道鄒魯博窮物理之言脩弁德宗名無
不朽莫大焉嗚呼先生出也如日之外也乃影之乃無所不照其聯焉嗚呼實出先生天意可知
也其為人其行狀弟子識矣享保戊申正月十九日六十有三卒姓物部茂卿以字行銘曰洋
聖謨也用惑久天降文運斯人云受乃化乃弘徵猷維厚大業已成日新富自瑕其不壽天
棄斯人天維棄有司列辰嘻我小信瑕能孚神盛德不朽永平牖民元文四年己未秋七月門人
朝散大夫藤忠統撰 源君岳書

荻生方房墓

名敬之字景明徂徠之父
寶永三年十一月九日



令 叔達〻
名觀号北溪姓名玄覺
寶ノ四年正月廿日

令 道渾〻
名道渾字冬寧号金谷
安永五年七月廿九日

令 佩鳴〻
名天祐字順卿
文化四年十二月十六日

令 子彦〻
名茂後字彦卿祢生三郎後更稱七郎
享和元年五月廿七日

以上同寺ニ在リ

八木八郎墓

同大同寺ニ在リ

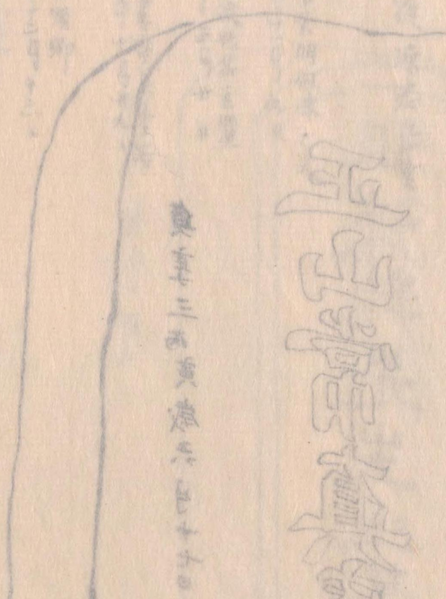
貞享三丙寅歳六月十七日

正山常真庵主

薩州生緑 行年十九歳 八木八郎

国立国会図書館 タイトル『江都古墳志』 請求記号 863-233
ガラス使用

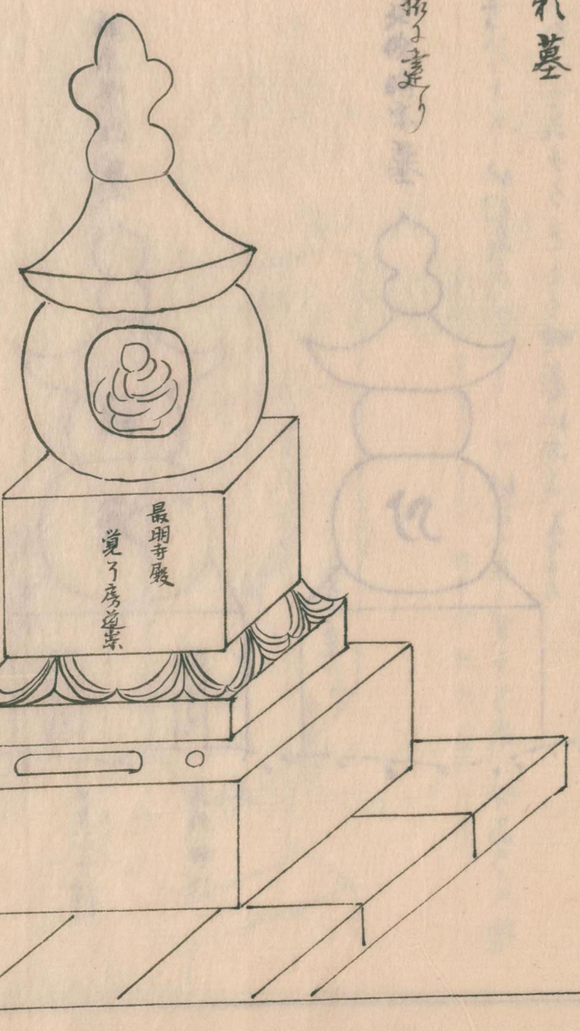
是ハ薩州侯の一士剛力にして十九歳の時此屋内石を背負ひ此ハ侯を御免人と尚吳の忠ひをなし
まゐり又其ハ二ツにて是を驚かし二ツにて割ハ同ことなれハ勇士にいふ所にて手打にして殺し候り其時負
ひし石を以墓印とす之中石なり樹に又ハ云ふ是を驚かし割ハ同ことの語也時ハ石を負ひ
時に定めて廣言其氣自讃の事り難き能のなりとて此又も何ゝなく自然に為ひしなるべし
惜むべき者ものなり



北條時礼墓

品川補陀山海晏寺に立り

本堂前船に建り

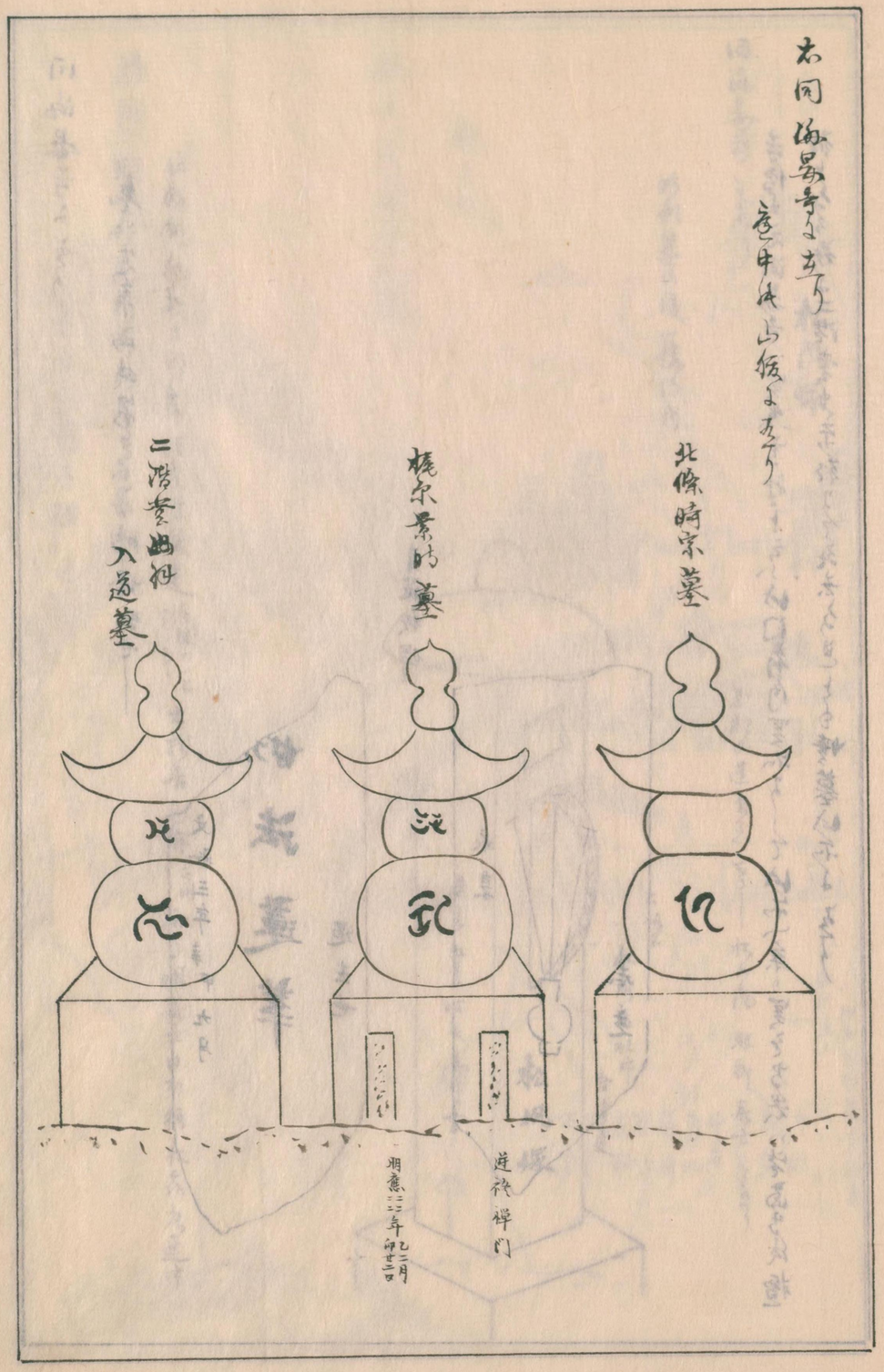


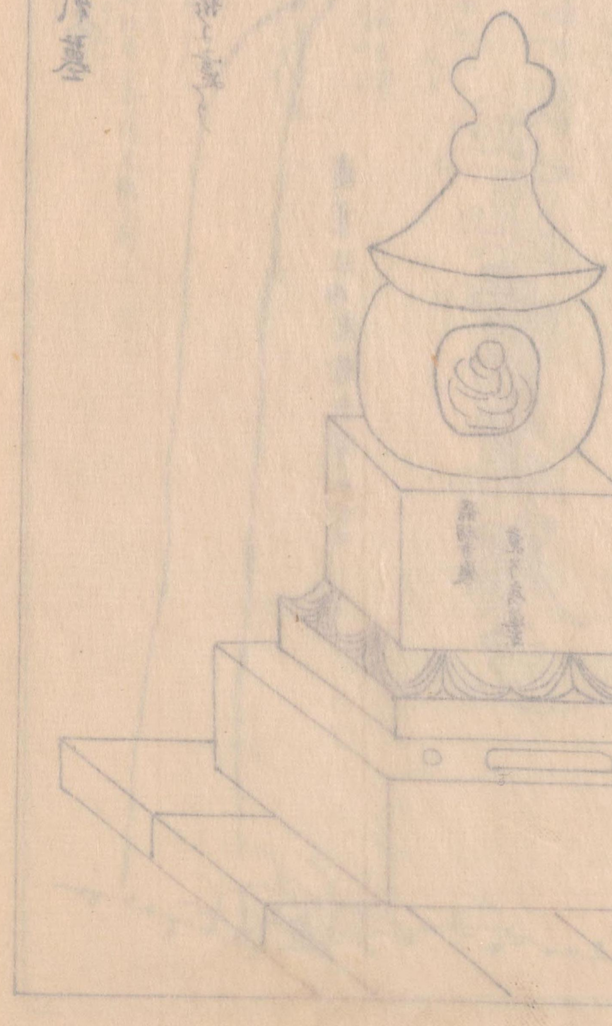
法に

弘長三癸亥年十一月廿二日

正五位下行相模守平元師時頼 と云り

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

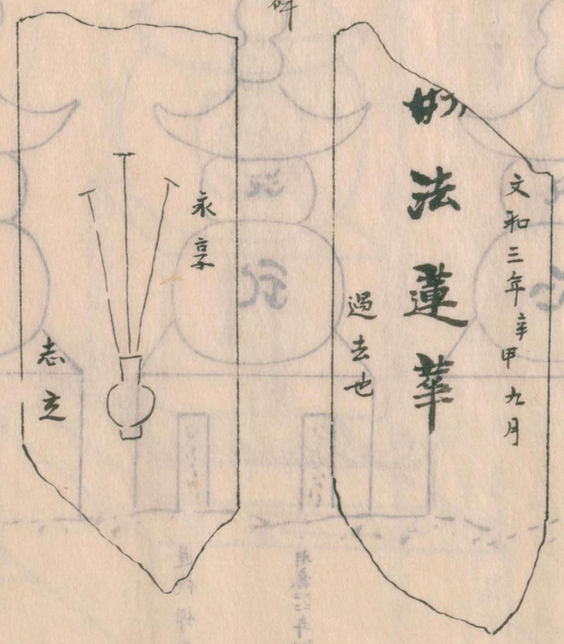




国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

同海晏寺にあり

此ハ先年山城郡ヨリ此ニ移ス時堀出せしものとぞ

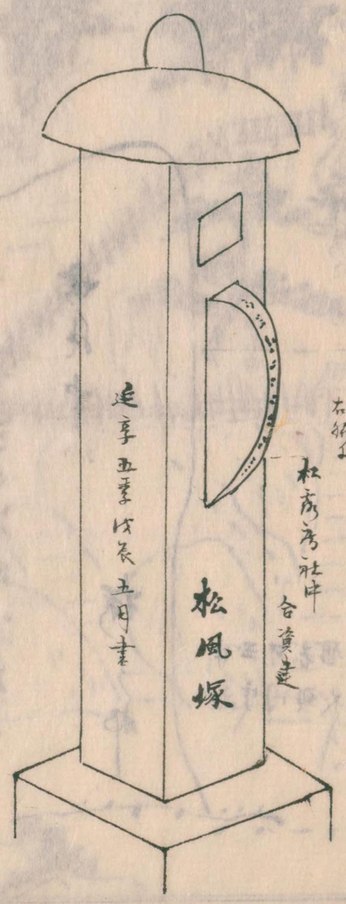


寺僧云元海晏寺ハ冥界寺ニ在ル此門前内冥界にして此和ハ案り冥を出る者ハ皆高サ紙櫃ヲ以テ二階堂も京都にて死去ハ見しとも墳墓此所にあり

松風塚

同海晏寺にあり

時郡墓の後一株の内

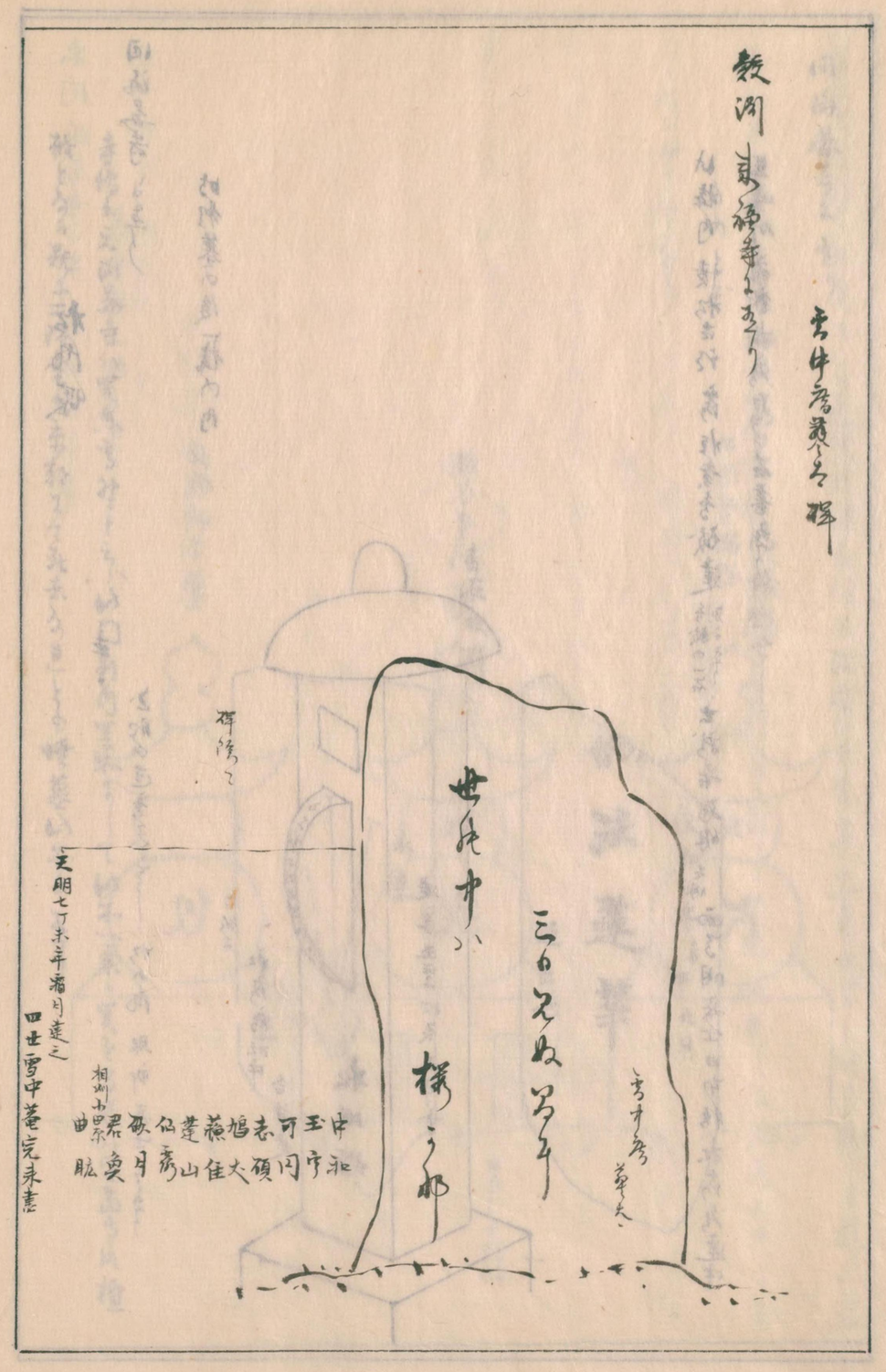


車ニ

五郎の蓮座ニ在ル 松の風 眼都居士とあり

此株内 墳松古銘 霧桓奏寺 破建 今鉞の一名別にあり 古銘居 西門 右銘 西門 明居士 日本 松斎房 建中

馬喰所森新樹房白ヲ 右墓あり



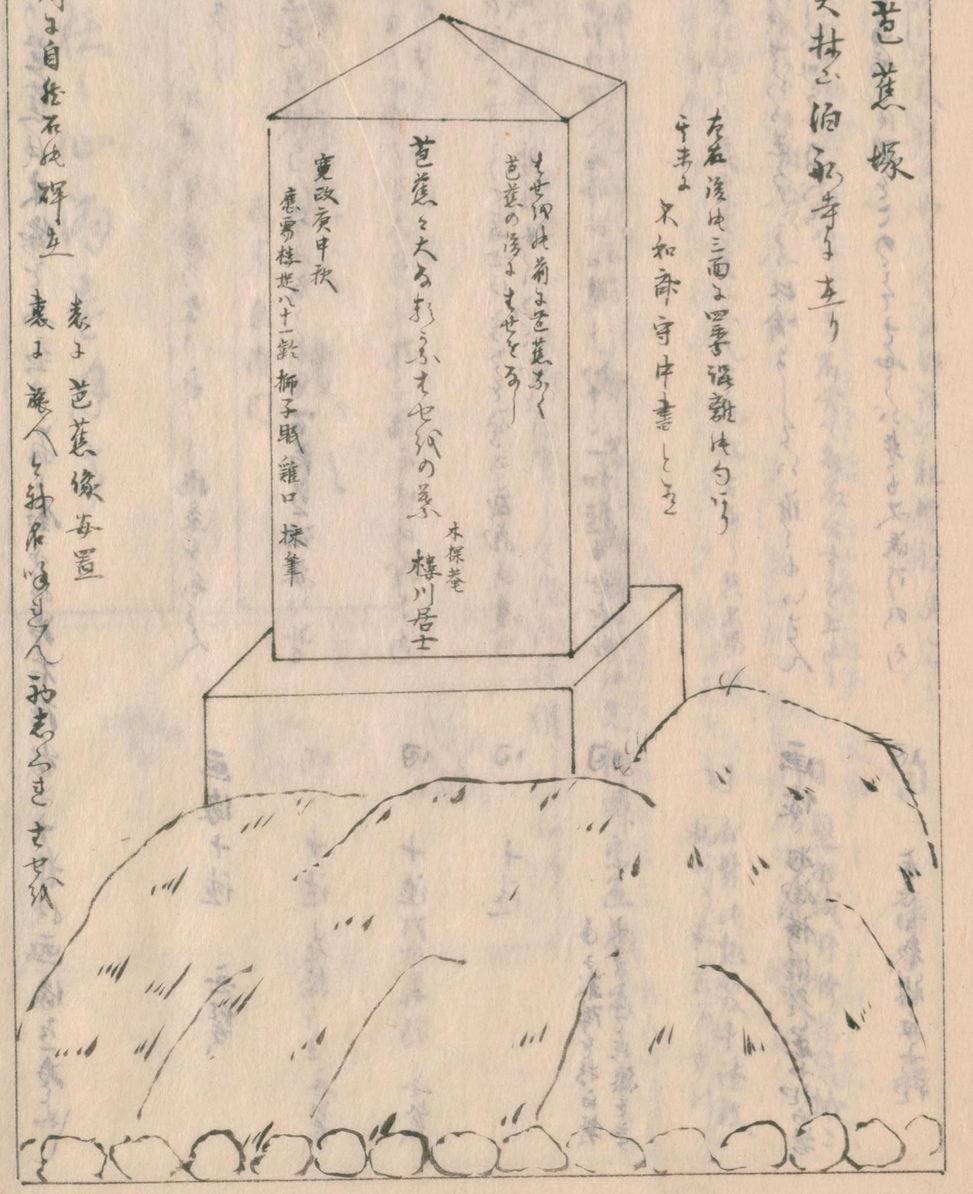
国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

梶原屋敷と云ふハ今来福寺の下より隣境松平正佐侯下屋敷の所之松原松は古来此ハ枯て後
此松も大木と成りて今ハ正別侯屋敷内に在て此地ハ来福寺地なるを中間に佐侯へ造かしたるなり
松原に八幡太郎諸城松田所ゆゑ下に立
平来由知ればとて此松なりとなり
梶原塚如常
松原に梶原一族の塔高寺に立りと云此塔を云ふなり又ハ此
国賞山再校松原に一族の名塔も行るとて云ふ此塔のなるや
又名木の名称りとて来福寺内堂前に松一元とを植て梶原松と云ふ又梶原定命様も古来ハ枯て
今ハなし
当侯云ふ南時神田和田ゆゑ池辺に小名なる所に
梶原三郎と云ふ人此事係なりと云ふ

芭蕉塚

荏原郡大井村天林山泊船寺に立り

左右後此三面に四季絶離此句なり
平来に
木和斎守中書と云ふ



高寺此門前に自然石此碑立
表に芭蕉像安置
裏に旅人と称名呼ぶ人和志ふき其世紀

高寺に芭蕉堂あり芭蕉の末像を安置す四月の厨子の右右薄板に十哲の画像を左に如し

右に座

其角　稲荷に四つ人はすべて発句なり難し風景を知る人
　　あまたして多し

風雪　花木生法花恵恨句は其に多くふて四花を語婆は聖
　　新きに無し

枚風　何を物の方と四時全き花盤の陰に獨生味の淺す所
　　多きを愛す

椰隣　師の東行の殿にすすりて冥士の言ひを驚き武蔵の慶き
　　をうふ誠に風雅は聖の如く山にしたし

國母　我口業は余仏と句に無益の口業といふ一切経は世色の
　　口業なる無し

右に座

去来　種ある柳の芝なる志るしにふ比喩にしては誰にもいさん
　　直にさいるとは以ふで乃ぶべき

丈艸　不易の句は高時其の雅をこのことにすべしは其も又流行の句
　　と以ふ無し

画像十徳　無髪

同　十徳　右猿を立無髪

同　十徳　路中斎持無髪

同　十徳

同　手に数陳を持白髪
　　女手にて任猿を立

画像　如織稀招是黒小袖白髪

同　三衣に数陳白小袖

支考　古の御諸は如来禅の如く今の御諸は祖師禅の如し

同　十徳に白小袖

許六　師の発句は百合物と思ひ侍るべし二ツ百合て能成合すを上手と
　　云をりしをこゝろ教なり

同　恵羽織野稀柄袋械こ
　　ろ大小月代刺

正義　芭蕉翁変化しより後定て変ぶらん其風物をなし只不易の
　　句をなめしまん

同　白髪の抱髪十徳段
　　柄あり如意をもつ

何もの秋樹の草画或人云右に十哲は高時椰隣五世の先椰隣宗道納ろ所にして
今に年に十月十二日芭蕉忌に此所に参して風流の催しあり

厨子の右招の聯

宝山の法雅の変相

赤崖恵澄門

同　右招の聯

李杜の心胸を月高

我老師を何故
なふ人々ハ雲
洞風木度して
跡なうしんす我
恨ハ有客也

芭蕉堂之額

世間花

雪江照云

是ハ前此厨子の上ニ掛ル

寺僧他行して僧ニ留ハ右芭蕉像ハ森市高時牧世叔太郎家ノ調むと云今ハ三原郡と云清水君近者夏

御所如と云ハ祖父を三條御父を多内と云 或人云多門存在し時彼宅へ至り家伝を知くのつゝろを一見せしが其

時代前此木像在るをゞ哭うれ至しくハ多門の男雲岩和尚 朽木慶慶中にて俗人なりしが

彼家ニ何見ゝる木像にてハなきうと云今按ニ右ニ芭蕉堂ハ案外と称ふいて中ニ来三年

以来ニ建し堂とも見へ又云多門ハ家をハ此様しく人之

行ヶ森 馬石

行ヶ森八幡社境内ニ在り

高井 二尺五寸余

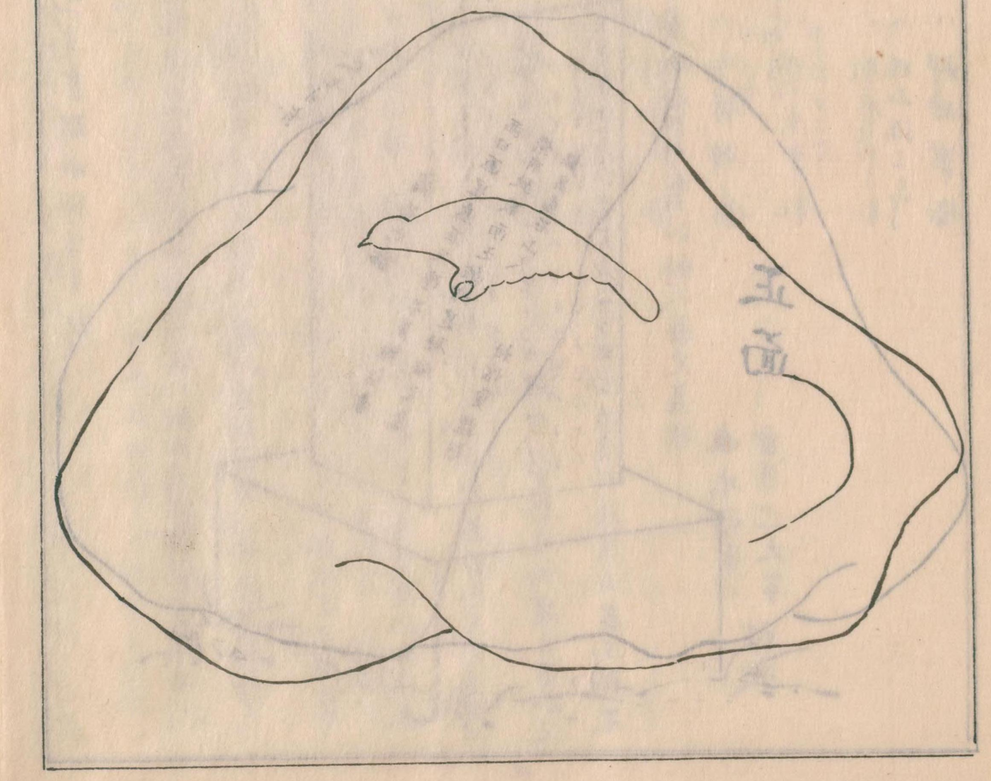
横 三尺九寸余

磐井神社ト云別當八幡山寒巌院 出京

神主義田隼人佐 板本ニ義田舎人尚明義

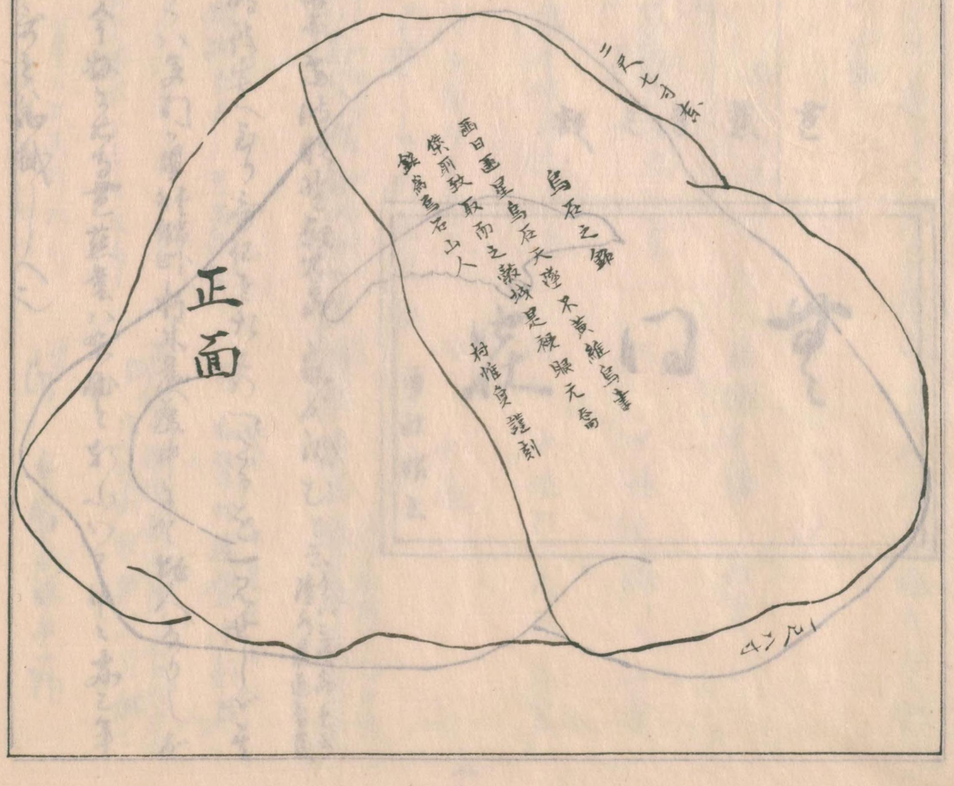
田左京近来式云磐井神社条神石清

水勅請例条八月十五日



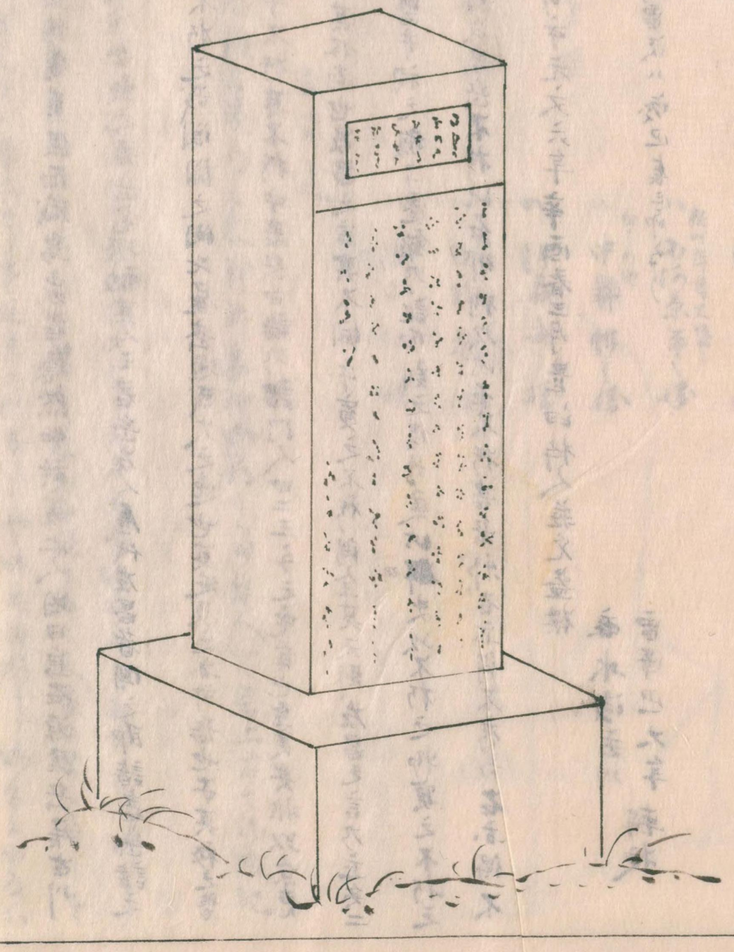
同石横ノ碑論

右論世ニ明ニ南郭先生芝蘭好根
彼郡小石ニ門 彼元高ニ云 村惟貞ハ村田
好七なり



右同所ニ在リ

烏石碑



国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』 請求記号 863-233
ガラス使用

烏石碑記

烏石碑記　如此八分字ニテ書碑同隷字ニテ記ス

烏石本在麻布邑古川第二橋傍腹有黒而咸烏象者隱然如於爰止人因曰烏石源君岳居古川因自号厚後家于赤羽其門人今春致之君岳宅以配其人云君岳友人屋代友昌者聞之即詣君岳語之曰豈烏石之奇大奇之邪乃不不朽之哉閭閻之間比屋密邇或火之逸也其延及之亦可恐也子其移之磐井祠比奇鎔石以全其天無寧不朽其不朽乎君岳曰諾乃謂門人曰二三子之覺奈也至矣其非以余惡能及之二三子以此怵余亦唯因其好尚也友昌之言其不聞乎賓之不朽得全其天則友昌之言乃立矣二三子之志亦成矣門人遂移諸磐井祠之腹子遷鎔乃記而刻之僕為棄此碑史以不朽之物寘之不朽之地不其不朽者豈不不朽哉柳以君岳不朽此石邪將以此石不朽君岳邪石亦得不朽哉石亦得不哉崑石生禹烏石生君岳亦不可乎元文六年辛酉春三月豊臼杵人莊允益撰

森水淺去川
雷澤巴大年　輯校

私ニ記莊允益者莊田平五郎麻水ハ淺野玄川雷沢ハ淺辺長三郎なり

碑之裏

巨山平國豊　ハ巨山弥三郎
鷺洲高美啓　ハ村上年格
鶴橋　猪英泉　ハ加茂英仙
南山　猪貞景　ハ伊藤三郎之傳
中巷河　保勘　ハ小河原平之傳
渭湖井脩興　ハ中井伊之傳
西涯　猪豊昌　ハ伊藤安之傳
芝港野相由　ハ天野茂之傳
西湖深高豊　ハ深山仁之傳

合資建

寛保二年十一月十八日有徳大君行為城之境為之衰神祇無細時務之事年人一二云上右之時成記

深之事

再校板印ニ舊石境内ニ在ロ而大斗り石純面ニ多の形ちなるを此ハ其内此石ニ在て新布古川町より三田の方へ行ハ三辺ニ在ル寛文正慶建時用ニ此りしと書より何の由緒もなく人家の所ニ在りしを或人買ふて此社の境内ニ納め碑文なと漫作せしを近家の所なりしや時成此ハ行ハ時分ニ出るハ社地の更へ志りそけられて今ニ在り世俗舊石といひしを寛石と云ふ事古ニ名ハ前版とハ無

布の所に証五今改めて家に于古き輙きを称すと云ふ

右祠元来ハ鷲石を祠つく神とあせども尚ハ義之に五右軍の神号中にし廉務明神と案ひ
梅に鷲石ハ義之に比し義之ハ廉務に比するものハ廉務にハ雲石五て明神定めて右に祕するの神秘なる
なるべし夫者に右者に廉務と案ひ出るの何も王義之の廉務に比するいはれ見えず但し右軍の文字を廉
務明神の神代の副将軍なる右者に混合して如此の何も義之の廉務のことを曹武の称くるに比論せし
ものなるべからず

東郭の出に　鳥石の右脇に得五南郭子孫に出ハ右衆にして鳥石葛辰鴻に右前と聯五右の如し

鶴鶴明珠笠為雨

明和元年八月　藤定福

右ハ梅小洛西三位参議定福卿なり

僊峰蒼海於森風

狸塚

詮数八幡境内に出り

狸塚に右の如し出り
市程を好み常に傍に飛養し又
其衆を画くるの数年有に変学多
く捕えりて遂に此塚をなれるに
出り

文化六己巳年八月
貍庵　成田朝辰誌

此腥純學懷ハ新橋芝費ト共ニ於ケル成田源千帰と云ふ事あり

此八幡の森を竪義とも云ふ八幡宮今茶やの新茶ヤ先年今日屠白蘇と云ふ宗道居住せり

其世紀の像を作ふ廿年初歩ニ江都橋所ハ移ると云ふ 按ニ此寺ハ唯ニ書ニ書ニ見ヘタ

又云鳶石碑側ニ

得筆處

東都處士赤峰劉長和

同時先洗根ニ

烏石川竹岡先生書学碑文

寅政八歳五月之

比翼塚

荏原郡下目黒村入谷不動ノ女ト先

東光寺ニ在リ

江戸砂子ニ東昌寺ニ在リ

武蔵國風土記作昌龍正之

東昌寺ハ神奈川駅青木町

往還ニ在東青木山西光寺ノ末

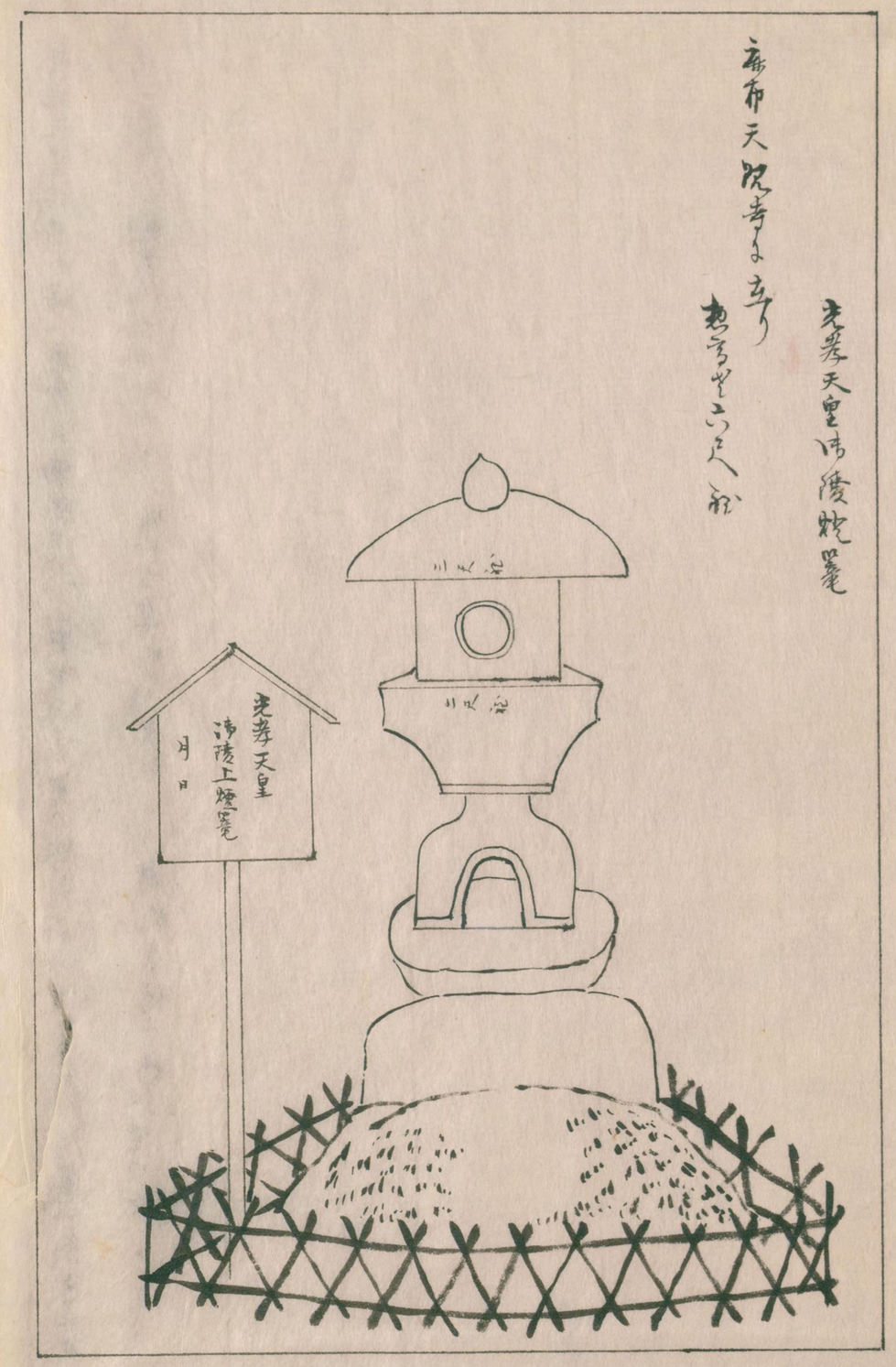
西光寺ハ小金一舟寺ノ末ナリ

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用

右ハ多居左ニ傳徒ハ其年井椎ハと新吉原傾城小栗ハ嫁ニして能く人ハ知る所にて
世に名高く墳上に一本ハ檍ハ枝に紙を数多結付たり俗ハ保路と云ふ事を此様に形る
と云ふ此二十年前後とハ東光寺廬西僧寺にして君に門戸を戸さして猥に人を入れ見ず又
内に豊富ハ剃髪ハ所にて此所にてぼろん志も豊をぬくすと見えたり今ハ住荒して住院
もなり新く無住同様ハ称にて昔ハ有りけるなく人入れとも誰そ咎むる犬ハ喪さへ
まれにして東光寺ハ同所滅安町（不動門前町）に寓居して幽なるさまなり（板本に東品寺同江府廬西僧の住居豊喪所又ハ吉原と云ふ）
附て云右小栗ハ此ハ今立里謡ハ時花に　さいく様に有せ弱何なく弱ハいさぬハ花に数と
えてきやせしを小栗ハ語に
郭に五町ハ古ゆる五穀に記と何ハ云ふ五毒と志ひて是を倹ふ
是さへ是ハ心ハ弱ハ何ぞしこふ
又小栗に返し人久しくうちくを持こなひて遊ぶるも有ぞで花を持へて多をお

こせし返るに
見事成花送ぶせ是時傳へなりて詠ぬれ此程ハ此こゝろせ此よし若我
父ハ罷なりでハなりしとうハ此ほとの語ハせぬハぬ所といとこゝ所へるしう
こそ此へ世にハまく墓ハ神ハ所ハなるまハ此花ハ神ハ所ハ所ハ是ハ
ハぬ所ハ名を人にてなりすといせなり
右小栗ハ多生読ハ至て学のすこびう所へしてあるしと其高時五十前後の人ハ知け
なき時見こゝろとて語らしうハ家に記ハ
是云右ハ多ハ古雅にして風流の物をむきこ中に高時ハまさへ是の文章とハ思
白ハ多りしなり如とくハ此多ハ父母ハ前へ出して被露しこりともさして東西に及
ハぬ文章とてかぎなりの遊びいるものなや
豊山日小栗ハ延宝ハ此新吉原にて五名ハ粧妓江戸其輪の産にして親ハ為に家を
川竹ハ渕に志ひぬ河部其後当徒年井椎ハと作く別深椎ハ語ヶ数に新て禁刑に行



光孝天皇沛陵煙竈

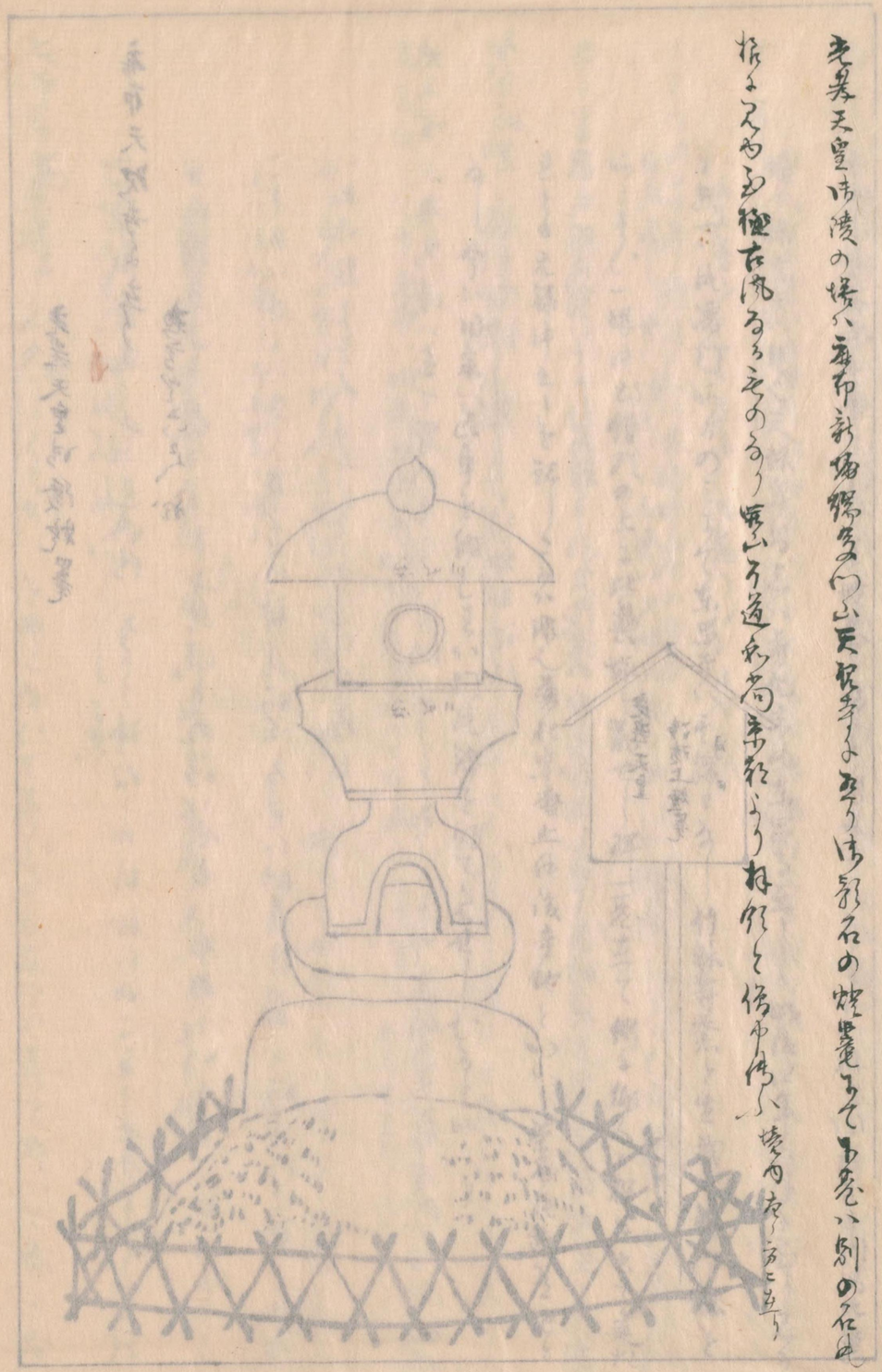
高布天皇寺に立り

熱高さ二十八尺 社

国立国会図書館　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233
ガラス使用

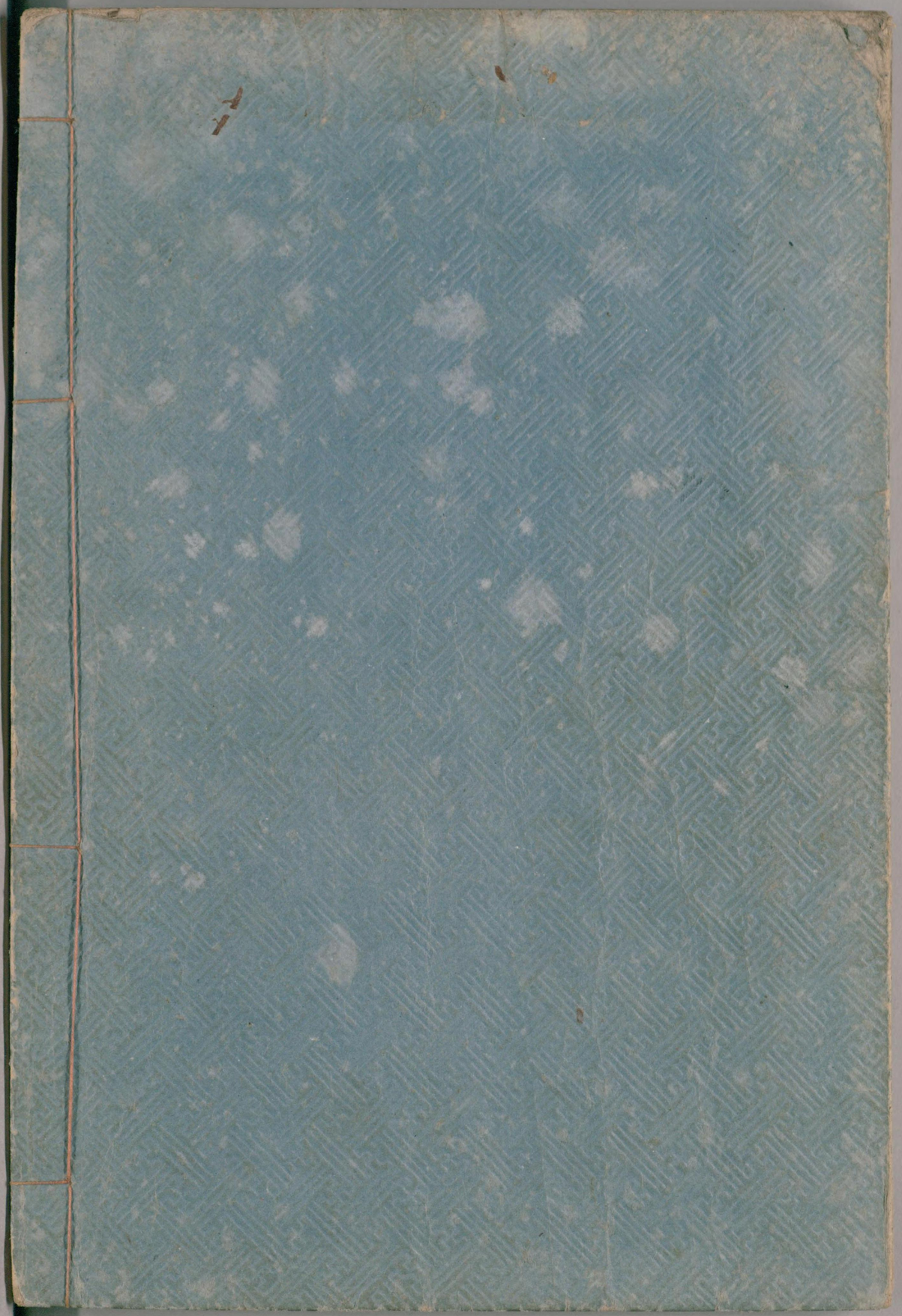
863
3
233

19788



国立国会図書館　　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『江都古墳志』　請求記号 863-233

ガラス使用